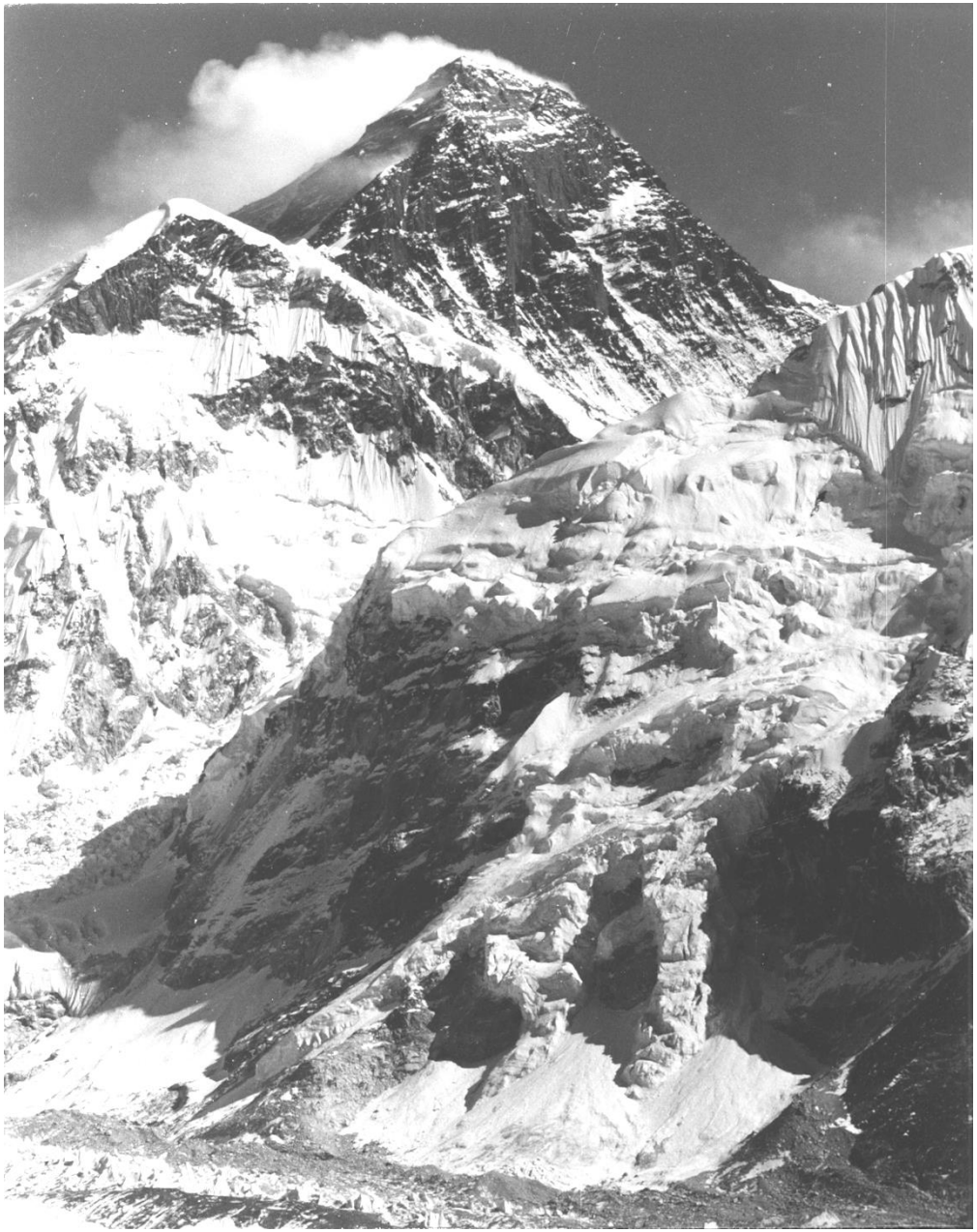
頂（エヴェレスト）きのかなたに

もう戦争の時代じゃない



田（た）中（なか）文（ふみ）夫（お）

人にはみな
それぞれの頂き
（目標／限界）がある

命をかけ
一歩一歩積み重ねる努力
辿り着いた
その頂きのかなたに

ひとは
何を見出すだろ

頂（エヴェレスト）きのかなたに

もう戦争の時代じゃない

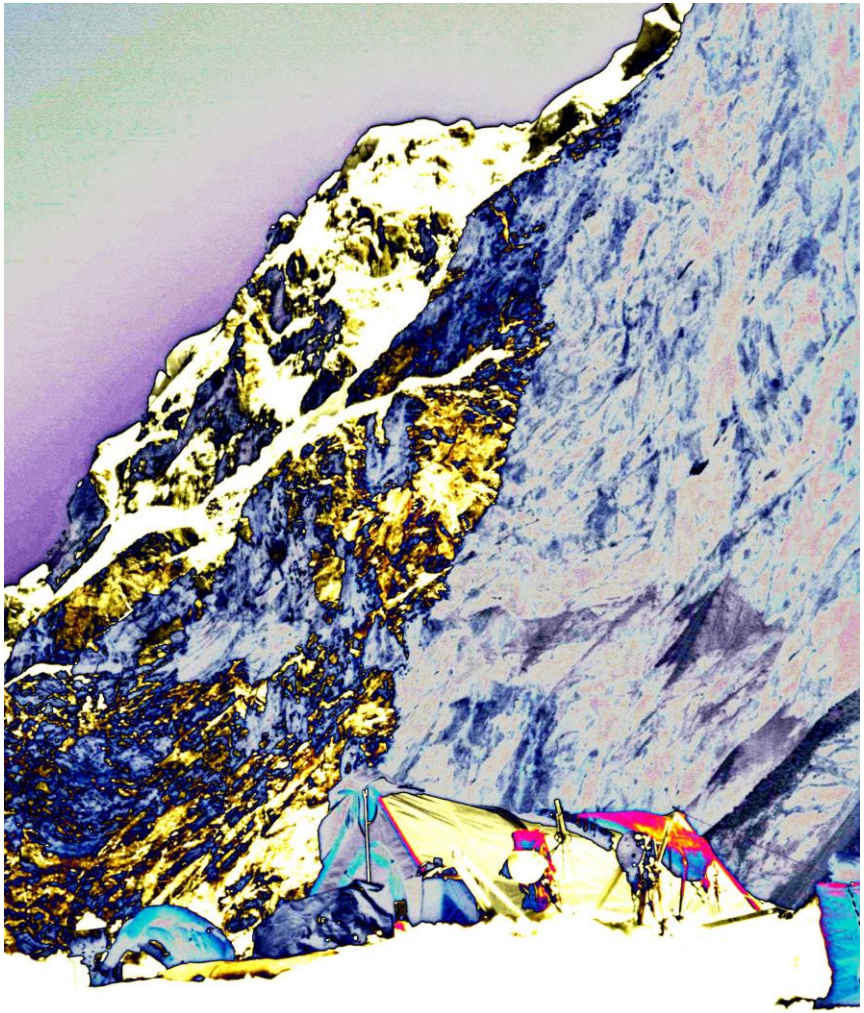
田中文夫（たなかふみお）

もくじ

1　ダクラ南西壁遭難　四
2　カラパタールの石　二二
3　初めての冬山　五三
4　ふるさとの山　六六
5　二つの道　八〇
6　障害をもって生まれた子　九九
7　神々への扉　一一二
8　二人の母　一二三
9　幸福はいつでも、どこにでも有る　一三三
あとがき　一四三

1　ダクラ南西壁遭難

一九七八年九月
昼に近い、午前十一時四十分
標高五千二百四十㍍



氷河台地の上にある第二キャンプ（Ｃ２）周辺は、朝からどんよりと曇ったガスに巻かれ、小雪がちらついていた。

八人用ウインパー型テントの奥では、早朝に第三キャンプ（Ｃ３）から下降し第二キャンプ（Ｃ２）までの氷壁に、五百㍍ロープを張ってきたばかりの、大森隊員が休んでいた。

テントの入口では、サーダー（シェルパ頭）のペヌリ・シェルパがケロシン・コンロ（石油コンロ）を炊いていた。昼食用ノンクック・ライスをお湯に浸けて温めている。そのお湯は次にティーバッグのお茶となり、テルモス（保温水筒）につめられる。

キャンプから水平に二百㍍離れた西壁側で、まだロープの固定作業をしている高野、万里隊員へ届けるためである。

テントの外では、午前の作業を終えたばかりの中野隊長、大沢隊員が並んで立っていた。風もなく小雪がちらちら舞っている。台地は地球、空は宇宙を実感する静寂なヒマラヤの中、カップを右手に休憩のコーヒーを飲みながら、二人ともぼんやりと頭上のＣ３方向を見上げていた。

バリ！・・　ド・ド・ドーン！・・

突如、雷鳴のような大音響が響きわたった。
大地を揺るがす空気の振動。
一瞬、中野と大沢は頭上の岩壁を見上げた。
見上げる遥か千㍍上空に、キノコ雲のような雪煙が降りかかっていた。
「高野、万里が危ない！」
中野は直感した。
次ぎの瞬間、
更なる静寂が、あたり一帯を支配した。

真空な異次元感覚。
神々の懐の中、中野と大沢は抵抗する間もなく、氷壁の中に飲み込まれていった。

「・・」

それは・・・雪崩の雪が上から押し寄せ、雪にもがいて流される・・・
という、平板的で穏やかなものではなかった。
空中千㍍を一気に落下してきた氷河崩壊の爆風に飲み込まれ、四次元空間のような中を、一気に吹き飛ばされていたのである。

吹き飛ばされた一瞬を、中野は全く覚えていなかった。
気がつくと、静寂と視界のきかぬぼんやりした乳白なうねりの中で、ただ流れに身をまかせていた。
猫が爪を立てるような前屈みの姿勢になり、中野は吹き飛ばされながらも懸命に氷の上の薄いカリカリした雪の層に十本の指先を突き立てた。氷の面に制動をかけながら、わずかばかり素手の抵抗をしていた。無意識で、まったく反射的な動作だった。
やがて口と鼻の孔に雪片が詰まり、息苦しさを覚えた。粉々になり、雪の結晶に還元された氷河の氷はゴーグル（雪用眼鏡）の中にも入り込み、その重みでゴーグルは鼻の下まで滑り落ちた。後ろをゴムベルトで結わえていたから、飛び去りはしなかった。
ひとこま映画を見る様に、時刻はゆっくりと刻まれた。
意識は鮮明に状況を観察し、流されている自分と、それを見つめている自分とを、しっかり脳裏に焼き付けていた。
「雪崩の中では、こうやって死んでゆくのか！」
息苦しさを覚え、一瞬中野に死の感覚がよぎった。
しかし別な意識は沈着で、冷静だった。
吹き飛ばされ、氷壁を滑り落ちながらも、足元の左に黄色い固定ロープを発見していた。第二キャンプ直下に張られていた、黄色い六㍉のナイロン固定ロープであった。

「固定ロープにつかまらなくっちゃ」
中野の意識が行動に移ろうとしたその時、
全てが止まり、更なる静寂があたり一帯を支配した。

第二キャンプ（Ｃ２）直下六十㍍。固定ロープを張った氷壁の半ばに、中野は停止した。
あと一㍍下、氷河のクレバス（裂け目）に転落する寸前であった。
中野は固定ロープにつかまり、反射的に立ち上がった。
「たしか、右隣に大沢君がいたはずだが・・・」
一瞬のできごとに、中野はぼんやりと考えた。
しかしすぐに意識は、よりはっきりとしてきた。
大沢の姿を見つけ出そうと、右手に広がる氷壁を上から下まで、ゴーグルが外れたままの眩しい視線で探し求めた。
しかし人の気配は全くなく、あたりはしんしんと静まりかえっていた。
中野は黄色い固定ロープにつかまり、息を切らせながら、第二キャンプ（Ｃ２）までの六十㍍を一気に登った。
ハア！ハア！ハア！ハア！・・・と苦しそうに、肩で呼吸を繰り返す。呼吸の苦しさに連動して、心臓も早鐘を打っている。
ここでの酸素は、平地の半分しかなかった。

テントの入口で食事の用意をしていた、サーダー（シェルパ頭）のペヌリ・シェルパは風圧でテントの外へ掃き出され、氷壁の始まる淵で止まった。靴下のまま氷の台地を踏みしめ、テントの入口へぼんやりとした顔付きで戻って来た。
テントのポールが折れ、奥にいた大森は、倒れたテントの中で座ったまま潰されていた。しかし、怪我はなかった。崩落した氷塊が二キロ後方の第一キャンプ（Ｃ１）方面へ飛散したため、大森の入っていたテントは、ほんの少し雪に埋まっただけだった。ポールは折れてしまったが、破れなかったテントが大森を守ってくれた。
テントの中にいた大森には、外の状況が全く分からなかった。ただ異常事態であることは、身体が先に分かっていた。大森も毛糸の靴下のまま、テントの外へ飛び出して来た。

テントの外、キャンプサイトの氷の台地に立った三つの顔には表情がなかった。感情が揺れる間もなく、危険や恐怖におののく間もなく、ただ呆然と立っていた。
見廻す周囲の様子はほとんど変化がなく、テントだけが潰されて残っていた。それまでテントの脇に積まれていた、プラスチックダンボールに入った食糧や登攀用具、アルミ容器の酸素ボンベがなくなっているのに気付くのは、少し後になってからであった。
雪や氷に支点をとっていなかった物体は、すべてが見事に吹き飛ばされ、薄雪がその跡をきれいに化粧し、何事も無かったかのようである。
それは、一瞬のできごと、

ほんの二、三秒・・・？　一、二分・・・？

しかしこれが、この物語の始まり、ビッグ・バン！である。

千㍍頭上の空間を一気に落下した、民家よりも大きな氷塊は、第二キャンプ（C２、五千二百四十㍍）上部の斜面に当たった。爆裂した氷塊は雪の結晶に還元され、爆裂風を伴って第二キャンプ（C２）を吹き抜けた。あっという間に二キロ後方の第一キャンプ（C１、四千六百二十㍍）へと飛散した。第一キャンプ（C１）に張った夏用大型テントのポールは、折られてしまう勢いだった。

一瞬の爆風は、第二キャンプ周辺に散っていた六名の隊員を飲み込み、さまざまに吹き飛ばし、それぞれの人生模様を一瞬にして変えていった。

＊　＊　＊

第二キャンプ（C２、五千二百四十㍍）の頭上、高度差四百㍍上部の第三キャンプ（C３、五千六百四十㍍）直下には、大石副隊長とシェルパのアンテンバがいた。

大石副隊長は、中野隊長より五歳年上である。三年前にはヨーロッパ・アルプス六大北壁の二つ、マッターホルン北壁、ドリュ北壁を登っていた。ヨーロッパ・アルプスからヒマラヤへと、岩壁登攀に憧れた、小柄で職人肌の実力派クライマーである。

アンテンバは二十二才とまだ若く、サーダー・ペヌリシェルパの弟であった。
登山経験は浅いが、若さゆえの馬力と気迫にあふれている。先端でルートを切り開く、ベテラン大石副隊長と良いコンビである。
二人は、第二（Ｃ２）、第三キャンプ（Ｃ３）の間を荷揚げできるよう、今朝から、五百㍍のワイヤーロープの固定作業をしている。第三キャンプ（Ｃ３）直下の露岩にジャンピング（キリの一種）で穴をあけ、三本のボルトを埋め込んでいた。そのボルトに滑車を下げ、ロープを通して引き上げる。
二人は雪面に食い込んだ、三㍉の鋼鉄製ワイヤーロープの引き上げ作業を続けていた。

バリ！・・　ド・ド・ドーン！・・

第三キャンプ（Ｃ３）の大石には、乳白の雲がスーと足元を流れ去ったように見えた。大石の頭上にハラハラと、桜の花びらが散るように、雪の結晶が舞った。
風圧はなく、一瞬エアポケットに入ったような感覚を覚えた。
瞬時の出来事に、大石にも何が起こったのか分からず、ただ呆然としていた。
いままで第三キャンプ（Ｃ３）から見下ろすと、高度四百㍍下に第二キャンプ（Ｃ２）がマッチ箱のように見えた。直線で二㌔以上後方に、第一キャンプ（Ｃ１）が豆粒のように黒く見えていた。

これまでモレーンの土砂をかぶり茶色かった一帯の氷河も、たった今、白一色に化していた。
色づいて見えるものは・　・　・　何もない。
あたりは褐色から、純白の世界に一変していた。

「Ｃ３大石さん、応答願います！
Ｃ３大石さん、応答願います！
感度ありますか！
どうぞ！」
中野隊長の張り詰めた声が、Ｃ３の無線機を鳴らした。
「はい、Ｃ３大石です。
感度あります。
どうぞ！」
「中野です
たった今、第二キャンプ（Ｃ２）が流されました。
現在Ｃ２には中野、大森、サーダーの三名がいますが、大沢、高野、万里は見当たりません。
これから中野、大森、サーダーで、不明者を捜索に行きます。
Ｃ３の大石さん、アンテンバも急いでＣ２まで下降し、捜索に加わって下さい。
どうぞ！」
「了解！　すぐにＣ２まで下降します。
ところで三人はケガをしていますか？

どうぞ！」

「えー、三人に全くケガはありません。

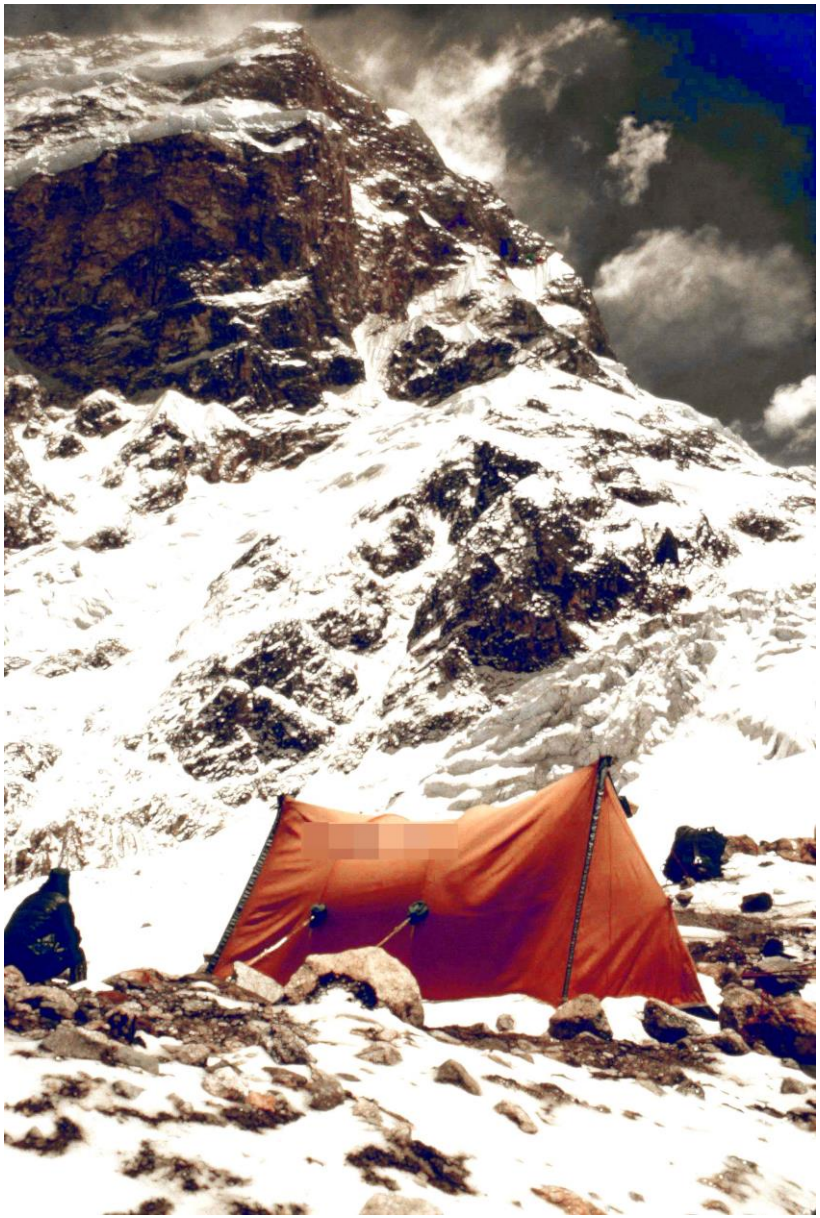
しかしテントはつぶされ、荷揚げした荷物は全部流されています。

シュラフ（寝袋）を持って下降してください。

どうぞ！」

＊　＊　＊

第一キャンプ（C1、四千六百二十㍍）では、花園隊員が休日を過ごしていた。



氷河から二十㍍登った尾根上の、まだ雪がない、砂地で広いキャンプサイトは快適であった。正面にダクラ南西壁が全て見える。左手にはダクラ西壁と重なって、八千㍍の頂きを持つマナスル南壁が天空に聳えている。時折マナスル南壁下段のアイスフォールが崩壊し、その振動は薄い空気の中でもこのキャンプサイトまで響き渡ってくる。

標高四千七百㍍、登攀ルートとなっている氷河の奥、右手遠方にはヒマルチュリ(7884m)が見える。黒い烏帽子のような頂上岩壁が、氷河の奥にニョキッと頭をもたげる。

キャンプサイトの尾根上から、氷河の反対側へ戻ってみる。そこは緑の草原となり、高山植物がそろそろ終りをむかえようとしていた。

これまでベース・キャンプに降りて休養していた花園は、いよいよ南西壁に突入してきた今回から休養はここで十分と思い、ベース・キャンプへは降りなかった。

突然、グワーン　・　・　・　！　と空気の塊が通り抜けた。

花園が休んでいた、大型の夏用テントを激しく揺さぶった。

テントを支えるアルミのポールは、グニャリとくの字に曲がって折れた。

五㍍離れた所にはキッチンがある。一方に大岩を利用し、他の二方には石を積み重ねた壁を造り、天井にはフライシートを被せてある。中にキッチンボーイのラクパがいた。

ラクパの登山経験はないが、シェルパ族の一員である。山に生活する彼等は、この程度の領域ではまだ日常生活の延長でしかなかった。

その時・・・・・、キッチンのフライシートは五十㍍も吹き飛ばされていった。

「花園君！花園君！感度ありますか！

感度あったら、応答ねがいます！

どうぞ！」

さっきまで、Ｃ３の大石副隊長と無線交信していた、中野隊長からのコールであった。

「はい、花園です、感度あります。

えー、先程からの大石さんとの交信、傍受してました。

状況は理解しました。

どうぞ！」

「えーこちら中野です。大沢君がＣ２の下に流されています・・

多分キャンプ下の岩壁よりもさらに下へ流されていると思いますので・・

花園君とシェルパ・メンバーとでＣ１から登り・・

大沢君を探して下さい・・

どうぞ！」

緊張と酸素不足で息を切らした中野隊長の声が、無線機から流れる。

「はい、了解しました。

Ｃ１には私のほか、ペンバとラクパがいます。

サンテンバはＣ２へ荷揚げに出ているので、途中で合流できると思います。

どうぞ！」

「えー花園君、了解しました・・

我々はこれからアイスフォールの落下方面へ、高野君、万里君を探しに出ます・・

えー、もう一度落ちてきたら二重遭難になるので、くれぐれも気を付けて行動して下さい・・

どうぞ！」

「了解しました！

よく見張りながら行動します。
どうぞ！」
とは言うものの、
「もし、もう一度繰り返されたら・・・、誰だって避けようもない。
だから探しに行かなくてよいのか・・・！
そうじゃない！
それじゃいけないんだ！」
隊長が言うのも、花園が答えるのも、危機（ピンチ）の中での原則論だった。しかしながら、それを自然に受け入れる、心の落ち着きは残っていた。
友情、プライド、義務までもが、爆風に吹き飛ばされてはいなかった。

「もし・・・と思えば震えが来る。
しかし、行かなければならない！」
花園は覚悟を決め、C1を後にした。

＊　＊　＊

世界の屋根、ネパール・ヒマラヤ。

この地球の上に、標高八千㍍を超える山は十四峰ある。その中の八峰までが、ネパール・ヒマラヤに集中している。残り五峰はパキスタン・カラコルム山群、一峰は中国チベット自治区にある。
いずれも、東はブータンから西はパキスタンまで、東西二千キロ以上にのびるヒマラヤ山系の中にある。中でもエヴェレストは地球の最高峰（八八四八㍍）として、南極、北極に次ぐ「地球第三の極地」とも呼ばれていた。
毎年、五月中旬から九月初旬にかけ、ネパール・ヒマラヤの地はモンスーンとなる。
夏の季節、インドの東岸、ベンガル湾で暖められ湿った空気はモンスーンとなり、南東の風に乗ってネパール・ヒマラヤへと押し寄せてくる。
その湿った空気は低地に雨を降らせ、高地には雪を降らせる。高度五千㍍を境とし、それより上部は降雪となり、それ以下には雨を降らせる。ネパールの、低地を耕す水田や、山の斜面四千㍍近くまで耕すジャガイモ畑には、恵みの雨となった。
五千㍍以上は、すでにヒマラヤ山中となる。冬の乾季、水分を大気へ還流させてしまった山々の荒れた素肌に雪化粧をほどこし、モンスーンは瑞々しさの回復と、美しい神々の顔を取り戻させる季節でもある。
一九七十年代後半におけるヒマラヤ登山は春と秋の二シーズンに分かれていた。さらに冬期登攀は、一九八十年代に入ってから活発に行われた。

春と秋の間は雨季であり、それをモンスーンと呼んだ。五月中旬から、九月初旬までの間である。

春の登山シーズンをプレモンスーンと呼び、秋はポストモンスーンと呼んだ。モンスーンの間は降雪が続くので、ヒマラヤンニストは登山を敬遠した。

エヴェレストは、東西九百㌔、南北二百㌔に延びるネパール王国の東部に位置する。中央部にはマナスル山群、それから西に向かってアンナプルナ山群、ダウラギリ山群と、いずれも八千㍍以上の山並みが連なっている。

中央部に位置するマナスル山群は八千㍍峰マナスル(8156m)を北に、南東へと稜線をのばし、Peak29(7835m)、ヒマルチュリ(7893m)と、二つの七千八百㍍峰が続いている。

この三つの山を「マナスル三山」と呼び、いずれも初登頂は日本隊によって成されていた。しかしマナスル(8156m)を除いた二つの山、Peak29(7835m)、ヒマルチュリ(7893m)は、日本ではあまり知られていない。

Peak29(7835m)は別名「ダクラ」とも呼ばれている。

ネパール王国の首都カトマンズから西に約百五十キロ、双発プロペラ機で四十分飛ぶとポカラがある。ネパール第二の都市でもある。

カトマンズを発ち、ポカラに着陸する少し手前で、そのマナスル三山は姿を見せる。

双発プロペラ機の翼の下、右側の窓からは雲海のようなヒマラヤの山並みが広がる。

マナスルは尖って高いが、その山容は他の二つより小さい。ヒマルチュリは黒い頂上岩壁の下から、雪と氷の白い裾野を、花嫁のウエディングドレスのように長く伸ばしている。

マナスルとヒマルチュリにはさまれ、牛が座ったようにどっしりと、一番大きく茶褐色な山容がPeak29、別名ダクラである。高度差三千八百㍍の大岩壁は、まぎれもなくヒマラヤのビッグ・ウォールである。南壁、南西壁、西壁に分かれてそそり立ち、ポカラへ飛ぶ機内からは屏風を広げたように連なって見える。

登山界で関心が薄い山であったのは、牛が座ったような山容が、クライマーの食指をそそらないからかもしれない。クライマーの目指す山は、より細く尖った頂であった。しかし機内から見上げる大岩壁の岩肌と氷壁は、クライマーを圧倒するに十分すぎるスケールである。

八千㍍の山々に囲まれた小広い盆地が、ポカラである。古くからチベットとインドを結ぶ「塩の道」、交易の拠点であった。標高は八百㍍。そこからは実に、八千㍍のヒマラヤン・ジャイアンツ（巨峰）が遠くに聳える。

西から東に向かい、いずれも八千㍍峰を擁するダウラギリ山群、アンナプルナ山群、マナスル山群が連なっている。

最も近くには、ヒマラヤのマッターホルンと呼ばれる、マチャプチャレの秀峰が見事にそそり立っている。ペワタールの水面（みずも）に鏡写しとなり、ヒマラヤ写真集では真っ先に出てくる景色である。タールとは、ネパール語で「湖」を意味する。

カトマンズとポカラを結ぶ、百七十六キロに亘る簡易舗装道路はチャイニーズ・ロードと呼ばれ、一九七三年末、中国の援助によって完成した。しかし山間を縫うようにして折れ曲がったその道路はたった五年しか過ぎていないのに、すでに多くの所で陥没している。乗用車といえども、時速三十キロがよいところ。荷を積んだトラックはカーブに車輪を軋ませながら、時速二十キロがよいところであった。そのうちの幾台かはカーブを曲がり切れず横倒しになり、谷の途中に残骸をさらしている。

その道は、カトマンズからポカラまで車で五～八時間。飛行機で飛べば、たったの四十分で着いてしまう。

世界の屋根と呼ばれるヒマラヤの国ネパールは、歩いて何日、飛んで何分、足か空の国である。

二十世紀、平地に開花した車社会は、この山の国には相応しくなかった。

＊　＊　＊

隊員十名からなる「ダクラ南西壁登山隊」は一九七八年八月初旬にカトマンズを出発した。このシーズンにおける登山隊では、一番早い出発であった。

フランスのエヴェレスト隊はまだ先発隊がカトマンズに到着したばかりである。

日本の登山隊では、ダウラギリ(8167m)を狙うG隊が、カトマンズ出発の間際にあった。

カトマンズからポカラへの中間点に、ドムレという小さな街がある。

道路をはさんだ両側に約二十軒、軒を連ねたあばら家が建ちならぶ。雑貨店が多く、バテイ（茶店）や簡易宿舎もある。街の入口にはチェック・ポストがあり、外国人にパスポートの提示を求めることもある。

登山隊はドムレで、トラックから荷物をおろした。総量六トンの荷物は一個三十五キロに梱包されて

いる。荷のほとんどはプラスチック・ダンボール（プラパール）箱に収められ、川岸のキャンプサイトに整然と積まれた。

モンスーン中のキャラバンは雨の中を歩く。プラスチック製ダンボールは破れにくくて軽い。しかも水を通さないので、雨の中のキャラバンには最適であった。日本のダンボールメーカー大手、Ｔ社が特別注文に応えて製作したものであった。

それら百七十個の荷物は、百七十人のポーターに負われ、ドムレから徒歩で行く。

ベース・キャンプまで百五十キロの道のりを半月かけて歩く。一日たった十キロと短いが、山間の小道に長い列をなし、現地に住む大人から子供までが三十五キロの荷を担ぐ。　ヒマラヤ登山では、これをキャラバンと呼んでいる。

古来砂漠の地で、ラクダを従えた隊商をキャラバンと言っていた。そのように、長い隊列となって歩く登山隊ポーターの行列をもまた、キャラバンと呼んでいる。

中野は、このダクラ南西壁登山隊の隊長であった。隊員十名、シェルパ六名、ポーター百七十名、その他に、ネパール政府から派遣された連絡将校（リエゾン・オフィサー）一名がいる。

ベース・キャンプから上部で登山活動をするのは、隊員十名とシェルパ四名だけである。しかし登山の間、ベース・キャンプに残るリエゾン・オフィサーや登らぬシェルパたちにも、登山隊は日当を支払わなければならないネパール政府の登山規則がある。

ダクラ(7835m)西面とマナスル(8125m) 南面が合流してできたツラギ氷河は、平坦で穏やかな容貌をし、鎌形にカーブしている。標高、四千㍍。太古からの氷河の上には、山の斜面から崩れ落ちた大小の岩石が散りばんでいる。これをモレーンと呼ぶ。

標高が百㍍上がると、気温は０・六度下がる。標高四千㍍のここでは、平地の気温よりも二十四度低いことになる。

大きな岩の下の氷は陽が当たらないので、その部分は溶けずに残る。周囲の氷河は紫外線の強い太陽光でどんどん溶けだし、氷河の窪地を小川となってサラサラ音を立てて流れる。年の経過とともにその落差は大きくなり、やがて岩帽子の氷キノコができる。直径三㍍の岩ともなれば、人の背丈よりも高い氷キノコとなって氷河の中に立っている。

氷河の末端は百米の落差をもって湖にのみこまれている。陽に溶けて流れ出した氷河の水が集まり、淡

いエメラルドグリーンの湖を作っている。
末端の氷河は時々崩れ落ち、崩れた白い氷の塊を湖に漂わす。氷河湖は乾季の冬場は結氷し、湖を縦断するだけでも、悠に一時間半はかかる。
地球温暖化がすすむ近年、この氷河湖に溜った水量が問題となっている。地球温暖化で氷河は溶け出して後退、溶けた水は氷河湖に集積される。氷河湖は年々肥大化する。
もしこの水量を支えるモレーンの岩と氷が決壊すると、濁流は狭い谷を一気に駆け下り、下流の村落を飲み込んでしまうからである。
氷河湖の水を抜くバイパス工事がネパール政府によって行われるようになったが、ビスタリ、ビスタリ（ゆっくり、ゆっくり）のお国柄は、遅々としてはかどらず、地球温暖化のペースよりも更に遅い。

ダクラ南西壁登山隊のベース・キャンプは、氷河湖の右岸(上流から下流に向かって右側)にあった。標高三千九百五十㍍、ヒマラ登山のベース・キャンプとしては低いほうである。
エヴェレストのベース・キャンプ、五千五百㍍からみれば、千五百㍍も低い。
しかしヒマラヤ登山は、高度や初登頂を競う時代を過ぎ、より困難な岩壁から登頂するバリエイション・ルートの時代に入っていた。このことを登山界では、「ヒマラヤ鉄の時代」と呼んでいた。
困難な岩壁を登る時、クライマーはピトン（鉄製の岩釘）を岩の割れ目に打ち込む。もし転落した時そのピトンを支点とし、確保者が転落者をロープで止める。困難度が増すにつれピトンの数が多く

なる。ピトン（鉄）の量が多いほど、困難度が高い傾向を示すことになる。より困難を目指すクライマー
の間では、それを称して「鉄の時代」と呼んだのである。

＊　＊　＊

ダクラ主峰は七千八百三十五㍍、そこから稜線を南へ約二キロの地点が南峰で、七千五百十四㍍である。南峰から南西に切れ落ちた大岩壁が南西壁、南峰から主峰にいたる稜線の西側一帯が西壁である。

その高度差は、標高四千㍍のツラギ氷河の上に、ちょうど富士山を一つ乗せた高さである。

幅広く、二キロにわたって広がるダクラ西壁には、幾段もの懸垂氷河が帯状をなし、岩壁にへばりついている。時々その帯びの一角が崩れ、氷河崩壊雪崩を高度差三千八百㍍の西壁に滑り落としていた。大音響とともに崩れ落ち、山の薄い空気を震わせながら、煙のように広がってツラギ氷河へと舞い降りていた。

しかし、中野たちの登る南西壁側へは落ちなかった。

ダクラ西壁と南西壁とを分かつ五千八百㍍地点には、第二キャンプ（五千二百四十㍍）から、痩せた氷の尾根がせり上がって消える。千二百㍍のその尾根を登り切った、六十㍍手前が第三キャンプ（五千六百四十㍍）である。

登攀ルートは、さらに右手に広がる傾斜六十度、雪に覆われた南西壁の弱点をつなぎ合わせ、ジグザグに登るものであった。

ダクラ西壁から、南西壁へと折れ曲がる角は、千㍍の垂直な岩壁がそそり立っている。そのつけ根の幅広い氷河台地に、第二キャンプは設営されていた。

西壁に帯状に広がる懸垂氷河。

まさかその懸垂氷河の末端が、南西壁側の第二キャンプ近くに崩落するとは、隊長の中野は夢にも思っていなかった。

四年前の春、中野はＹ山岳協会隊の一員として、同じルートでダクラ南西壁を登りに来ていた。その時も全く同じ場所にテントを張り、延べ三十六日間滞在した経験を持っている。懸垂氷河崩落の気配は全くなく、最も安全なキャンプサイトであると、中野は思っていた。

ダクラ南西壁、標高五千二百四十㍍、第二キャンプ

垂直に千㍍切れ落ちた西壁南端の付け根は水平に細長い氷河台地となり、絶好なキャンプサイトであった。氷河台地を東から囲むように氷と雪の尾根がせりあがり、西壁の垂直な大岩壁の中程にとけ

込んで消える。この尾根の高度差は四百㍍であるが、それを登る登攀距離は千二百㍍にもなる。日本の山ならば、この尾根だけでも十分一つの登攀ルートとなる。

この尾根を登り切り、垂直な大岩壁に触れる手前六十㍍、氷の尾根にぶら下がるように小さなテラスを切り開いて作られたのが、第三キャンプである。高度五千六百四十㍍。ここから、高度差千七百㍍のダクラ南西壁が始まる。平均斜度六十度、登攀距離二千七百㍍である。

＊　＊　＊

ダクラ南西壁登山隊は、クライマーの集団であった。平均斜度六十度、高度差千七百㍍、岩と氷の南西壁を登り、七千五百十四㍍のダクラ南峰を初登頂する計画であった。

計画は十月十日の登頂予定日からすべて逆算されている。カトマンズ出発が早かったのも、全て十月十日から計算され、行動をシュミレイションした結果であった。

その計画では、ベース・キャンプ建設から登頂までを五十日間とし、詳細にわたり分析されていた。

八月二十日、三千九百五十㍍地点に、ベース・キャンプ建設。
八月二十七日、四千六百二十㍍地点に、第一キャンプ建設。
九月三日、五千二百四十㍍地点に、第二キャンプ建設。
九月十日、五千六百四十㍍地点に、第三キャンプ建設。

ダクラ南西壁登山は計画通りに進んでいた。

さらにルートは、花園隊員、万里隊員、ペンバシェルパの三名により、第三キャンプの先、三百四十五㍍へとロープを延ばしていた。

そこは高度差千七百㍍、南西壁の始まりである。高度計は五千八百㍍を指していた。

足元は少し傾斜の緩い氷雪の斜面となり、標高四千七百㍍の下部氷河まで一気に切れ落ちている。足元の高度差は千百㍍あるが、山のスケールがあまりにも大きく、麻痺したクライマーの感覚には、数値が示すほどの高度感や恐怖心は感じない。

人間の感覚は相対的である。そしてヒマラヤ登山は確実に、日本で山を登る感覚の、およそ三倍の時間がかかる。それだけ山のスケールが大きく、少ない酸素摂取は呼吸が苦しく、運動能力が低下する。

目の上には、傾斜五十度、雪の斜面が空に向かってのびていた。雪の斜面のその先は青空へと溶け込んでいる。ルートは青空の手前から左へ折れ、岩壁に積もった雪の斜面をピナクル（岩搭）目指して登るのである。

「どうだろう、この先は！」

口数の少ない万里が、花園に問いかけた。

「大丈夫、この雪の堅さなら登れるよ。
傾斜も、遠くから見たほど急じゃないし」
花園は、自信ありげに答えた。
花園は日本の冬山の岩壁では最悪の部類にランクされる、谷川岳一ノ倉沢滝沢第三スラブを厳冬期に登っている実力派である。
谷川岳は「魔の山」とも呼ばれ、遭難死者五百人を超えたのは一九七〇年代初期である。その中でも特に、厳冬期一の倉沢滝沢第三スラブは氷のスベリ台、雪崩の巣となった最難関ルートであった。生と死が背中合わせにあり、挑戦する者は極めて少なかった。
同じ二十九歳でありながら、万里の冬山岩壁登攀体験は浅かったので、先輩格の花園に、先の見通しをたずねたのであった。
岩壁登攀の場合、正面から向かい合って見つめた感覚と、いざ取り付いて登りだした感覚とは異なってくる。正面から見つめると、その岩壁の傾斜角度がより急峻に見える。七十度の岩壁は、正面から見ると九十度の垂直に見える。垂直な岩壁はオーバーハングに見える。だからクライマーは見つめて怯えるだけでなく、その怯えを乗り越えて取り付き、会得した感覚から判断する。

目で感ずる恐怖感は、その中にどっぷり漬かってみると、それほどでもなかった。この体験の繰り返しがクライマーの自信となり、より困難な深みへと、はまり込んでゆくのである。

＊　＊　＊

「おーい！　万里くーん　・　・　・　」
「おーい！　高野くーん　・　・　・　」
「おーい！　大丈夫かーい！」

「高野くーん　・　・　・　」
「万里くーん　・　・　・　」

中野隊長、大森、サーダー・ペヌリシェルパの三人は大きな声で叫び続けた。
相変わらず灰色のガスに巻かれ、小雪がちらついている。作業していた三十分前までと、氷河台地の様子は変わっていない。変わったのは、万里、高野の姿が見えないだけである。

「おーい！　万里くーん　・　・　・　」
「おーい！　高野くーん　・　・　・　」
アイゼン（鉄製カンジキ）を着ける間もなく飛び出した三人は、ゴム底の登山靴が氷河の氷に滑りながら、三方に分かれて探し続けた。
氷河崩壊雪崩は二キロ以上も下方に飛散したため、落下地点の近くではその痕跡をほとんど残していなかった。青い氷河の肌に二㌢ほど、サラサラな白い雪で化粧をほどこした程度である。その足元の様子から、地表面を一当たり見渡した中野は次の行動に移った。
「近くで見つけられるなら、クレバス（氷河の割れ目）の中以外にはない！」
万里、高野が立っていた処から、雪崩が通り抜けた後方のクレバスに狙いを定めた。
幅五㍍、長さ百㍍、深さ十㍍。クレバスの底に中野は降りた。青白い氷河の断層に、淡く光が跳ね返る。ゴツゴツした氷の上に雪崩で飛ばされてきた雪が重なり、膝までもぐる。ピッケルで軽く探りながら、両の足でも探り続ける。
「万里くーん　・　・　・　」
「高野くーん　・　・　・　」

三十㍍も進むと雪面に、登山靴の先端らしきものが見えた。
息を切らして駆け寄ると、万里の登山靴である。
中野は夢中で雪を掘り下げた。まず、顔面に向け掘り起こす。呼吸させるためである。
万里は左足を上にして斜めとなり、顔面を下に、逆さまとなって埋められていた。
中野が万里の顔を掘り起こすと、万里は小さくうめき声を漏らした。
「万里くん！　万里くん！」
「大丈夫か！」
万里の返事はなく、ただ小さくうめき声をもらしている。
「万里くんを見つけたぞー！」
「大森くん、サーダー！　万里くんを見つけたぞー！」
中野はクレバスの外へ向かって叫んだ。叫びながらも手は休むことなく、万里の周りの雪を堀り続

けている。
やがて大森、サーダーも駆けつけ、一緒に万里を掘り起した。
右足の靴が抜け、毛糸の靴下のままである。上着がはだけ、はだけた腹部が擦過傷になっている。顔面にも擦過傷はあるが、出血はしていない。
万里は爆風に吹き飛ばされ、氷河の壁に叩きつけられてしまったのだろう。全身打撲で意識がなかった。

「ここでビバーク（野営）し、手当てするわけにもゆかない。もしもう一度落ちてきたら埋められてしまう。大森くんとサーダーでキャンプまで運ぼう！私は高野くんを探すから！」
中野は言った。
「オーケー、オーケー、アイ　キャリ　バンリサン
オーケー！　バラサーブ（隊長）アンド　オオモリサン
レッツ　サーチ　アンド　ルッキング　タカノサン　プリーズ」
サーダー・ペヌリシェルパはそう言って、一人で万里を背負った。
しかし数歩で氷河に足をとられ、一人では運べない事をすぐに知らされた。
「サーダーが上半身を持ち、大森くんが足を持てば運べるでしょう！
私はまだ、高野くんを探さなきゃいけないから！」
切り立った青白い氷河の壁に沿いピッケルで探りながら、中野はクレバスのさらに奥に向かって進んで行った
。
「高野くーん！」
「高野くーん！」
しかしクレバスの底に、高野の形跡は見出せない。
大森とサーダーはクレバスの出口で奮闘していた。上半身、下半身と分担したのでは滑ってしまいたった十㍍が登れないでいた。
もはやクレバスの中に高野はいないと思い、中野は出口に戻った。

「よし、それじゃ私が背負！」
万里は背負われると気管を圧迫し、ますます呼吸がしずらくなってしまう。しかしこの場面、そんなことは言っていられない。早く抜け出し、テントに収容しなければならない。
大森、サーダーと交代し、中野は万里を一人で背負った。よろけながらも一歩、一歩とクレバスの壁を登りはじめた。心臓は飛び出しそうに活動し、全身汗まみれになった。
「バラサーブ！　プリーズ　チェンジ　ミー！
アイ　キャリー」
サーダー・ペヌリシェルパの申し出に、中野は交代した。
ペヌリシェルパも汗をかき、よろけながら頑張った。
ようやくキャンプと水平な処まで登りつくと、三人とも倒れこんでしまった。
万里を氷河に横たえ、三人は口から、鼻から、耳から、大きな呼吸を繰り返した。さらに肩を上下させ、全身で呼吸にはずみをつけた。
酸素は平地の半分、万里の相対重量は百㌔を超えるものとなる。心臓は限界まで動いた。

＊　＊　＊

一九七八年九月
昼に近い、午前十一時四十分。
第二キャンプ（Ｃ２）周辺に散っていた中野隊長、大森、大沢、高野、万里、サーダー・ペヌリシェルパ六名のうち、大沢、高野、万里の三隊員が死亡してしまった。
氷河崩落地点に一番近かった高野は、行方不明のままついに発見できなかった。爆風に飛ばされ、万里とは異なった氷河のクレバスに埋もれてしまったのだろう。

高野の近くにいた万里は、爆風でクレバスの氷の壁へたたきつけられてしまった。クレバスの中、中野が発見した時は小さく呻き声を発していた。しかし全身打撲で意識はなく、中野、大森、サーダー・ペヌリシェルパの三人で第二キャンプへ収容する途上、命は絶えてしまった。

大沢は第二キャンプ（Ｃ２）の下部岩壁、二百㍍を落下した。花園とシェルパたちにより、岩壁下の薄いデブリ（雪崩の雪の溜り）の中から発見された。頚骨が折れ、即死状態であった。きっと仰向けになったまま、岩壁を頭から落ちてしまったのであろう。

一九七八年九月、ネパール・ヒマラヤ、ダクラ南西壁。
『成功するかもしれない！』
と感じた矢先、
五千二百四十㍍に建設した第二キャンプ（Ｃ２）周辺における、一瞬の出来事であった。

2　カラパタールの石

それから三ヶ月、
ダクラ南西壁遭難事故処理を終えた中野は、ふたたびネパールの地に戻って来た。遠征隊の留守本部長を務め、遺族の矢面に立って苦労した富岡と一緒であった。

「一度はヒマラヤを見てみたい・・・・!」
富岡ばかりでなく、山登りを志した、多くの岳人の願いである。ましてや富岡にとっては、日本国内でトレーニング山行を共にした仲間が、今まさにヒマラヤの大岩壁を登っている。
京成・上野駅まで見送りに行った十人の仲間を思うと、心が疼いた。

富岡は三十四才。子供が生まれてから岩登りを始めた変わり種であった。
普通の岳人は、結婚して子供ができると山をやめる。特に子供は、岳人を山から日常社会へ連れ戻し、家庭を守る安全装置でもあった。先鋭的な山登りから足を洗うことは、死の世界からの生還を意味したが、富岡はこれと逆のコースを辿っていた。
十年前、富岡が勤めていた都内の通信工事会社に、遅れて入って来たのが中野であった。富岡は中野より二才年上である。富岡は購買と資材を担当し、中野は工事と設計を担当していた。
中野はすでに社会人山岳会に入り、尖鋭的に岩登をしていた。仕事は、山を登るための資金稼ぎでもあったが、中野は山だけでなく、仕事にも人一倍努力していた。
富岡はすでに子持ちで、家庭があった。山登りは好きだったが、まだ尖鋭的な岩壁登攀はしていなかった。しかし中野と話す山の話題に、次第にその尖鋭的な岩登りに刺激され、憧れが情熱へと変化していった。
富岡の三才年上の兄はかねてから、社会人山岳会を主宰していた。労働者の山岳会、その労働者が集まって作った全国組織、労働者山岳連盟のリーダーでもあった。しかし富岡は、兄たちの組織に違和感をもっていた。
「山は自分の責任で、もっと自由に、楽しく登ればよい」
と思い、特定の社会的思想をかかげた全国組織には、なじめなかった。
中野は年下であったが、富岡の感覚に近かった。理論家肌であるが、その目指すところは個人が自立した、自由な山登りにあった。中野の、着実で誠実な人柄は信頼できた。富岡の妻は中野との山行だけには安心し、富岡に何も文句を言わなかった。

富岡の兄は、中野たちのダクラ南西壁と同じ時期、ネパールの七千㍍峰、パビール峰に遠征していた。初めて労働者山岳連盟がヒマラヤへ派遣した登山隊で、富岡の兄は副隊長で頑張っている。小柄であるがエネルギッシュなその行動から、ミニダンプの愛称があった。
富岡は遠征に参加しない代わりに、日本国内での留守本部を引き受け、遠征隊を支援することにし

た。しかし仲間や兄のアドベンチャーを思うと、いても立ってもいられなかった。
「仕事を一ケ月休めば、ベース・キャンプまで行けるかもしれない」
「ベース・キャンプまでならば、そうそう危険ではないし・・・・」
「夏のボーナスを割けば、お金はなんとかなる・・・・」
富岡はひそかに、ダクラ南西壁登山の後半期に、一人でベース・キャンプまで行ってみようと思っていた。

しかし、本格的登攀が始まってからの第一報は、外務省からの遭難通知だった。
遭難以前に書き綴った中野隊長からの経過報告は、偶然にもその翌日に届いた。
この経過報告ではキャンプを順調に延ばし、
「成功できるかもしれない！」
とする、明るいニュースであった。
手紙の往復に一ケ月もかかるヒマラヤ山中の遭難事故に、留守本部長・富岡は戸惑った。
行ったことがないヒマラヤに、ただ想像を巡らせるのみである。外務省からの情報は、遭難の事実と死亡者の名前しか分からない。遺族を前に、登山隊からの連絡をただただ待つしかない苛立ちに、しばし「情報」について考え込んでしまった。
富岡は、情報を伝送する通信工事会社を、友達と共同経営していた。しかしハードウエアだけでは情報の伝達が出来ない。伝達する中身、データーがなければいかに優れた情報機器があっても、無用な長物である。
緊急事態に焦る反面、すぐに冷静さを取り戻した。富岡の過激に激さないその性格は、一見飄々としているが、だからこそ登山隊へ参加する決断ができなかったのである。
富岡は、次ぎに自分が何をすべきか、自ら判断することができた。
「ヒマラヤ山中のことだから、日本国内ではどうにもできない！」
それでも富岡は、少ない情報量の中で関係者へ次々と連絡をとった。
遺族や友人達からは、
「状況を説明して下さい！」
「遺体はどうなるのですか？」
と、矢のような催促にもあっていた。

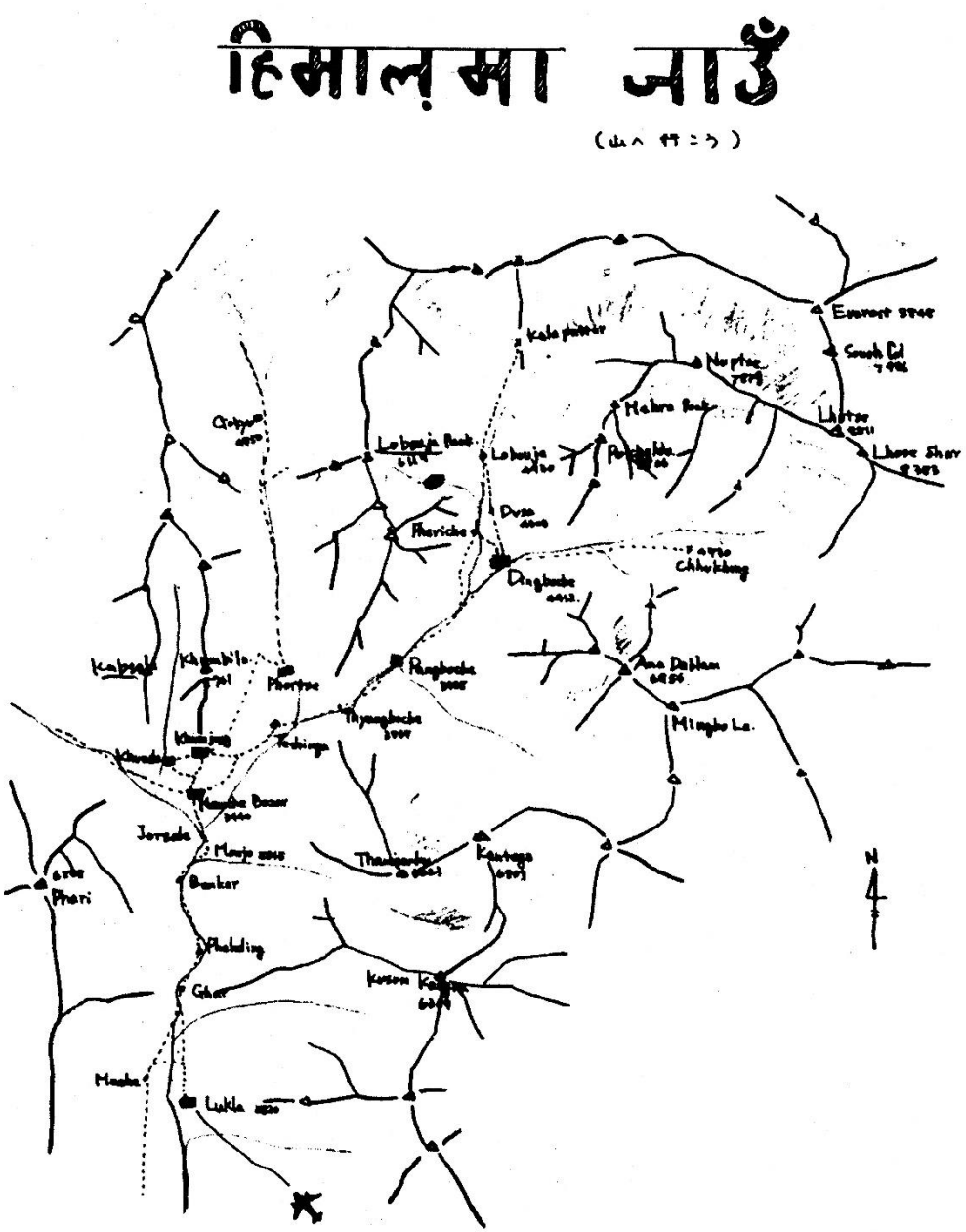
そんな富岡の苦労に報いようと、事故処理に区切りをつけた中野は、富岡をネパール・トレッキングへ誘ったのである。
残った装備を他の登山隊に売却した残金の中から、富岡の往復旅費を捻出した。中野自身はトレッキング・コンダクターを引き受けることにより、中野にかかる費用をツアー主催会社の負担にすることができた。
こうして遭難事故から三ケ月後、中野はふたたびネパールの地に戻って来た。

＊　＊　＊

『エヴェレスト十八日間の旅』

ヒマラヤン・ツアー㈱が主催した、ヒマラヤ観光旅行の名称である。十二月二十五日に成田を出発、エヴェレスト山麓を歩き、翌年一月十一日には日本へ帰国するという、十八日間のツアーであった。

年末年始のこの期間、ヒマラヤン・ツアーのエヴェレスト・コースは人気ナンバー・ワンである。十八日間で、エヴェレストを真っ正面に見上げるカラパタールの丘、五千六百㍍までも到達できるこのコースは、ヒマラヤ・トレッキングの花形である。費用は三十八万円。ヒマラヤン・ツアーだけでも、同時に三グループ、五十人を送り込んでいた。



中野と富岡は「Cグループ」だった。日本〜ネパール往復十二名、その内の七名がエヴェレスト・トレッキングに参加する。他はそれぞれ自分たちの計画があり、別行動となる。

中野はエヴェレスト・コース七名と、それを支援するシェルパ・メンバーをまとめるリーダー役で

もあった。

七名の「Cグループ」は、国立・C大学ワンダーフォーゲル部OBの四名が中心だった。卒業してまだ二年の木本、竹中、津山の男性陣と、一年後輩になる千尋である。

たった一人で参加した靖恵は二十八才、OLである。私学の雄、A大学英文科を卒業して貿易代理店に勤めていた。

それに中野、富岡を加えた男性五名、女性二名の計七名であった。

短期間で簡単に五千㍍を越えてしまうこのトレッキングには、様々な危険が潜んでいる。その最大なものは高度障害であり、その予防と処置が大切であった。

近年は再三、トレッキング中の死亡事故が発生していた。

ヒマラヤ・トレッキングは特殊場所での特異体験なので、「一般旅行業務取扱主任者」の国家試験など役に立たない。これは別に、ヒマラヤン・ツアー㈱が専任していた。

この制度が活用できる範囲は日本からカトマンズまでであって、それ以降の山中では、ヒマラヤ登山経験がものいう。しかもシェルパ・スタッフを使いこなした、リーダークラスが好ましい。

ヒマラヤ登山経験者はその経験を買われ、コンダクターを務める場合が多かった。

一つのグループは十人前後、多くても二十人程度である。

今回、中野たちの七人は小グループであるが、逆にまとまり易くて機動性が生かせた。多人数ともなれば調子の具合により、グループ内で更に小グループが出来てしまう。二十人ともなれば、五つの小グループに分かれる場合さえある。

コンダクターがシェルパ団を上手に使い、トレッキングをより楽しくさせるのも、ヒマラヤ登山体験の応用である。

「ナマステ！（こんにちわ）」

と声を掛ければ、シェルパたちも

「ナマステ！」

と返し、笑顔で両手を胸元へ合掌する。

テントの外がマイナス十度の寒さでも、シェルパたちはこまやかなまでに気を配ってくれる。それをさらに、より洗練したサービスに指導するのが、コンダクターの役目でもあった。

シェルパと顧客の接着剤である。

「サーブ、タト　パーニー！」（お湯ですよ！）

といって、早朝のテントに洗面のお湯を届けてくれるシェルパ。

しばらくすると、

「サーブ、ティー　！」

といっては、五百ccのカップに入った紅茶（ミルク・ティー）を差し出す。

やがて、

「カナ！　カナ！」（食事ですよ！）

といって、ナベを叩き、食事の用意が出来たことを知らせる。
シェルパは顧客が朝食を食べる間にテントをたたみ、シュラフ（寝袋）をたたむ。
食後にはふたたび、
「サーブ、ティー！」
五百ccのカップには、なみなみと紅茶が入っている。

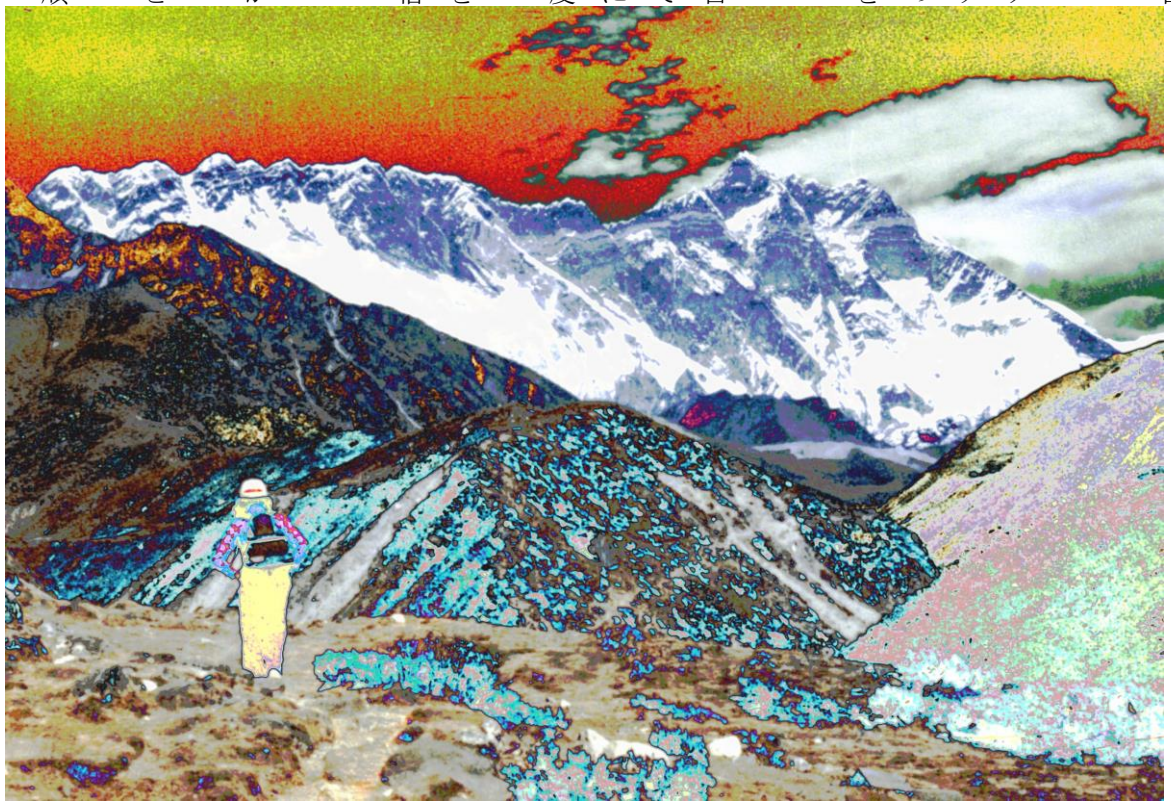
トレッカー（顧客）はカメラや身の回り品を携えるだけで歩き、他の荷物はポーターが運ぶ。
神々の峰、ヒマラヤの景色を網膜に焼き付け、フィルムに焼き付ける。
路傍の岩に腰を下ろし、スケッチブックに鉛筆を走らせる。
日本では味わうことのない、サーブ（主人）待遇である。

一月三日、朝。
ディンボチェ、四千四百メートル、
エヴェレスト(8848m）に近づきすぎてしまったため、北にヌプツェ(7879m）の稜線が邪魔をして、エヴェレスを見ることは出来ない。北東にはローツェ(8511m）がそそり立ち、黒々とした南壁の岩肌を、むき出していた。ヌプツェは西側に延ばした長い稜線に、ヒマラヤ・ヒダとなった氷の尾根を幾重にも落としていた。それはエヴェレストという花嫁が着た、純白なウエディング・ドレスのレース模様でもあった。
シェルパ族の間ではエヴェレストを「サガルマータ」と呼んでいる。その意味は「大空の女神」である。大空に聳える女神のウエディング・ドレスが、ヌプツェの稜線から幾重にも純白のレースを落としたヒマラヤ・ヒダ（氷の縦襞）となっている。
テントの外は全てが凍てついていた。
メンバーはテントの中でシュラフにくるまり、チャックを開けてハア！ハア！と白い息を目にしながら、寒い朝を迎えていた。
厳冬期とはいえ、乾季の今はめったに雪が降らない。それゆえヒマラヤ・トレッキングでは夏山用テントを使用していた。夏用テントは、隙間風が入って寒い。冬用テントは二重となり、雪や風が入らぬよう底と屋根を縫い付けてある。夏用テントより、冷気の侵入が少なく暖かい。
シェルパたちは、夏の間ヤクの放牧に使う石積の小さな小屋で眠り、食事の支度をしていた。石積みの隙間から冷気は容赦なく吹き込み、シュエルパ達は焚き火を欠かせない。

「サーブ、タト　パーニー！」
「サーブ、ティー！」
恒例となった。朝のサービスである。そのサービスに、今はメンバーもすっかり慣れた。
「みなさん、昨夜は良く眠れましたか？
今日はロブジェまでです。

ロブジェは四千九百㍍になるので、調子のよくない人はここに残ります」
朝食の前、中野は六人のメンバーを前に、明るく大きな声で言った。
登るのも、停滞するのも、顧客の自己申告制である。
コンダクターは顧客の判断に対し、適格なアドバイスを与える。深夜にメンバー・テントを回り、睡眠状態をチェックした。起床とともにメンバーの脈搏、呼吸数、コンディションなどを聞き、ノートにまとめておく。

これまで高所順応のため、三千八百㍍のタンボチェで一日休養をとっていた。休養といっても近くの丘を更に五百㍍ほど登り、ディンボチェの高度に備えていた。
ヒマラヤの高度順応は、登り降りを繰り返すことによって、順次高所へ宿泊してゆく。幾度か体験したあとに、その高度へ宿泊するのである。
朝から頭痛がとれなかった津山が手をあげ、サーダーのニマ・ドルジェとともに、ディンボチェへ残ることになった。
本調子でない竹中と靖恵は、高所順応を兼ねてロブジェの途中まで登り、ふたたびディンボチェへ戻ることにした。
調子の良い、富岡、木本、千尋と、シェルパのテンジン、クマルの五名がロブジェに宿泊し、翌日カラパタールを往復することになった。
「富岡さんがいれば心配ない。
自分は調子のすぐれないメンバーと一緒にいたほうが良い」
中野は竹中、靖恵とともに、ディンボチェへ戻ることにした。



午前九時、
津山を残し、メンバー六人とシェルパ二人からなる八人は、ディンボチェを出発した。
空は抜けるように青く、陽射しは暖かい。しかし大気の温度は低く、みな、おもいおもいの装いをし

ている。富岡はセーター。木本、竹中、靖恵は羽毛服。千尋は羽毛のベスト。中野は羽毛服の内側に重ね着するための、薄い羽毛のインナー服だけである。

荷物が少なく、身軽なメンバーはポケットに両手を差し込み、ゆっくりゆっくりと歩く。

冬の山裾の斜面を縫う小道には、ヤク（高所に住む、山羊）が枯れた草を食む。白や黒や金色が混じった、ふさふさした体毛をゆすり、枯れ草を口にうなずく。

ドライフラワーとなったカルカ（草原）の、短い枯れた草を踏みながら、一歩、一歩、息を切らせて登る。

正面には、幾重にも重なったヌプツエのヒマラヤ・ヒダがある。

その右手にはローツエ(8511m)が、黒々とした垂直な南壁を落としている。

後方にはアマダブラム(6856m）が、「母の首飾り」といわれる南面の見慣れた姿を変身させ、鷹が羽を広げたような荒々しい北面を見せている。

後方左手には、ゴツゴツした雪と岩のオベリスクのタウツェ(6367m）が、間近に迫る。

エヴェレストのサウス・コルから流れ出たクンブ氷河は、ロブジェへの登り口が末端となる。さらにその下方にモレーンを堆石させ、ドウグラ(4620m）に至る。

ラ(Lha）は峠を意味している。

正面にはプモリ(7145m）が、白米のオムスビのように盛り上がっている。

ディンボチェからゆっくりと四時間、ドウグラに着く。

峠の堆石の上に立ち、プモリをバックに、シェルパのクマルが記念写真を撮った。

もう少し先へ進まないと、まだエヴェレストは見えてこない。

ロブジェへ登る富岡、木本、千尋のグループと、ディンボチェへ戻る中野、竹中、靖恵のグループに分かれ、互いに握手を交わした。

「気を付けて、がんばって下さい！」

中野はロブジェへ登る三人と、付き添うシェルパ二人に握手を交わした。

「千尋さん、カラパタールの石を記念に持って来て下さい」

靖恵は千尋に頼んだ。

「ここまでこられただけで、わたしはもう十分！

わたしがヒマラヤに溶け込めたことで、このトレッキングに参加した目的がかなったわ！」

一人で参加し、本格的登山をしたことがなかった靖恵は、そう思った。

靖恵は人の輪は好きだったが、言葉で自分を表現するのが苦手だった。楽しい会話の中心でなく、それを取り巻く一人として、静かにいることが好きだった。言葉よりも行動、そして何より、自然の中にいることが好きだった。

だからヒマラヤの大自然の中にあり、少ない言葉で一体感をもてるこのような山歩きに、ここ数日来安らぎを感じていた。あえて孤独を好むわけではなかった。だが自然体の中から、一人、また二人と、分かり合える人の輪の広がりは、靖恵の心を柔らかくしてくれた。

カトマンズからエヴェレスト山麓の飛行場、ルクラへのフライトは軽飛行機（ツインウオッター）で約四十分である。このコースのフライトは天候と機体整備、パイロットのコンディションに左右され、欠航が多かった。機体の故障で一便しか飛ばなかったルクラ・フライトのその日、二便にリストアップされていた靖恵と津山は一便に乗れず、一日遅れてルクラに着いた。

他のメンバーがタンボチェで休養の日、靖恵と津山はやっと皆に追いついた。

山に入ってから休養日がなかった靖恵と津山は、他の五人よりも高度に慣れず、若干疲労を感じていた。

「これ、持って行くといいですよ！」

中野は千尋にサングラスを渡した。

氷河にはねかえった紫外線は、裸眼を痛める。薄い日差しの中でも、三時間もすると目に痛みが疼き、涙が出てくる。いわゆる「雪目」である。カルカ（草原）やモレーン（石の堆積）の中ではまだ大丈夫だが、氷河の中はちがう。

「ありがとう！」

千尋はお礼を言ってサングラスを受け取った。

朝出発の前、千尋は中野の半シュラフ（胸まで入る寝袋）も借りていた。今朝の寒さを思うと、さらに五百㍍上がる今夜のロブジェはもっと寒い。シェルパが用意してくれたシュラフの、さらにその中に半シュラフを入れて眠ると暖かい。

千尋は中野のこまやかな心遣いを、素直に受け入れていた。素直になれたことが、ことのほか嬉しかった。ヒマラヤの大自然の中にいると、世俗の羞恥にこだわる自分が、みじめに思えてくる。

「ヒマラヤに来てみると、本当の事、本当の物、本当の心がよく見えてくる・・・」

千尋は仲間の中にあっても、世俗の習慣にこだわらない雰囲気が、このヒマラヤにあることを感じ始めていた。

物質的には貧しくても、シェルパも皆なおおらかで、明るい。ヒマラヤの自然は大きく、かつ厳しい。その厳しさの中では、人間の嘘、偽りは通用しない。世俗の街のしがらみや、気遣いは大切であっても、それを超越したヒマラヤの人と自然の中で、千尋は聡明な雰囲気に包まれていた。ヒマラヤの中にいて、ヒマラヤの空気を吸っていることが、嬉しかった。

これまで、国立・C大学はヒマラヤ遠征隊を幾度も出している名門であり、千尋は山岳部のＯＧでもあった。山岳部とワンダーフォーゲル部の両方に参加していた。ワンダーフォーゲルだけの木本や竹中よりもハードに、千尋は日本の山を登っていた。

ロブジェはもうすぐだった。ディンボチェ・グループと別れ、一時間も登れば着いた。

四千九百三十㍍。懐に入ってしまったため、エヴェレストはまだ見えない。

少し傾斜した斜面には、すでにトレッキング用テントが十張りも設営されていた。ヒマラヤン・ツアー㈱の三つのパーテイーだけでも、十八名がいた。そのほかに、シェルパ・スタッフが十二名である。

年末年始は日本人の季節となる。欧米人はクリスマスを祝い、その後に国を発つのでまだいない。さながらロブジェは、日本人部落であった。

「サーブ、レッツ、トライ！」
シェルパのクマルが、羽根付き代わりにピンポン球を飛ばす、日本のゲームを差し出した。
「オッケイ！」
千尋は受け取り、ピンポン球を飛ばした。
風はないが、息を止めてピンポン球に追いつくと、たちまち息が切れる。
立ち止まり、膝に両手を置いて、ハア！　ハア！　と、肩と口で荒く大きな呼吸をする。
「サーブ、デライ、ラムロ」　（上手い）
小柄で少年のようなシェルパのクマルは、息も切らさず平気で動き回る。

簡単な英語、ネパール語、時には日本語が混ざるが、少ない言葉にしては良く分かり合える。ヒマラヤの中にいて同じ体験をしてみると、言葉で分かり合おうとしなくても、おおよそ察しがつく。これは日本人の得意とするところだが、シェルパにとっても同じ様な感覚がある。
シェルパ族はシェルパ語をもつが、ネパール語（ネワール語）とともに、文法構造は日本語と同じためかもしれない。主語＋述語の構造である。だから、単語さえ覚えれば、日本語と同じ感覚で並べればよい。単語だけでも、おおよその意味は通じる。英語の場合は主語の次に動詞がくるので、日本語の感覚とは異なってくる。

五千㍍のロブジェに来ても、千尋の体力にはまだゆとりがあった。
外で遊んでいるのは千尋とシェルパのクマルだけである。
富岡や木本はテントの中で頭痛とともに過ごし、外に這い出す元気が出なかった。

他のグループのメンバーも皆テントの中に入ったまま、外で遊ぶ者はいなかった。
日本出発から十日目で、五千㍍の高度はきつかった。
五千㍍の高度では、酸素は平地の二分の一である。ともかく、息が切れる。その分心臓は鼓動を増し、血液中への酸素供給量を増やそうとがんばる。脈搏が百を越える人も多い。
酸素が体内に行き渡らないのを感知するまでの間、高度障害は時間遅れでやって来る。
さらに睡眠中は呼吸が浅くなり、より酸素供給不足となって高度障害を助長させる。
調子の良かった千尋でさえ、夜半から軽い頭痛と頸痛がでた。その痛みは心拍と連動し、ドッキン・ドッキンと脈泊を感じて眠れなくなった。中野から借りた半シュラフに入り、さらに全身用シュラフに入っているので、体は温かい。
三人で入ったテントの中、富岡と木本は千尋よりも痛みが大きく、息苦しく眠れないでいた。しかし、吐き気までには至らなかった。吐き気は要注意であり、程度によっては酸素吸引を必要とし、高度を下げなければならない。
富岡には、日本で実績を持つクライマーとしてのプライドがあった。このくらいの痛みで、弱音を

吐くわけにはゆかない。夜があけるのを、辛抱強く待った。

＊　＊　＊

中野、竹中、靖恵の三人は、ディンボチェへと戻った。
下りは、登る時より断然呼吸が楽になる。所要時間も、登りの三分の一で着いてしまった。
サーダーのニマ・ドルジェと津山が出迎えた。
津山は一日のんびりと休養し、疲れも回復してきたようだ。一人でディンボチェに残り、周辺のカルカ（草原）を散策し、日だまりでトカゲ（日光浴の意）を楽しんでいた。

「サーブ、ティー」
なみなみと入った五百ccのカップを三つ、サーダーのニマ・ドルジェが差し出した。
「デライ、　ミート、　チャ」　（とても、おいしい）
一口飲んでから中野は、ネパール語でサーダーに答えた。
冷たく、乾燥した冬のヒマラヤ。暖かい紅茶は喉をうるおし、綿に染み込むような勢いで全身に染みわたる。
「ヒマラヤ登山は毎日四リットル以上の水を飲まないと、脱水症から高度障害になる」
といわれているが、身体が自然にその量を欲してくる。登山ではないトレッキングであっても、それに近い量が自然と飲めるから不思議だ。人はおのずから身体の自己保存本能と、それを維持する超精密自動制御装置を備えている。それに比べ、精神の自動制御は相対的で不安定、すぐにバランスを崩してしまう。

日本人メンバーは今まで七人であったが、今夜のディンボチェは四人となった。昨夜までは連日連夜、セブンブリッジに打ち興じてきた。そのテントの夜も三人減った今夜は寂しく、夕食を食べ終わると、皆早めにシュラフにもぐり込んだ。
メンバー・テントは四つある。これまでは二人で一つのテントに入っていた。七人の端数なので、コンダクターの中野はいつも一人でテントに入っていた。
今夜はロブジェとディンボチェにメンバーが分散したため、ディンボチェのテントは空いている。男二人、竹中と津山が一つテントに入った。
靖恵は今まで千尋と一緒だったが、今夜は一人である。
漆黒の天には金星と木星がひときわ輝き、散りばんだ星たちが無数に輝いている。満天に散りばんだ星たちに圧倒され、見上げるローツェは、闇の中では小さく黒い塊に見えた。肌を刺す凍てついた空気と、無数の星たちが蠢くその奥に、無窮の暗黒がより深みを増している。
靖恵はその暗黒にのみこまれそうで、一人テントにいるのが怖くなってきた。

「中野さん、今夜はそちらのテントに入っていいかしら？」
「いいですよ、どうぞ！」

靖恵はシュラフと貴重品だけを持ち、中野のテントに入った。テントは三人が寝られる広さで、トレッキング会社は統一したサイズを揃えている。
二人はテントの両端に分かれ、シュラフに入って横たわった。

「静まり返ったエヴェレストの麓で、一人でテントにいるのが怖くなって！」
靖恵は安堵した表情で、頬をゆるめた。
「私も先の遠征で、ベース・キャンプはいつも一人でテントに入っていたけど、時々ふと怖くなることがあったので、よく分かります。
不安に思うと想像ばかりが膨らんで、どんどん不安に引きずられてしまうんですよね！
そんな時、私はスサーナのテープを聞くと、とっても安らかな気分になりました。
グラシェラ・スサーナってご存知ですか？」
「ええ、わたしもスサーナを聴くのは大好きです」
「フォルクローレの歌姫、グラシェラ・スサーナの、変な日本語で歌う曲には哀愁があって、哀愁の中にもめげない力強さが、私はとても好きなんです。
遠征の間毎晩、私はシュラフの中でマイクロカセットテープから聞いていました」
「わたしもスサーナの曲は大好きです。
家で眠る時、蒲団に入って聴きながら、いつも途中で眠り込んでしまいます」
靖恵はまだ眠くないけど寒いので、シュラフにもぐり顔だけ出して静かに言った。

少し離れた石積みの小屋は、凍った空に向け白く細い煙をたなびかせている。シェルパたちは小屋の中でロキシィー（蒸留酒）を飲みながら、陽気な気分で歌っている。厳寒なヒマラヤの高所に住むシェルパ族は、ロキシィーを飲み続けることにより、その寒さと闘ってもいた。

＊　＊　＊

主要国首脳会議を「サミット」と呼ぶが、そのサミットは地球最高峰、第三の極地、エヴェレストを意味している。
一九七三年、第四次中東戦争は世界における石油危機をもたらした。二十世紀の発展を担ったエネルギー『石油』が、地球の安全保障と世界経済にとって、主要な戦略物資であることを鮮明にさせた。
この時、日本では何故かトイレットペーパーが不足し、人々は長蛇の列をなしてトイレットペーパーに群がった。

『風が吹けば、桶屋がもうかる』の例えがあるよう、大衆は目先の限られた情報だけで動かされるものである。

日本の企業はこの時以降『省エネルギー』対策に取り組んだが、その動機は経済効率を求めてであった。地球規模での成長の限界に思い及び、環境に配慮した結果における、二十一世紀の子や孫への配慮からではなかった。

風評が世界的混乱をきたすほどに情報通信技術は発達し、情報は瞬時に世界を駆け巡った。電波は一秒間に地球を七回半廻る。一地域の情勢が及ぼす世界への混乱を、通貨、金融、貿易等から協議、調整しようと、一九七五年、フランス・ランブイエで第一回サミットは開かれた。

情報通信技術の更なる発展は世界を益々グローバル、リアルタイム化している。サミットにはソ連崩壊以後のロシアも加わり、二十一世紀の人口、環境、国際犯罪、遺伝子操作、感染症等、幅広くサミットの議題となっている。まさに昨今は地球連邦政府に向けた、準備会議の様相をおびてさえいる。

南極、北極に次ぐ第三の極としてエヴェレストは位置づけられている。さらにエヴェレストは、地球における有限性を自覚する限界点としても存在した。エヴェレストは『地球上にもはやこれ以上高い地点は、ない』限界点なのである。

その『頂き（エヴェレスト）のかなた』に見出すものが、二十一世紀における人類の文明と文化を担う。先進主要国首脳が一堂に会し、人類の明日と未来を討議する『サミット』こそ、もはや戦争（銃社会）という武力に頼る解決ではすまないことを示している。政治による対話こそが地球人民の欲望にブレーキをかけ、放っておけば無限に膨張するエゴを抑制し、人々が我慢を分かち合える二十一世紀のために機能しなければならない時代に入ってきた。

いかなる社会体制にあっても、政治的数の力、経済的金の力は権力となる。この権力を無制限な自由の中に放っておけば、自由は自己増殖を始めて一極に集中してしまう。

宇宙の熱エネルギーにおけるエントロピーの法則は、人間社会へも応用理解することができる。熱エネルギーと人類の欲望は同じ性質を帯びている。

エントロピーの法則は、高いエネルギーの熱と低いエネルギーの熱を、閉鎖された同じ場に閉じ込めておくと、やがて平衡して、内部におけるエネルギー差を失うことを示している。閉じられた場における、エネルギーの『死』である。

二十世紀末の高度産業化社会がもたらした、地球環境における有限性の自覚は、人類の文明と文化にも、『地球』が一つの閉ざされた場であることを自覚したことにほかならない。

市場原理を弱肉強食な人類の欲望のままに放置しておくと、その行き着く先は欲望の死となってしまう。

すでにその兆候は現れている。選挙における投票の放棄は、その中の一つの現象にほかならない。

「私の一票を投じても、社会は何も変わらない！」

倫理なき市場原理の社会の中では、確かにその通りとなる。しかしこの諦めは、良き社会にしたいとする欲望（愛）の死である。あきらめの結果は、更なる権力集中へと向かってしまう。

閉ざされた場の中に『多様』に存在ができることこそ、エントロピーの法則は内部エルギーの活性化をもたらす条件であることを示している。しかし更に長い時間のその先で、惑星地球号のエネルギーは平衡となり、やがて地球の死を迎えなければならない。

だから現代政治に求められる役割は一極集中を抑制し、多彩な少数者（マイノリティ）のためにこそ政治が必要となるのである。

現代の民主主義は、多数決によって決定される仕組みをもっている。五十一％以上の賛成で事を決め、それをもって正義とし、残り四十九％以下を切り捨ててきたのが二十世紀の政治であった。

地球環境の有限性にゆきついた二十一世紀の民主主義政治は、今よりもなお多様化を認めざるを得なくなる。

政治という権力は、たとえ呉越同舟であったとしても、過半数（マジョリティ）を獲得すれば政権を握れる。権力という性質は、権力維持のために作動する。しかしながら権力の場が、画一的、同質的な閉鎖集団であったなら、やがてその内部はエネルギーを失い、時を刻んで自己崩壊へと導かれる。

多彩からなる少数へいかなる配慮をするのかが、現代政治が果たす大きな役割になってきた。

権力は放っておいても自己増殖を繰り返す。しかし人間の欲望の歴史は、必ずしもそれらが、平和を願う民衆のために活用されてはこなかった。権力は合法的な暴力装置ともなりうる。権力者自らの欲望を正義とし、非暴力、非組織な少数を蹂躙してきた。

形式は民主的であっても、民衆には世界を知り、世界を語る視点に欠ける。民衆に与えられる世界はいつも、情報操作された、限られた世界からなっている。高度、高速情報化社会は、この傾向を益々拡大させることも出来る。インターネットの情報交換や携帯電話は、一極支配の道具になる。

しかしもし民衆が自立、自主判断できる情報を、独自に得る努力を続けるとするならば、インターネットの活用や携帯電話の発信は、一極集中の欲望を破壊する強力な武器ともなりえる。

高度、高速になった情報機器の活用は、両刃の剣である。それはより多くの人々のために活用できる文明の便利な道具であり、活用の成果は文化の中味と人類の特性を大きく変えてゆく。

だがそれよりも、権力の自己増殖も例外ではなく、環境を構成する要素である。そして今、無限な増殖、無限な成長に限界点が見えてきた。

一極集中の欲望は自然な現象であるが、知性は歴史から学び、その倫理は一極集中の弊害に歯止めを掛けることもできる。知性がもたらす人間文化は、文明の進化に対する抑制か増進か、その時々にフィードバックをかけることができるのである。

限界に挑戦するのを冒険とするなら、その『頂き（限界点）のかなた』に見出すものは、地球存在への再認識となる。目指した極限に到達してみると、それまで省みなかった日常のこと、当たり前で平凡なことが、実は最も大切な人々の原点であることを知るようになる。

冒険が孤独な自己奮闘であったとしても、その彼方に見出すものは、肉親から人類へと思い至る、『愛』の再発見となり、日常性への回帰でもある。

ヒトの知能は自らの限界を確かめようと冒険を繰り返し、極限まで自ら辿ってみないと気づかない大いなる愚かな存在でもある。

このように現代のサミットには、二十世紀後半から二十一世紀初めにかけた、人類のミレニアム進化に対する英知と倫理が求められている。

一方、サミットを迎える下準備のための会議を、「シェルパ会議」とも呼んでいる。

「シェルパ」は職能の代名詞のように使われているが、実はエヴェレストの山麓、標高四千メートルを前後する、クンブ地方を中心に住んでいる「シェルパ族」のことである。

スイスと競い、イギリスがエヴェレスト初登頂を成し遂げた一九五三年五月二十九日。エドモンド・ヒラリーを支えて先着を譲り、ヒラリーと共に人類初登頂したのがシェルパ族の一人、テンジン・ノルゲイである。

以来、エヴェレストやヒマラヤの高峰登山に欠かせないのが、シェルパ族の下支えである。

高峰登山と、山麓を巡るトレッキングとでは、シェルパの役割は大きく異なる。

トレッキング・シェルパたちは、ガイドをするトレッキング・シェルパと、荷物を運搬するポーター役のシェルパとでチームを作る。そのリーダーをサーダーと呼び、ヒマラヤン・ソサエティの『サーダー・ライセンス』を必要としていた。

トレッキング会社は信頼の厚いサーダーを決めると、あとの構成はサーダーにまかせる。サーダーは近親者を集め、チームを編成する。トレッキング・シェルパはみな男性であったが、ポーター役には若く年頃の女性シェルパも多く混ざっている。

だからシェルパたちはいつも陽気で、賑やかで、歌声が絶えない。

テントの外はマイナス十五度。土の中に残ったわずかな水分は霜柱となり、それよりも多い水溜りは硬い氷面を作る。凍てついた空気の中では、テントの中も外も大差はない。

＊　＊　＊

「靖恵さんは、お酒飲みますか？」

「ええ、好きです！」

「私は酒が飲めません。その代わり、コーヒーが大好きなんです」

「わたしもコーヒーは大好きです！

仕事でとても疲れた時など、一人でコーヒーを飲みにゆくことがあるんです。

カウンターに腰掛け、一人黙ってコーヒーを飲んでいると、とても気持ちが安らぎます」

「靖恵さんはお一人でお住まい？」

「母と一緒です。

鶴見に住んでいますが、仕事は赤坂です。

ご都合の良い時に、ぜひコーヒーを誘って下さい！」

「私はカトマンズのコテージで、藤椅子にもたれてコーヒーを飲みながら、スサーナの歌を聞くの

が一番好きでした。
哀愁の中に澄んだ力強い彼女の歌声を聞いていると、どんなに悲しくっても、その悲しみの中から静かな勇気がわいてくるんです」
中野は、三ケ月前の遭難事故を思い浮かべながら、靖恵に言った。

「私は三ケ月前、ヒマラヤで遭難事故を起こしてしまいました。
ダクラという山はご存じですか？」
「いいえ、しりません」
「マナスルは知っていますか」
「ええ！」
「その、マナスル(8156m)の南側の山がダクラ(7835m)、さらにその南側がヒマルチュリ（789m）この三つの山を**マナスル三山**と言います。
そのいずれの山も、初登頂は日本隊です。
マナスルは日本山岳会、ダクラは大阪大学、ヒマルチュリは慶応大学。
そしてダクラだけは、初登頂者が頂上からの下山中に転落してしまい、写真判定によって初登頂と認められた山で、その後は登頂されていません。
だから、今も生存者なき頂です」
「そう言われますと大学生の頃、新聞で読んだような気がします」
「現在のヒマラヤ登山は単に易しいルートから頂上に登るだけでなく、より困難な岩壁を登って頂上に達する時代に入っています。
我々は、クライマーの集まりですから、ダクラを南西壁という岩壁から登っていました。
平均斜度六十度、ヒマラヤのアイガー北壁とでも言うような、高度差千七百㍍の大岩壁を登って、七千五百十四㍍の南峰を初登頂する計画でした。
登山期間の三分の一を過ぎた九月半ば、南西壁の真下に立ちました。そこに立ってみると、遠くで垂直に見えた大岩壁も、登れる傾斜として体感できます。
『成功できるかもしれない』と、
明るい見通しに立った矢先、第二キャンプ一帯が、千㍍上部の氷河崩壊による爆風を受けてしまいました。
私も吹き飛ばされたのですが、そこいた六名の内、三名の隊員が即死状態で、他の三名はまったくの無傷でした。
今も一人は発見できず、氷河の中に眠っています」

「・・・・・・」
靖恵は返す言葉が見つからなかった。
「その時、富岡さんは日本に残り、ご遺族への説明や関係者への連絡など、大変苦労をかけさせてしまった。

だから今回のトレッキングはそのお礼の意味で、一緒に来ているのです」
中野はダクラ遭難の様子を、少しずつ話した。

靖恵は本格的登山の経験がなく、その実感に欠けていた。
だが、エヴェレストの真下、ディンボチェの凍てついたテントの中にいる今、ダクラ登攀の状況、遭難の様子を実感として分からなくても、仲間を失った隊長・中野の悲しみは、その言葉、その様子から、靖恵にも充分伝わってくる気がした。
靖恵もまた、同じような山の遭難による離別ではないが、かつて愛し合いながらも恋人と別れ、大好きだった父とも死別していた。
靖恵が学生時代の青春を語らった愛は、卒業とともに彼と異なった道を歩まざるを得なかた。彼は実業の道に一人分け入り、靖恵を連れて行ってはくれなかった。
靖恵もまた一人、自分の道を選んだ。
特に内向的だったわけではないが、心を上手く言葉にのせて伝えることは苦手だった。
大学では文学部を選択した。しかし言葉が心を伝えるＤＮＡであることを知りながらも、自らの心を他人にぶつけ、その反応を再び消化する心のキャッチボールが、どこか煩わしかった。 自立心が強い靖恵にとって、女性なるがゆえの男性への甘えや、家庭にこもった子育てなど、未だ思いのほかであった。
自分が自分であるがゆえに、他人もまた他人であった。自分と他人が交流をうながす契機となるべく愛情や、自ら得た知識を他人に対して広めるような創造の意欲にまで、靖恵の心は未だ成熟していなかった。
これまでは得意な英語を使って世界を旅し、旅の景色の中に自らを同化させることで意識を静め、心の安らぎを得ていた。
しかし青春の情熱は、風景との一体感だけでは物足りないのも事実だった。
生命とは五感で感じる体感で、六感を含む生(なま)の感覚を味わいたくなった。
人類の歴史を重ねた古代都市から、この世界の屋根、エヴェレストの大自然に分け入ってみると、ことさら人間一人のはかなさを実感していた。
成熟に向かう人間は、一人自分の殻にこもるのではなく、個人から社会へと分かち合い、分かち合える存在に変わってゆく。そして男には父性が、女には母性が育ってゆく。
「私も愛情を分かち合える人間になりたい！」
漠然とした思いが、今の靖恵を育んだ年頃にもなっていた。
そんな靖恵を黙って見つめ、靖恵の気ままを許していた父は、三年前に亡くなった。
遭難の悲しみに耐えている中野の心情が、靖恵にも少しずつ分かち合えるような気がした。

「仲間を探しに行く時、一瞬は怖かった。でも、行かなければならない義務感が勝(まさ)った。
たとえばもう一度氷河崩壊があり、それに巻きこまれ死んでしまっても仕方ないと覚悟した時、それからはとても冷静な行動や判断ができたと思う」

「それまで三十五kgを平気で背負っていたメンバーが、この時から急に力が出せなくなってしまった。
そんな仲間を見ると愕然としたけど、やがて仕方ないと思った。
なぜなら、それが普通で、自分で自分を守る人間としての本能なんだから」

「だから普段の山登りの中で、いかに『遭難と死』を考え続けていたかという、イメージ・トレーニングの効果が、現実の行動に反映していたと思う。
そういった意味で山はただ登るだけでなく、『なぜ登るのか、なんのために登るのか?』を、いつも考えていたことが役立ち、色々な批判や意見を冷静に受け止めることができたのだと思うのです」

「・・・・・・」
靖恵は目を瞑り、黙って耳を傾け続けた。寒さからではなく、身体が小刻みに震えていた。

「私はただ山を登るだけでなく、登るのと同じくらいに考えるのが好きだった。
だから、登山学を考え、山登りの社会学的研究などをテーマとして、山登りを学問的に考察する努力をしてきたのだけど、日本の登山界で、そんなことに興味を持つ人はほとんどいません」

「山登りは頭で考えるものでなく、実行するものだとして、実践と実績の記録ばかりを問題としています。
山登りは行為ですから、実践のない奴は黙っていろ!
というのが近頃の、日本登山界の流れです」

「私は今三十二才です。二十歳(はたち)のときに韓国の山を登りに出かけましたが、渡航制限と外貨の持ち出し制限がありました。それ以降、高度成長社会は生産性向上をもたらし、富の余剰をもたらせました。社会生活に余剰ができることによって、社会人山岳会は成長してきました。今は海外渡航も自由化し、それまで主流だった大学山岳部の成果を、はるかに凌駕しています。しかしやたらと実績主義がはびこり、記録の比較ばかりが中心課題になってきてもいます。
社会人山岳会の実践力と、大学山岳部の文化的探求が融合すれば良いのですが・・・!
私は山登りでこそ、心・技・体がバランスよく磨かれる、総合文化と思っています。
記録の比較をスポーツとして、平和裏に競うことは良いことです。それは文化の中心ともなり得ます。でも私が言いたいのは、『そればかりでは、いけない!』ということです。
個人における心・技・体の総合として、山登りは文化のあらゆる要素を含んでいます。
スポーツとした、記録の比較ばかりでありません。精神的な面での思想、哲学、文学、宗教や、芸術的表現の写真や絵画など、多彩な表現ができます。そして何よりもクライミングの陶酔は、バレリーナが舞台で踊るに等しい芸術的身体感覚があります。
一方、登山隊組織の運営は、社会組織の在り方にとっても参考となります。さらに個人の楽しみだけでなく、他人の楽しみをサポートできる、社会的職業へも発展できます。アルパインガイドや、ト

レッキングのツアー・コンダクターはその先例ともなっています」

「私は四年前、二十八歳で初めてダクラ南西壁に挑戦しましたが、その遠征を前に考えていたことが、『登山学』と『山登り・その社会学的研究と応用』でした。

なぜ山に登るのか！

また、登山隊の運営やリーダーシップ、メンバーシップを考えると、それが一般社会のなかでも十分活用できそうな気がしました。

それらの思考は山登りそのものではありません。登山行為とは次元が異なる、学問的フィールドとなります。だから登山家はそんなこと考えなくて良いかというと、そうではないと思うのです。

私が望む山登りは、自らの企画立案からなる自己負担、自己責任を伴った、心・技・体の統合をめざす行為です。山に登ること、さらにそのことを考えることは、同じように大切な山登りの要素だと思っているのです。

だから今回、二度目のダクラ遠征は、『この指止まれ！』式に個人が集まり、自己責任からなる、自分達の資金と努力で実現しました。名もなき個人が集まって、遠征を実現することができました。『この指止まれ！』式のヒマラヤ登山が実現できたそのことが、日本の登山界にとって新たなヒマラヤ登山方式を実践できたと思うのです。

それだけに、新たな試みで遭難死亡事故を起こしてしまったことへの責任を、重く受け止めています。この責任を果たすには、きっと長い月日がかかることでしょう」

「わたしは今までハイキングや、夏山縦走程度しか経験がありません。本格的な冬山や、アルプス登山経験のないわたしにとっては、どのようにヒマラヤ登山の責任をとったらよいのか分かりません。でも、あまりご自分を責めすぎないほうが良いと感じますけど！」

「ヒマラヤのような大掛かりな登山にあっても、もはや既成組織の中から産み出され、他人の資金を当てにした、組織登山の時代でないと、私は強く思っています。

最初のダクラ遠征ではＹ市から二百万円、Ｙ県からも二百万円の公的資金援助を受けました。

だから最初は個人の発意であっても、その組織は公共的なものへと委嘱され、大儀名分の登山目標を掲げて税金の支援を受けるわけです。他方ではそれを引き出す政治力と、組織をまとめる行政的な能力が中心となります。現代クライマーの多くは政治や行政組織が苦手です。大規模なヒマラヤ登山組織になると、組織運営者とクライマーとの適性の違いに分離され、ヒマラヤ登山隊の内輪揉めが絶えなかったのです。

しかしエヴェレストが登られてから二十五年、私は山登りの世界はもう政治の延長でなく、組織登山の時代でもなく、個人の様々な発想を実現させる、多様化した実践と思っています。

エヴェレストが未踏だった時、イギリスとスイスは国家の威信をかけて初登頂を争いました。その競争にイギリスが勝ち、エヴェレスト初登頂の記録は、エリザベス女王の戴冠式典へと奉じられました。人類の偉業はすべからく、初期においては政治的評価の対象となります。

そして歴史は政治的影響から、文化的普及へと変質してゆきます。

これを文化の成熟と言うのでしょう。

いつまでも政治の世界を引きずった日本の登山界は、まだそのことに気が付いていません。今でも政治と行政がからみあっています。個人の自立と努力の成果への評価に気が付かず、歴史の歩む必然的方向を見ていません。これからは個人の自立と努力、そして自己責任。さらに大きな流れは、地球環境における限界への問題と、それに対する諸々の判断基準でしょう！

そのことを広く紹介すべきジャーナリズムも、政治と行政がからみあった、統治の感覚から抜け出ていません。唯一抜け出せる条件は、経済的利益を共有する時だけです。

だから日本は思想や倫理が伴わない、経済は二流、政治は三流と外国から言われるのです」

「一九五三年、エヴェレストがヒラリーとテンジンによって初登頂されてしまった時から、山登りに対する価値観が大きく転換することは、文化として自明なことでした。

次は個人の楽しみ方へと、変質せざるを得ません。

その変化を私は、『文明的発展から、文化的発展への変質』と言うのです。

それは人類というマクロな視点から、個人というミクロな視点への変容でもあります。

さらに私は、個人として生きる楽しみ方こそが、『現代の文化』とする様々な中身であると考えています。だから、山登りの世界でエヴェレストが登られた後は、より個人的で多様な山の楽しみ方ができる時代に入ったと考えるわけです。文明的発展から、文化的発展へと変わってゆくのです」

「山の世界ではエヴェレストが初登頂された一九五三年を分岐点として、それ以降は個人的価値観による多様化した登山文化へと発展する契機として、そのエヴェレスト初登頂を受け止めることができました。

しかし二十世紀に発達した機械産業社会全盛の一九五三年、成長主義はまだそれ自身の中に含まれている『成長の限界』という実感に欠けていました。

機械産業社会の中では、登山におけるエヴェレストのような限界点の存在が、具体的な姿をもって目の前に現れていないからです。発展や開発による右肩上がりの成長主義、成長経済、生産至上主義が本流となっています。法律や税制も勿論のことです。

そのような社会体制の中における日本の登山界も、より高く、より困難な登山をめざす、成長至上主義が主流です。しかし、山の世界はもうそうじゃないんだ！と一人で言ってみても、日本の社会は受け入れてくれません」

「今度のダクラ遠征で、私はこのことを意識した上で『この指止まれ！』を実践してきました。

メンバーを『この指止まれ！』式に集めたことは、意志ある個人だけで登山隊を作りたかったのです。それぞれの個人には、様々異なったバックグランドがあります。意志ある人ほど、その思枠がはっきりしているはずです。それを個性が強いと言ったらよいのでしょう！

そんな個性的集団の中で、『ダクラ南西壁からの登頂』という唯一共通な目的実現のために、出し惜しみなく個人の力を結集できたらと願っていました。

その行為を通し、何もしなかった人よりも多彩で様々な経験ができ、個人の中に還元されてゆきま

す。私は、それら成長のフィールドが組織や集団のためにあるのではなく、多様な文化活動を通した個人の心の中にあると考えたのです。そして個人を基盤とした、社会への文化発展・成長ができると思っています。これらの集積が社会資本にもなるのです。」

「わたしも中野さんのように、個性を大切にした生き方に大賛成です。

これまで母からは、「靖恵は男っぽい」と言われてきました。家庭の中にいて個性を抑え周囲に調和、男性をサポートするような生き方を女性的とすることに、いつも馴染めませんでした。

学ぶほどに自我が育ち、社会に出てからは自分の判断と責任でできることには、周りを気にせずひとつずつ実行してきました。

おおきなことはしていませんが、山に出かけることや、外国を歩く時も、このエヴェレストツアーへ参加したことも、全部自分が決め、自分の資金で参加しています。

大学を英文科で学んだから、イギリスやアメリカのライフスタイルに憧れるといったことではありません。

中野さんのおっしゃったように、人には様々な個性があることを認めれば、自分と他人が違っていることは当然なことですよね。ですから、まず自分の考えがあり、判断があります。次に集団へ参加するのであれば、集団や組織のどんな役割が担えるか、そのことが楽しみとなるかを考えます。

多様性の中で個性を発揮、主張する個人主義と、他人の個性を認めない独善的な利己主義とは違った在り方ですよね！

集団が優先する日本社会の中で、そのことの理解が不足しているのは常々実感します。

わたしは女性ですけど、男性でも女性でも、同じことだと思うのです。

いつも父はそんなわたしを黙って見つめ、わたしの行動を許してくれたのです。」

「二十一世紀は地球規模での物理的限界に到達します。

すでにローマクラブは一九七五年の報告書、『転機に立つ人間社会』において、地球上における成長の限界を考察しています。

この報告書は地球環境問題に着目したレポートですが、登山社会はそれより二十年早く、一九五三年エヴェレストが登頂された時から、すでに成長の限界を迎えていたのです。

しかし、限界の先に何が見えるか！この変化への展望として、社会現象に共有できる視野がありませでした。平地に栄えた車社会の車窓から、丸い地球の限界点は見えなかったのです。

球形はぐるぐる廻れるエンドレス。この視点には始まりがなく、終わりもありません。

もっとも早く地球の限界に気づいた視点は、飛行機の操縦士ではなかったでしょうか。

第二次世界大戦の中で死んでしまったサン・テグジュペリは、フランスの郵便飛行操縦士でした。彼の著作は、空中に飛び立った空から見つめた人間社会への視点でした。だから代表作『星の王子さま』では、人間の限りない欲望の虚しさと、身近で気にもしなかったバラの存在が、実は一番大切な関わりであることを訴えています。その関係を継続させるためには、毎日の努力や基本的なルールが必要とも述べています。

この哲学は地球環境問題の中に共生する人間社会の在り方にとって、基礎となるべき人間関係を訴

えています。

操縦士の次に気づくチャンスは登山家にあったのです。しかし先鋭的な登山家の多くは人間社会に適応しにくい孤高な精神を持ち合わせ、その精神（スピリッツ）が彼を山へ向かわせていました。山で鍛えた精神を、人間の文化、社会関係の中へ還元させる努力が極めて貧しかったのです。

初めて人類が登頂した八千㍍の山、アンナプルナは一九五〇年フランス隊によって登られました。エヴェレスト初登頂の三年前です。この時隊長だったモーリス・エルゾーグやガストン・レビュファらは孤高な精神だけでなく、登山と文化、登山と人間社会を結びつける努力をしていた人達でした。

エルゾーグはアンナプルナ初登頂の代償として、再びアルプス登攀できないほどの凍傷を負いましたが、後にフランスのスポーツ大臣を務めたと言われています。

レビュファは幾冊もの山の本を書き、登山と文化を結びつける努力をしていました。私もそれらの本の影響を受けて登攀に憧れを持ち、サン・テグジュペリへと誘導されたのです。

登山家の次は宇宙飛行士です。それまで人類は地上の視線から、観念と思惟の中で神を感じ、神を論じていました。でも宇宙空間へ飛び出し、丸くて宝石のように青く輝く地球を見つめてみると、まさに『神の目』を意識せずにはいられなかったでしょう。

地球が携えている美への感動は、地上に住まう人々の彼我欲望を超越し、地球のあらゆるものへの愛おしさと優しさを感ずる、人間の真心を呼び起こしてくれたのでしょう。

宇宙飛行から帰還した後で宣教師へ転じた人もいますが、宇宙飛行士の中からサン・テグジュペリに代わる思想が出されるのか、私には大変興味があります」

「目線の高さでものの見え方が違ってくる　・　・　・　・

うわー　・　・　・

驚きです！

わたしたちはいつも丸い地球のエンドレスな地平線に立ち、同じ視点から見ていました。それが理性として教えられ、覚えたことが知識となって再び教える側に廻ります。

体験のない、違った視点があることには思いもよりません。もし違った視点があると分かっても、体験したことがないから、実感を伴って受け入れることができません。

たしかに同じ地平線で見つめ合っていると、お互いに相手の背中が見えません。地平線から飛び上がり、相手の頭上を越えてみれば背中が見えます。単純なことですけど、この目線の違いからは、物事を考え、判断する上で大きな違いが生まれてきますね！

わー！

すごい！

わたし、たった今、教えていただきました！」

「一方で日本の登山界は、『**登山はスポーツである**』と自ら小さな枠をはめてしまい、スポーツとしての記録ばかりを問題としました。

登山における記録の比較は、条件設定の違いだけとなります。

例えば女性としての初登頂とか、最年少・最高齢登頂とか、最短時間登頂等々です。

これがスポーツとしての様々なバリエイションを提供するのは事実ですが、大切なのはそれだけが山登りの中心ではないということです。

山登りはあらゆる文化的要因をふくんでいます。ですからその人なりに山と対峙し、その人なりの方法によって、その人なりの登り方で良いと思うのです。

ただ一つ警告として、自然に分け入る登山者には、様々な危険が待ち受けていることを自覚していなくてはいけません。ですから、その登山で予測できる限りの安全対策を講じておく。

それでもなお登山においては、予測できない不測事態に遭遇してしまいます。そのためにこそしっかりと文化の中に登山を位置づけ、安全への啓蒙は大切なことです。また登山者組織とは、これら安全への啓蒙と、万一遭難してしまった時の救助搬出活動が軸となるべきです。

組織が必要なのは登山者の統治のためではなく、登山者による組織の活用です。そのためには登山者自らが応分の負担をしなければならないのは当然です。登山口で登山税を納め、遭難救助保険に入るのは当然な心構えです。さすれば職業としてのガイドや救助隊も成り立ち、登山大学を軸とした総合文化の確立もできるでしょう。

本来登山は自分の楽しみのために行くのですから、その楽しみを語らい、交換できる、様々な集まりも当然できます。それを支援する職業も生まれます。

山登りは社会で生産された物を背負い、それを消費しながら楽しむ消費の文化です。そして私は、消費を楽しむそのことが、文化活動そのものと考えているのです」

「ヒマラヤの岩壁登攀は、現在最も困難な登山形態です。我々も準備に三年を費やして実現させましたが、それでも遭難という結果を招いてしまいました。

結果の重大なことに変わりはありませんが、ダクラ南西壁を登るそのことへの危険と困難は、参加した誰もが受け入れていたことでした。

隊員三名が死んでしまいましたが、それが大沢君でなく、私であってもまったく不思議ではありませんでした。

では何故に死んでしまったものが大沢、万里、高野であったのかが、今の私に疑問なところなのです。

私はずっと神様の存在を考え続けてきたのですが、でも、死亡したその三名を神様が決めたなんてとても思えません。

死んでしまった三名は、生きて残された他の者より、真に良い人達でした。登山隊にとっても、必要不可欠なメンバーばかりでした。本当に神様がいるのなら、神様はそれらの良いメンバーは生かして残し、協調性に欠ける我儘なほかのメンバーを、どうして選択してはくれなかったのでしょうか？

そう考えると神様なんていない！

ただ偶然がその結果を招いた！

と考えるほうが、より合理的だと私は思うのです。

遭難の諸々に対し、充分ではありませんが私には心の準備が出来ていました。

だから『いざ』という時に冷静な対処ができたのだと思うのです。

またそのことは、今私の精神（こころ）の支えにもなっています」

「いわれてみると、なるほどそうですね！・　・　・　と思わされることばかりです！
わたしには山の経験も少なく、難しい登攀もしていません。日本の登山界のことは全く分かりませんし、関心もありませんでした。
でも中野さんのように、個人を軸とした山登りや、個人の多様性を認める文化の在り方は、わたしがこれまで生きてきたことと全く同じ方向に感じます。
それらを中野さんのように上手く整理してありませんし、知識の枠も狭いのですが、言われたことの中身については同感するものばかりです」

靖恵は寝袋から顔だけのぞかせ、中野に向って言った。
靖恵には夏山登山程度の心得しかなく、冬山の岩壁登攀やヒマラヤ登山は実感できない。
登山は安全な範囲で行う、健全なスポーツの一種と思わされていた。生死を賭けた山登りや、それを更に学問的に分析する視点など、思いもよらなかった。
靖恵には返す言葉が見当たらず、言葉少なであったが、新たな山への展望が、闇に浮ぶヒマラヤのかなたに、かすかに見えるようであった。
凍てついたエヴェレスト山麓の夜、キャンドルの薄明かりの中で静かに語る中野の言葉は、和紙に染み込む墨文字のごとく、靖恵の胸にずんずんと分け入ってきた。

＊　＊　＊

「今の日本国憲法は第二次世界大戦の反省から、第九条で戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認を掲げています。それに伴い徴兵制も廃止されました。再び戦争や徴兵制度はよくないけど、二十歳になり、青春の多感な中で自らの生と死を考えさせられる徴兵制度には、一面で青年の精神の発達を促す良い機会がありました。
徴兵制の復活を願うことではまったくありません。平和にどっぷりとつかった現代は、生と死を自分に取り込む精神の発達にとっては不毛な時代です。
戦争はスポーツに置き換えられました。人間の闘争本能が人を殺傷することではなく、安全を保障されたフィールドの中で健康的に競い合うことになりました。
五万人を収容したローマ時代のコロセウムは、近代オリンピックへと変わったのです。
そのことは人類にとって良い方向への転換ですが、生と死を受容する精神の発達にとっては、リアリティのないバーチャルな感覚となってしまいます。
体験して得た感覚と、体験を経ない知識や映像から得た感覚は異なります。体験を経ない感覚は、自身の身につきません。身を切る痛み、血を流す痛み、愛する人を永遠に失う心の痛み。
それらをいかに自身の感覚の中に取り込めるか！
悲しいかな、人は同じ体験をしないと、真に理解はできません。
だから人は皆同じ体験をしなければならないとして、戒律や法律、慣習で縛ってしまうことには反対

です。さまざまな体験をその人の意思で実行できれば、それで良いと思うのです。
特に山登りはそれらの体験を、自然という舞台の中で、自らの意志をもって総合的に味わうことが出来るのですから・　・　・　」

「生死の自覚を必要としない現象は、スポーツ競技ばかりではありません。平和な社会の職業も、サラリーマン化が進んでゆきます。職人気質やプロフェッショナルな一芸の追求が軽んじられてきます。侍社会では職務判断を誤ると、切腹による自己責任をとらされたりもしました。平和にどっぷりと浸かりきった社会にあっては、生死を賭けた業務判断もありません。
平和社会の中では、それらすべからく自己責任を伴わない、アマチュア社会になりがちです。
オリンピックはアマチュア精神の総本山として、長く世界のスポーツ界に君臨しています。それはスポーツとして安全が保障されたフィールドの中で、純粋にその競技の持つ特性の世界一を競う平和裡な争いです。これはこれで大きな役割を果たし、人類の共存にとって意義あることに間違えはありません。
しかしそのことばかりが中心になってしまうと、人間の大切な個性や感性を失うことにもなってしまいます。純粋なるがゆえに生活の糧と切り離され、スポーツのためのスポーツになります。その競技種目で生活の糧を得るとすれば、純粋な精神を売却して金銭に変えたとして、プロフェッショナルを排除してもきました。
アマチュアが大勢を占める、自由で民主的な平和社会の中では、プロフェッショナルな精神は軽んじられています。プロはプロであるがゆえに自己責任や、生活への緊張を伴います。
プロならば、その領域における責任から逃れようとしないものです。自分で自分の身を律する人たちのことです。
しかし平和社会の中で、自分で自分の身を律することの難しさは、証明するまでもありません。形はプロでも、精神はアマチュア化してしまう。平和で自由な社会の中で、自己責任から自分を律することの難しさは容易でありません。欲望に簡単に負けてしまうのも、これまた人間の大きな心の罪なのですから！」

「コロセウムは実際目にしてきました。あの時代、よくもあのような大きな建造物ができたものだと、ただただスケールに圧倒され、ハードウエアだけに目がいってしまいました。
それに付随して市民と呼ばれない人々がいたことは、現代の観光でかき消されています。人権が認められなかった奴隷と呼ばれた人々や、剣闘士として闘わざるを得なかった選ばれた奴隷の人の、心の中にまで思い及びません。
ローマ時代の制度は別にしても、市民へ娯楽を提供した剣闘士という職能が生まれたことは、現代のプロフッショナルと呼ばれる専門職業に連なっているのでしょうか？
現代、一部のスポーツ・プロはヒーローとしてもてはやされ、高額な報酬を得ています。
人権や市民権を別として、ローマ時代の剣闘士は現代のスポーツ・プロとよく似ていますね。
あっ、そうか！
近代オリンピックを確立させたクーベルタン男爵が、アマチュアを尊重しプロを排除したことは、男

爵という階級から見ると、プロは奴隷に見えたからかもしれませんね。」

「靖恵さん、良いところに気が付きましたね！

古代ローマの奴隷制度は、現代のサラリーマン制度につながっているかもしれません。労働を切り売りし、責任も切り売りする。そして時間外は個人として一見自立しているかのようで、実は大きな組織の枠組みの中に繋がれている。

ローマ時代のコロセウムや鎖というハードウエアは形を変え、現代は組織という全体が見えにくいソフトウエアという鎖に変形されているのですね。その中で大多数の人々は市民を演じながら、実は奴隷であったという。」

「私は山登りの大きな特徴として、大自然の中で生と死に直面することが、徴兵制度にとって代わる青春の、自己(アイデンティティ)を確立させる大きな契機(チャンス)を持っていると考えるんです。

我々は遭難という最悪な結果を招いてしまいましたが、このことに悔いることはありません。

危険を承知で皆参加をしていました。

偶然が私を生かして残しました。

死んでしまった仲間のためにも、山登りの持つ危険と魅力を、一般社会の中にもっと広く知ってほしいと私は願うのです。山登りを通したいろいろな人生のありかたを、もっと広く社会に知ってほしいのです」

「山登りばかりでなく、生命をかけてその道を求め続けている人々も同じです。勿論それだけが山登りではありませんし、人もまた皆が皆、生死に直面して鍛えられる人ばかりではありません。

人にも様々な強弱があります。生死に直面した、ハードな登山に耐えられない人も多くいるでしょう。それらの人々にとっては安全なハイキングでも良いし、山岳風景を見る観光でも良いと思うのです。

そのように、山を介した色々な山との関わり方の分類を研究したのが、『山登りの社会学的研究と応用』でした。様々な山登りを通した人と自然の関わりの中から、人間の感性が多様に磨けると思うからです」

「人には本性とした闘争本能があります。それを戦争や他人との比較に使ったのが二十世紀までした。敵を自分の属する組織の外部に設定し、組織内部を統率する手法です。

しかしこれからの二十一世紀は、自分自身との闘いです。自らの良い心と悪い心との闘いです。実はこれが、人類にとっては一番難しく困難な闘いです。

二十一世紀の人類は、そのステップに立っているのです。

一人人間の心の中でさえ、四分の三くらいは堕落した欲望が支配しています。私の心の中でさえ、その程度の比率で悪い欲望が心を満たしています。だから人類の平和や崇高な理念の持続が難しいのは、平和ボケと揶揄される日本のあり方を見れば一目瞭然でしょう。四分の一程度の良い心が、残りの四分の三をいかにコントロールできるかが、思想、哲学、政治の役割と思いませんか！」

「わたしはとりたてて宗教観を持ってはいません。はっきりと思想と呼べるものもありません。哲学や政治を言われても、大学の一般教養の知識を出ていません。

自分の力を思いっきり発揮したい意欲はありますけど、それが他人との闘いに勝とうとする欲望とは異なっているように思います。理性で、感情を抑えることもできます。

でもわたしの心は、わたしの感性にすなおになれた時がもっとも充実し、リラックスした状態となります。それがわたしの自然体です。

やはりわたしも、女性だからでしょうか？」

「ユダヤ、キリスト教の神を頂点とした、階層による秩序安定の文化で縛られていた十九世紀後半のヨーロッパで、『神は死んだ』とするニーチェは、神から導かれた宗教的価値観を否定しました。そして『超人』の思想を提示し、神にとって代わる人間中心主義を唱えました。

それがデカルトの理性へと引き継がれ、科学的合理主義へと拡大して近代思想の基礎になったのです。

それから一世紀を経た二十世紀後半、理性という思惟が殺してしまった人間感性の復活を望む声が起きてきました。

デカルト、ライプニッツらが主張した合理主義と、ロック、ヒュームらが主張した経験主義とは対立した概念のように思われますが、実に山登りはこれらを統合した総合として、新たな哲学が可能だと私はずっと以前から考えていました。

ニーチェが『神は死んだ』と言ったように、エヴェレストが登頂されてしまった登山界も、『山は死んだ』のです。

つまり、『神や人類』といったマクロな視点から思想や登山を捉えることの終焉を示しています。そして『神や人類』に代わる新たな単位（ユニット）として、「個人」が中心となった考え方、組織的行動などに移ってゆきます。

しかしながら、神をもてない人間の心ははかなく、不安定なものです。神に代わりえる理性が持てる人が、どれほどいることでしょう！

人は皆、神を乗り越えた超人になれるのでしょうか！

人の心ほど、一喜一憂を繰り返す不安定な存在はありません。

現実に心で感じる一喜一憂の相対性は、絶対的基準があいまいであることから発生します。

しかしこの絶対的基準に再び神を持ち出し、宗教の規範を当てはめたとしても、科学の合理的理性にとっては盲目的に神の絶対的基準に従うことはできません。

仮に私が超人になり、神にとって代わる完璧な理性が持てたとしても、私の感性はその完璧さに魅力を感じないでしょう。

なぜなら、『美』という感覚的であいまいな人の感性や、『愛』という心と心の関わり方のほうが人間的として好きだからです。人間はデジタル的な理性とともに、アナログ的でファジー（あいまい）な感性をも兼ね備えている複雑な生き物だからです。

集合社会の構成員にとって、理性は倫理的規範を伴った自己規制の働きをしなければなりません。一方、同じ集合社会の中に実存する私の心にとって愛は、より深い存在の意味を与えてくれます」

「このように、二十世紀後半から二十一世紀にむけた新たな考え方として、科学的合理主義と経験的実証主義は統合し、そのバランスを計るべきだと思うのです。統合し、バランスの基準となる物指しが、これから探求される地球環境容量なのです。地球環境容量は限りあるものと分かってきたからです。

その限界を探るのが科学的手法であり、バランスを計るそのことの決断が設計なのです。

設計は工学的な図面の世界と思われていますが、実は政治的決断、行政的判断、国民の選択など、あらゆる場面で決める事が、設計、デザインと呼ぶ行為にあたります。

二十一世紀の良い心とは、地球環境、宇宙環境を考慮した共存共栄の社会だと私は考えています。この全貌を示せる人が、真に人間社会のリーダーシップをとれる人だと思います。

いかなる戦争への大儀があったとしても、もう地球上での人と人との戦争は止めなければならない歴史的な時期にさしかかっています」

「デジタルやアナログの話は、わたしにとって少し理解しがたい話になってきました。

男性も女性も、それぞれの領域は広いでしょうし、重なる部分も多いのではないかと思います。男性、女性と並べ立てて比較することが、ナンセンスであることも分かっています。

世界の中では女性の王様や政治家もいます。ただちょっと、女性の思想家が欠けているかもしれません。ヴォーヴォワールは、ちょっと迫力不足ですよね。

でもやはり、男性と女性に分かれていることは、それなりの理由があって当然とも思います。女性にとっての愛は理念的なものよりも、もう少し現実的な実感や感触を伴った関係のような気がします。理性で情念を抑えたとしても、心から納得できるものではないと思うのです。

真のロマンチストに、女性はなれないのかもしれません。

でも中野さんのおっしゃりたいことは、ニュアンスとしてよく分かります。」

「今の日本国憲法とその理念は、一部の人々はアメリカから押し付けられた憲法だから、日本として独自に変えなければならないと言います。しかし形式がそうであってもその内容は、人類の理想と平和を世界に先駆けて実現した、崇高な思想をもっています。

また別な面から日本の新憲法を考えてみると、地球人としての新たな試みともいえます。

二度の世界大戦という壮大な実験の後、国家を束ねる体制として三つの形を実施した。自由主義体制、共産主義体制、そして平和主義体制の三つです。

自由主義、共産主義という対立した概念を設定し、それを米ソ対決、東西対決という武力牽制を軸とした、国際間の対立緊張の中で国家の在り方を試みている。

お互いに組織の外部に敵を設け、組織内部を引き締める方法です。

第三の平和主義は日本で試されているのですが、このことを為政者達は国民に知らしめないようにしている。教育内容からも排除されているので、国民も気づかない。

武力を放棄した崇高な平和思想の中で、国民がいかなる変化をしてゆくか・・・・が、戦後、新憲法の下で試されています。

組織外部に敵を設けず、自らで引き締める方法です。

試されている日本国民にその実感がまったくなく、平和ボケした国民と内外から言われても黙っている。だからこれらの壮大な実験は、成功しているのでしょう。

平和主義体制の中にあって、思想なき、リーダー不在な国民主権という民主主義の運営がいかに難しいか、戦後の日本社会はリアルに示している。私は壮大で見事な実験であるとおもうのです」

「十八世紀末におこったフランス革命は、絶対主義の王制を倒して市民階級が主権者になる、民主主義初期の闘いでした。王侯貴族が独占した私有財産を巡る、市民の権利主張と獲得の闘争でした。その闘いのスローガン、『自由、平等、博愛』のコピーが、第二次大戦後の日本に当てはめられた、と私は考えたのです。

フランス革命は市民が血を流し、自らの意志で獲得したわけですが、日本のそれは連合軍によって与えられました。第二次大戦で世界中の人々が血を流したことは、血を流さなければ分からない、死ぬ体験を経なければ本当に分からない、人間の愚かさだと思います。

たしかに戦後の日本社会は自前の思想、体制でありませんが、そこにはヨーロッパにおける革命の歴史を経た、民主主義と市民社会の理想と英知が隠されています。

国民主権と象徴天皇、三権分立、財閥解体、農地開放、平和憲法・・・、それらの考えを庶民にくまなく広めたのが、戦後教育だったでしょう！そしてアメリカをモデルに、『追いつけ、追い越せ』と物造りに励んだ。

島国という地理的条件、無条件降伏という政治的条件、敗戦でゼロクリア可能な経済的条件、大いなる人類の平和実験場として、敗戦国日本は最適な場を提供できた。また日本人という国民性を熟知した、見事な選択であったと思うのです。

そして四半世紀、戦後日本における実験を通し、人類とその社会を再構築する思想を、この日本から世界に向けて発信すべき時期ではないかと、私は思っているのです」

「フランス革命を推し進めた啓蒙思想の延長には、ルソーがいました。ルソーには『自然にかえれ！』という有名な言葉があります。この思想が近代登山の始まりだとする説もあるほどです。

ローマン主義とする近代文芸思潮に、ルソーの思想が大きな影響を与えたとも言います。

人間の美的感覚を軸にしたローマン主義の諸要素を、実は山と登山が兼ね備えていることを広く明らかにした論文は見当たりません。

ドイツの思想家F・V・シラーは『人間の美的教育について』の中で、自然に分け入ることの美的教育環境を述べていますが、それを登山としては扱っていません。

私は山と山登りは、人間文化のあらゆる要素が含まれていると思っているのです。」

「そんなこと、わたしは一度も考えたことありませんでした。争いがない社会を、わたしは好きです。社会人になってから広く世界を歩き廻ってみましたが、日本に生まれ、日本人であることに何も違和感はありませんでした。

大学の英文科で学んでみても、その一般常識はただ知識として、記憶する対象としか写りませんでした。幾冊かの原書をひも解いても、翻訳するのが精一杯で、それが書かれたバックグランドにまで

とても思い及びません。
社会に出てからアテネや古代ローマの遺跡を歩いてみても、かってその昔、その中で熾烈な闘争が重ねられ、血塗られた歴史など実感できませんでした。
ヴェニスのサンマルコ広場で、人々が行き交う中をハトが平和に飛んでいるのを見ながらコーヒーを飲んでみても、ヨーロッパの国々が民族の浮沈をかけ、争いを繰り返したことなど、今では思いもおよびません。
わたしたちは戦後の平和な日本で育てられ、戦争や闘争の歴史をただ知識としてだけ頭に詰め込んできました。自分達で血を流し、平和をかちとった経験もありません。それらのもたらした様々な結果への思いや、歴史を通した自分の視点をもたなくても、今の生活にとっては何ら不自由を感じませんものね！」

都の西北、A大学は反骨精神で知られ、知識偏重ではない在野精神を教えてきた。しかし時が経つと建学の精神も変化する。戦いのない平和な社会の中で、知識偏重に傾きかかっていた。英文科を終えてきた靖恵にとっても、『地球人』としての新たな試みの視点など、考えたこともなかった。

「地球の視点・・・エヴェレスト！
地球第三の極地・・・エヴェレスト
もはやこれより高いところはない**地球の限界点**
その『**頂**（エヴェレスト）**きのかなた**』に、果たして『**何が見えるのかしら**』・　・　・　？」

靖恵は大きな興味にそそられた！
小刻みに震えていた細い身体に、新たな意志が湧き上がってきた。それは酸素と同じく、血流に溶け込んで靖恵の身体を熱くしていた。意志の共鳴はニューロンとシナプス（神経系統）を拡散し、靖恵を小刻みに震わせた。
身を切るように凍てついた、暗黒の夜に瞬く星たち。地球第三の極地、エヴェレストの麓、ディンボチェの小さなテントの中、靖恵は新たな意志のたぎりで細身の身体を熱くした。

エヴェレストの麓、言葉静かな中野であった。
地球と人類の文化を、山登りを通して独自に探求しようと試みているヒマラヤンニスト。その行為半ばで遭難に出合い、仲間を失った悲しみとその責に耐えていた。
彼の思考が成せる精神（こころ）の強さと壮大な思索に、靖恵の青春は共鳴した。

「そうだ、**わたしの青春が真に求めていたもの**、それは静かな**自然体の中にある**。
考えているだけでなく体験を積み重ね、その結果を**あるがまま、リアルにそっくり受け入れる**。
たとえ真実がつらい結果をもたらしたとしても、それから決して逃げない正面から立ち向かう強さなのだわ！
国境や男女の相違でなく、**地球に生きる一人として、個人の視点から見つめてみる・・・！**

わたしも、わたしなりの方法で、本格的に山と向き合ってみよう！
孤独は味わうものでなく、立ち上がるこの足。地球の大地に立ち、一歩一歩歩み続け、足跡を刻み続けることが生きるということ・・・なんでしょう！」

靖恵は静かで深い感動の中、これまでかたくなに味わっていた、**ひとりぼっちの孤独から解き放たれた**ように思えた。
靖恵は初めて交わした中野との、山登りの真髄から人間社会の文化文明に及ぶ話に、**青春が長く求めていた精神（こころ）の行方を、たった今エヴェレストの麓で見つけたような気がした。**

＊　＊　＊

翌朝、富岡、木本、千尋とシェルパのテンジン、クマルの五名にて、ロブジェを後にした。まだ頭痛、頸痛が残っていたが、カラパタール目指して歩いた。クンブ氷河の右岸に沿ったサイド・モレーンに、一歩、一歩、歩を進める。
「ビスターリ！　ビスターリ！」　（ゆっくり、ゆっくり）
小柄で少年のようなクマルが、先頭に立て進む。千尋が続き、木本、富岡は遅れ気味であった。
しんがりはテンジンが歩く。
この地を拠点とするシェルパ族にすれば、エヴェレスト・ベースキャンプ地までは、生活の延長でしかない。特別な技術などいらない。しかしメンバーの様子にこまやかな気配りをしながら、上手に一歩、一歩をリードしてゆく。
ヌプツエの裾に沿い、ビスターリ、ビスターリ、二時間半、ゴラクシェプに着く。
ヌプツエの肩越しに、エヴェレストがその頂上岩壁を現わしてくる。

さらに一時間半、ゆるい傾斜の岩屑をゆっくり、ゆっくりと登る。
「苦しい！　苦しい！・・・」
富岡と木本は、見栄や外聞もなく呟く。
頭痛に加え、胸がしめつけられるように呼吸が苦しい。
十歩歩いては立ち止まり、ハア！ハア！と大きく肩を上下させて息を吐き出す。
そしてまた十歩と、重くなった足を引きずる。

「今日は調子が良さそうだわ！」
「もうすこし日数をかけたら、プモリなら登れそう！」
「それにしても、日本の女性隊がエヴェレストを登ったなんて、やはり素晴らしい人達なんだ！・・・」
千尋はそんなことを思いながら登った。

息苦しさだけで、すっかり夜半からの頭痛はとれていた。大きく肩と腹で呼吸を重ね、一歩、一歩、規則正しく前進する。

十一時、カラパタール(5545m)

クマルと千尋が先に着いた。遅れて富岡、木本、テンジンが到着。

振り向いた背後に、エヴェレストの頂きが雪煙をなびかせてそそり立っていた。

褐色の南西壁は岩肌を露に、大きなスロープをクンブ氷河へ落としている。空は抜けるような青さ、それは黒に近い藍色。

今度はヌプツェ(7879m)が独立した峰でそそり立ち、白銀のベールを藍の色から浮き立たせていた。

正面に見上げるプモリ(7145m)はもう目の上。垂形なドームを落としている。

遠くにはアマダブラム(6856m)やタウチェ(6367m)、カンテガ(6809m)やタムセルク(6623m)が遥か下方に小さく拡がる。

地球創生以来、人の手垢にまみれなかったヒマラヤ。

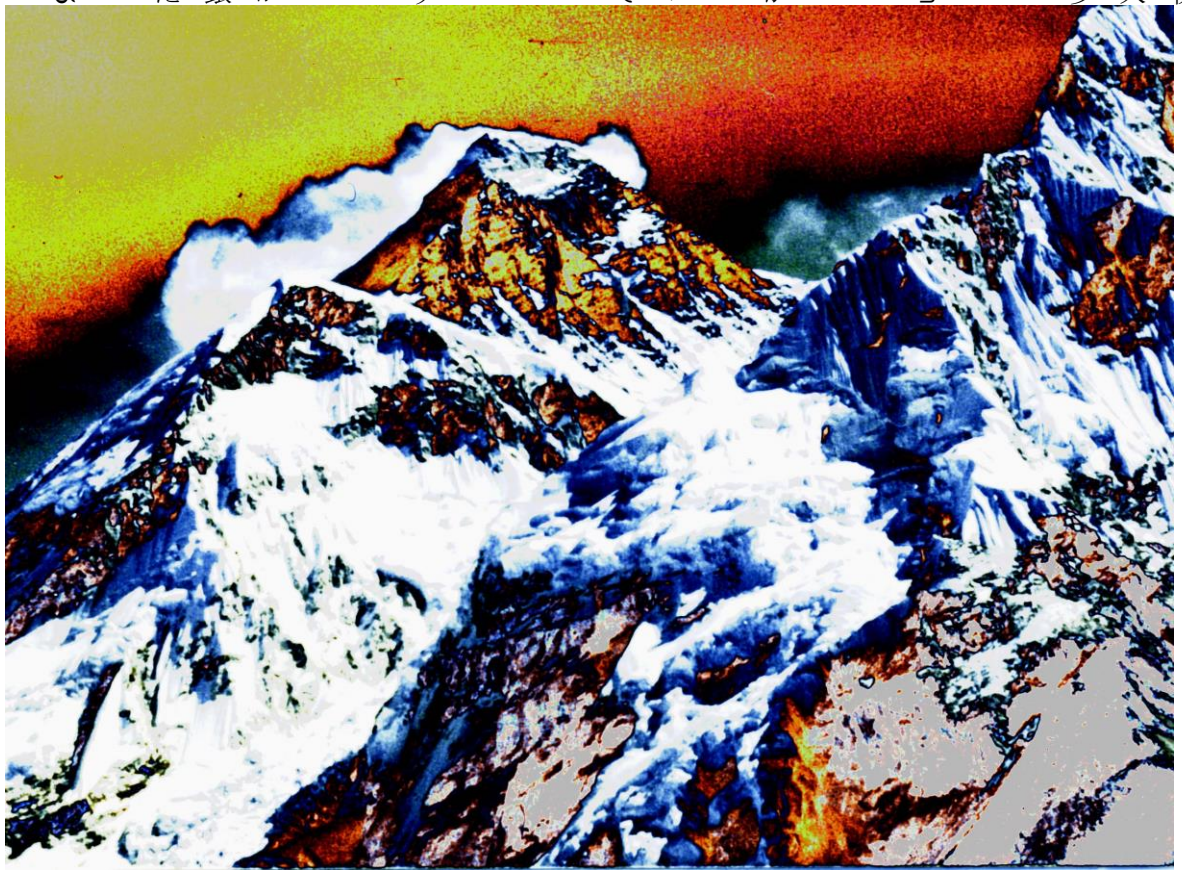
三百六十度の大パノラマが今、頭上に、足元に、展開されていた。

神々とあがめられたヒマラヤの山々。

「カラパタールの石を!」

千尋は足元から記念の石を拾い、ポケットに入れた。

靖恵から、頼まれていた。



3　初めての冬山

一行はエヴェレスト・トレッキングが終り、ネパールの首都カトマンズを発った。タイの首都バンコックで一泊し、成田に戻る機内にあった。タイ航空のＤＣ十型機は、屋久島の上空を過ぎた。あと一時間ほどで成田へ着陸する。

ヒマラヤ山中からタイの首都バンコックに戻ってみると、竜宮城から帰ってきた浦島太郎を連想する。タイムトンネルから抜け出して来たようで、中世から現代へと舞い戻ったような気がする。たった三日前の過ぎし日なのに！

この、人の頭脳の忘却と、身体が適応する柔軟性は驚異である。

コンピューターの記憶にはグレイゾーンがない。記憶か消去か、そのどちらかでしかない。二進法からなる、デジタル信号の特徴である。しかし人の記憶には、ぼんやりとしたグレイゾーンがある。アナログ信号の大小、正負は、白（イエス）でもなく、黒（ノー）でもない、グレイゾーン（ニュートラル）がある。

人間の頭脳はデジタル信号をこなしながら、アナログ信号をも併せてこなせる多彩なコンピューターである。それゆえヒトは文明というデジタル的な物質社会を築きながら、さらにそれを消費して楽しみとする、アナログ的な心の文化領域も持っている。

文明は歴史という時間軸を逆方向へは戻れない、一方向な性質を持っている。物質の再生産を繰り返しながら生活を持続する、デジタル的特性である。

一方で文化は、人が楽しむ心の在りようとなる。その楽しみ方の性質は、歴史に繰り返し現れてくるアナログ的な特性がある。

『歴史は繰り返す』というが、『歴史には、その性質が繰り返し現れる』という意味である。

電子の流れ電流には、直流と交流とがある。直流はプラスかマイナスかのいずれかの性質に決められ、時間軸に沿って一方向に流れる。他方交流は、プラスからマイナスへ、更にマイナスからプラスへと性質の変化を繰り返しながら、時間軸に沿って進む。

人間の文明社会は直流機械のコンピューターを使いこなすが、そのデジタルな性質の一面性は、人を画一化にも導いてしまう恐れがある。反面、アナログ的交流が示す、繰り返して表れる性質は人の心にも似ている。人はそれを文化として楽しみながら、質を変え、様式を変え、反復を繰り返してきた。

文明と文化の定義は定かでなく、同義語に扱われている。仮に、宇宙の絶対的真理を求め続ける科学思考を文明的としてみると、文化とする人の心の在りようは、いつも相対的に変化している。

中野が山にのめり込んだもう一つの理由（わけ）が、ここにあった。

自然としての山は絶対であり、人の織り成す社会のように、嘘、偽りの駆け引きがなかった。

山は登山者の力を百パーセント受け止めてくれる。そしていつも、登山者の力不足が思い知らされ、山にたたきのめされる。その登山の成功は、ほんのちょっとした自然の隙間をかいくぐり、拓

かれた細い道を辿っただけの小さな成功でしかなかった。

修験者や信仰に連なるこんな思いが、中野は好きだった。スポーツ競技も得意であったが、何故かもう一つ、のめり込む動機にはならなかった。

スポーツ、特に団体競技は騙し合いの要素が多い。フェイントはテクニックであるが、結局のところ相手を騙すこととなる。

生真面目である中野にとって、これは由々しきものと思えた。だから自分を偽らない、相手も偽らない、そんな山と正面から対峙することに、中野は十七歳からのめりこんでいった。

一方、人は文化という相対的な楽しみ方を与えられている。騙すことも、騙されることも、喜びも悲しみも、みんな一色たに楽しみへと変えてしまう力がある。だから、人は他の生物にはない、「心（感性）」という神の力を授けられたのだろう？

中野は窓際の空いた席に移り、窓からぼんやりと下界を見下ろしていた。爛々とともる光のシルエットは、陸地と海とを一目で分からせる。光の密度が人の住まう密集に比例して、濃淡の度合いを表している。激動の一年を振り返り、感傷に沈んでいた。

「シェルパ・ダンスの録音テープを、後日貸していただけますか？」

千尋は、空席だった中野の隣に腰を下ろし、話しを切り出した。

「成田に着いたら、皆さんに言おうとしてたんです。

希望者があったら、シェルパ・ダンスの録音テープをダビングして、送ってあげますよって！」

中野が答えた。

トレッキング最後の夜、エヴェレスト山麓の飛行場、ルクラの宿の、二階の床を踏み抜きそうに力強かったシェルパ・ダンス。

シェルパとメンバーが横一列に肩を組む。最初はゆっくりと波が押し寄せ、引くように動く。前に三歩、後ろに三歩。たったそれだけのステップだが、そのリズムはやがて早くなり、波しぶきが跳ね上がるように前後する。メンバーは何度やっても足がもつれ、シェルパの歩調に合わせられない。最後はただバタバタと、足元をこねるだけとなってしまう。

シェルパの最後のステップは、

「シェッ！　シェッ！シェッ！」

と、口で囃しながら、床板を左の足でドンと踏み鳴らして終る。

中野はその情景を、ダクラ遠征で使っていた、マイクロカセット・テープに録音していた。旅の記念に、ダビング・テープを希望者に送ろうと思っていたのだった。

成田に着陸してしまえば、千尋はふたたび看護婦宿舎に戻る。地方自治体が出資して作った地方医科大学病院で、精神科の看護婦をしていた。昨年、国立・C大学看護教員学科を卒業し、すでに看護婦免許を持っていた。

三交代制の勤務は、もはや山登りどころではなかった。夜行日帰りの近場ならともかく、アルプス

は望めなかった。看護婦の勤務はともかく、山に行けず、看護婦宿舎に幽閉され、両親から望まれた結婚を思うと、憂鬱だった。

あと一時間もしないうちに、それら、娑婆の世界へ舞い戻るのであった。

ヒマラヤ山中で、あの素直になれた自分としての証しがほしかった。

「カラパタールの石より、シェルパ・ダンスのテープのほうがわたしには似合っている。

静まり返った石も良いけど、素直に人と人とが分かり合えた、シェルパ・ダンスのほうが記念になりそう！」

そんな思いから、千尋は中野にテープの話しを切り出したのであった。

「実家に帰ると、すぐにお見合い写真を出されます。

相手はドクターが多くて・・・

うちの両親は保守的で、安定志向が強いものですから・・・ 」

そればかりでもなかった。

このトレッキングに誘われた経緯も、千尋と木本、竹中との、秘めた恋愛感情がくすぶっていた。

木本はこのトレッキングを千尋に強く勧め、竹中も千尋と一緒の旅に密かな期待をもっていた。

看護婦を志望したように、だれにでも優しく振る舞う千尋の仕種は、ひょっとして好かれているのでは・・・とする錯覚を、相手に与えることが多かった。

優しさの罪である。

千尋が中野の横の空いた席に座ったのもそんな煩わしさを払拭し、木本や竹中から距離をおきたい意味もあった。

「みなさま、あと十分で成田空港に着陸いたします。お座席にお着きになり、シートベルトをお締め下さい」

機内に、日本語のアナウンスが流れた。

見回すと、機内は空席が目立った。

正月休みはとうに終わっている。

中野は窓際の席に着いたまま、シートベルトを締めた。その横で、千尋もシートベルトを締めている。木本や竹中を意識しての様子はなく、自然なしぐさと中野には見えた。

そして中野はハッとした。

「この人は、私の奥さんになる人ではないのか・・・・・・・・・・・・・・・！」

直感が走った！

＊　＊　＊

成田の税関はスムースに通過した。ネパールからの帰国者は、ハッシッシ（大麻）の持込と下痢がなければ簡単に済む。エントランスホールに揃った後、解散となった。

電車で帰る者、リムジン・バスで帰る者とに大きく分かれた。

「中野さん、わたしを冬山に連れてって下さい。
どこでもいいですから！
わたし、まだ冬山に行ったことがないんです」
「ええ、いいですよ！
それじゃ二月の連休に、八ヶ岳へ行きましょうか！
詳しいことは、後日連絡しますから」
成田から東京、横浜へと向かうリムジン・バスの中、靖恵は中野との約束を取り付けた。
エヴェレスト最後のキャンプ地、ディンボチェで心にしみた共鳴を、行為の事実として繋げておきたいと思った。
靖恵は、思考を重ね、計画してから実行するより、直感的に行動するのが得意だった。信頼できるリーダーを見つけ、そのリーダーについてゆく行動力があった。

＊　＊　＊

帰国して一段落の後、中野は希望者にシェルパ・ダンスの録音テープを送った。
さっそく、靖恵からも中野に返信があった。

『　半月あまりでしたけど、あの期間は好きな山と、楽しく愉快な人達に囲まれて、とても生き生きとした自分を取り戻した日々でした。思い出深い、楽しい山旅ができたのも、中野さんや、皆様のお陰と感謝しております。
八ヶ岳、二月十日～十二日の連休に、ぜひ連れていって下さい。
わたしは本格的な冬山へ行ったことがありませんので、赤岳鉱泉までで十分です。
すべて計画はおまかせします。装備など良く分かりませんので、アドバイスしていただければ幸いです。とても楽しみにしております。
お送りいただいたシェルパ・ダンスのテープを聞きながら、ネパールの本でも読んで、冬の長い夜を過ごそうと思います。
いつか又、エヴェレストへ行けることを願って・・・

＊　＊　＊

奥田　靖恵　』

二月九日、中野と靖恵は夜行列車で八ヶ岳へ向かった。
深夜に新宿を発ち、十日の早朝には中央線茅野駅に着いた。外はまだ暗かった。

今日は赤岳鉱泉までなので、急ぐことはない。駅の待合室の達磨ストーブに当たりながら、美濃戸口行きバスを待った。駅の構内に積もった雪が融けて氷となり、登山靴の下でパリッと割れる。
空が明るくなり、一番のバスは六時に出発した。
三連休のため、詰め込まれた登山者は多い。
バスは重い荷に軋みながら、広大な八ヶ岳の白い裾野に、シュル！シュル！とチエーンの音をきしませて進んだ。

美濃戸口から登山者は、雪道を踏みしめて歩く。
頬を刺す冷気に白い息を吹き付けながら、踏み固められた足跡を追う。
どんよりと灰色の雲が広がり、山の中腹から上部を隠している。
中野と靖恵は小屋泊まりのため、荷物は少ない。多くのパーテイーはテントを持ち、ザックを頭の上まで膨らませて一列縦隊で歩く。

北沢を通り、赤岳鉱泉まではゆっくりと四時間。午後の一時には着いてしまった。
小屋の周りには、色とりどりのテントがひしめいている。
小屋泊まの登山客は少なく、多くは雪の中にテントを張っている。
いつもの中野なら、そのまま岩場を登りに行き、暗くなったところで岩壁のテラス（岩棚）でビバーク（夜営）する。
だが今日は初心者の靖恵のため、ほかの登山客と一緒に炬燵を囲みながら、小屋でゆっくりとくつろいだ。

「よし、きょうはドリップで、ブルーマウンテンをいれるぞ！」
「わーすてき！お酒も好きだけど、コーヒーも大好き！」
コーヒー党の中野は廊下のクッキング・コーナーで、ガスコンロに火を点けた。
取っ手のついたアルミカップで飲むブルーマウンテンは、実のところ味が分からない。
凍ってシャリシャリした野沢菜の漬物と、ブルーマウンテンの組み合わせも奇妙である。
しかし山に入ってしまえば味は二の次、まずは気分である！
コーヒーの王様、ブルーマウンテンを飲む、その気分である！

「わたしも結構、のりがいいんですよ！
B型（血液型）人間だから！」
靖恵は明るい顔をして、ほがらかにいった。
「私はトリプルA型だから几帳面だけど、このごろはまったく正反対なB型気質とも良く馬が合って、B型の友人も結構多いんですよ。

もし私が山登りをしていなかったら、きっとカチカチのＡ型人間になっていたでしょうね」
中野は応えた。

「山登りを通して色々な体験をしてみると、こだわりということが、消えてくるんです。
人にはそれぞれの限界があって、今自分に出来ないことまでも出来ると言ってしまい、そのために苦しむ結果となります。
人にはそれぞれ、絶対的限界と相対的限界とがあって、絶対的限界はいかに努力しても越えられない。相対的限界は、その時々の状況によって、努力すれば越えることも出来ます」

「ちょっと抽象的になってしまったけど、例えば先の遭難事故で、死んでしまった隊員の友達の中には、『生きて返せ』と言ってた人もいました。
だけど私はその言葉には動じませんでした。
死んでしまった者を、この世に生きて返せる人は誰もいない。
ましてや我々の遠征は、遭難や死を直接的には認めていなかったけど、間接的には『あり得る事』とした、暗黙の了解があった。
だから出発前、親、兄弟、関係者を、知人が経営する新宿の建築設計事務所に集め、登山内容の説明と、万一にそなえたお互いの顔合わせをしていました。生命保険にも入りました。
お守りが利くとは思っていないけど、お守りを全隊員に配ってくれた方もいます。
つまり、『死んでしまった人は、生きて返せない』、これが絶対的限界なんです。
別の言葉では、客観的限界とも言えます。
さらに相対的限界とは、私が丹沢を登っていた頃、ヒマラヤを登れるなんて夢にも思っていませんでした。
だけど一つ一つ努力を重ねてみると、ヒマラヤへも行くことが出来た。
このように、頭の中で思っているだけでは出来ないことも、努力、実行してみると、不可能と思っていた事も可能となります。
頭だけで考えて、自分で決めてしまった領域を相対的限界と言うのです。
別の言い方をすると、主観的限界と言い換えることもできます。
絶対的限界（客観的限界）と相対的限界（主観的限界）との判断を誤ったところに、解決出来ない苦悩が発生します。
だって、絶対的限界は、誰がやっても越えられないんだから、悩んでも仕方ない。
また相対的限界は、努力の仕方によっては、越えることが出来る。
この限界の領域をきちんと整理、理解し、その次の対応を図ることが知性であって、あらゆる知識の積み重ねと、経験を経た判断と応用が必要となってきます」

中野得意の哲学談義となってきたが、つい先頃ヒマラヤ遭難事故による『死』を体験してきた中野の話しには、否定できない説得力があった。

青春を迎えて十年来、一人自分を見つめてきた靖恵にとって、嫌いな話しでもなかった。
さらに、ヒマラヤの大自然を歩いて来たばかりの靖恵にとって、中野の話す大まかな意図は脳幹を通り抜け、じかに脊髄へと侵入してきた。
それは理屈よりむしろ、心地良い言葉の波動（リズム）であった。

「ところで中野さんは、どんな女性が好きですか？」
靖恵は矛先を転じた。
「例えば、芸能人みたいな人たちのなかでは・・？」
「うーん、芸能人は多くをしらないけど・・、しいて言えば、栗田小巻のような温和な知性派ですかね！」
中野は答えた。そして脳裏に、千尋のふっくらとした面影を浮べた。
聞いたものの、その答えに靖恵は押し黙ってしまった。

エヴェレストの麓、ディンボチェ以来仄かに思いを寄せていたものの、自分とは少し違ったイメージの答えに、靖恵は返す言葉が見つからなかった。
靖恵のポニーテールに伸ばした長い髪、青みがかったさわやかな目、細めな顎の顔立ちは、清楚な知性をにじませていた。百六十ﾁｾﾝにちょっと足りない細身の体に、すらりとした長い足は、実寸よりも大きく見えた。

「私がダクラ南西壁を二度目に挑戦した動機には、離婚の寂しさのどん底から湧き出す、『なにくそっ！』っていう、自らを鼓舞する心のエネルギーがありました。山は嘘をつきませんし、自然は人と駆け引きもしません。自然の脅威を感知できないとしたら、それは人の側の責任です。自分の力の全てをぶっつけてもびくともしない自然は、私の心の寂しさをぶっつけても余りあります。そんな山に、自分のもっている力の全てをぶつけてみたのです」

「聞いてはいけないのかもしれませんが、どうして離婚となってしまったのでしょうか？
よろしかったら、お聞かせ願えませんか！」
「ちょっと長くなりますが、お話しましょう」

「井上靖の小説『氷壁』はご存知ですよね」
「はい！知っています」

「私は高校卒業の年に読みました。その頃はまだ、女性を伴った登攀はあまりありませんでした。好きな女性を山麓の山小屋に待たせ、穂高の滝谷という困難な岩場のルートを、小説の主人公が単独で登って会いに行く。滝谷は険しくて落石が多く、結局主人公は遭難してしまいます。
この小説はメロドラマなのですが、青春のヒロイズムの中にロマンを掻き立てられ、私は刺激されて山登りを始めたのです」

「私の山登りは機械体操のように、ただ困難な岩場に挑むだけの興味ではなく、そこにはロマンというか、なにか美意識に惹かれるものがありました。

その一つとして、好きな女性と困難な登攀ができることは憧れでした。ですから社会人山岳会に入ってから、幾人かの女性と谷川岳や剣岳などで岩登りをしてきました。

好きと感じる女性との登攀は、男のロマンを掻き立てます。

フランスにはミシェル・ボーシェ、イヴェット・ボーシェ夫妻がいて、アルプスの困難な登攀からヒマラヤ遠征までを実践していました。

男女の好きは恋愛へとつながります。独占欲が増すほどに、それはまた結婚へと発展します。同じ山岳会の中で一緒に山を登っているうちに、私たちは若くして結婚しました。

私が二十三歳、妻が二十二歳でした」

「結婚後はしばらく、新しい社会人山岳会をつくって日本の岩場を登っていました。

最初からヒマラヤの意識はなかったのですが、きっかけを得て、二十八歳の時初めてダクラ遠征に夫婦で参加しました。

私は意識していませんでしたけど、日本人夫婦のヒマラヤ登攀は私たちが初めてとのことでした。毎朝新聞が全国版でこのニュースを流してくれました。記事の主役は妻です。

そんな記事に躍らされたかどうかは定かでありませんが、ダクラ遠征の三ヶ月間、妻は登攀とは別な夢を見ていたようです。

遠征が終わり日本に帰ってくるなり、『好きな人ができたので別れてほしい』というのです。

思いもしない唐突な話に唖然としましたが、初めてのヒマラヤ体験で、私は頭の中がとてもクリアーに整理されていました。

一度は妻の頬を叩いたこともありました。

私はニヒリズムに共感することもあって、子供はいらないと思っていました。彼女も特に子供をほしがるわけでもありません。五年にわたる結婚生活は、山が中心にありました。子供がいなかったこともあって、私は彼女の願いを受け入れました。もし子供がいたならば、当然彼女は考えなかったろうし、私だって同意はしません。

そんなことで、結婚の届けは私一人で行きましたが、離婚の届けは二人揃って行ったのです。変わり者どうしでしょう！」

「彼女は活発で、社交的でした。多くの友達との交流が好きでした。だからしばしば友達を我が家のアパートに呼んで、山の話に花が咲きます。

私は社交が苦手で、一人思索と探求が好きでした。妻の友達との交流が嫌いではありませんが、彼女はもっと積極的に加わることを望んでいました。

結婚生活は平凡な日々の連続です。小さなことの積み重ねです。仲はとても良かったのですが、小さな不満が積み重なって、ヒマラヤで羽ばたいてしまったのでしょうか！

どちらかが良い、悪いではないと思うのです。ほんの小さな好みの違いが増長されて、新たな希望への夢が膨らんでしまったのでしょう！

彼女は私のもとを去りました。
だからもう私は、夫婦で目指す先鋭的な登山はしたくないと思っています。
もし次に結婚できるなら、平凡な日々を受け入れてもらえる女性が良いと思っています」

＊　＊　＊

翌日、山は相変わらず中腹までをガスに巻かれていた。
小屋の周りに雪は降っていないが、山の稜線は風が強そうである。ガスは西から東へと飛ぶように流されていた。
天候が良くないので楽しくは登れない。稜線は風が強そうだけど、動けないほどではなさそうだ。この程度のままなら登攀はできる。
「靖恵さん、天候はあまり良い状態ではないけど、大きく崩れはしないでしょう」
「行けば登れますが、どうですか？」
「行ってみます！」
靖恵は元気に答えた。
「どの程度の風なのか、どういう難しさがあるのか、良くは分からないけど、中野さんが『のぼれる』というのだから、わたしのがんばり次第で登れるのでしょう」
「やってみること、それが大切なんだわ！」
靖恵は、今までの自分を変えられるかもしれない未知の世界に、中野とともに踏み込んでみようと心を決めた。

小屋の中で、中野から借りたウインドヤッケとオーバーズボンを着た。さらに中野の手助けを受けながら、土間で登山靴の上からスパッツを着け、アイゼンを装着した。毛糸の帽子をかぶり、ゴーグルを着けてから外に出た。
小屋の周囲の雪は踏みしめられ、アイゼンの爪がキュ、キュと小気味良い音を立てて突き刺さる。

小屋からの小道は樹林帯の間をいったん下り、中山峠への小さな登りとなる。
雪の踏み跡に靖恵が先頭を歩き、中野が続く。踏み固められた雪の道は、かえって夏道よりも凹凸が少なく、歩き易い。
靖恵はピッケルを右手に持ち、空身である。
中野は用心深く、緊急露営できるよう、万一を考えた装備と食料をザックに詰め込んでいた。さらに四十㍍のナイロンロープを持っている。
中山峠を越えると、すぐに行者小屋への下り道。
小屋の外で一息つく。
まだ赤岳鉱泉を出てから、四十分である。

靖恵は初めての冬山だったが、ヒマラヤの山々、氷河を見、歩いていたことで、気後れはしなかった。そしてなによりも、中野の自信を持った姿と一体感を持ち、よけいな不安は感じることがなかった。

行者小屋から十分で、阿弥陀岳との分岐点となる。
赤岳は左に折れ、文三郎尾根へと入った。
下部の樹林帯を抜け、ハイ松の尾根上に出ると風が出てきた。
風で飛ばされた薄い雪の表面は、部分的に氷結している。
アイゼンの爪を氷に突き刺し、ピッケルを支点に、一歩一歩確実に登る。

「靖恵さん、こういうところではアイゼンの爪をオーバーズボンに引っ掛け、スリップしやすいんですよ。
こうやって少し蟹股になり、膝から下を外側に回すようなフットワークがいいんです」
短く結んだロープを左手に、三㍍先を登る中野は、靖恵に氷の斜面の登り方を教えた。
「やってみます！」
ロープの末端に結ばれている靖恵は不安なく、中野の教えを繰り返した。
雪と氷の斜面は谷間へと切れ落ち、ガスの中に消えている。
頭上は灰色の雲が激しく西から東へと流れている。
降雪はないが、ガスに包まれた視界は五十㍍。左上に見えるはずの南峰リッジの岩壁も、今はガスの中。
慌てず、急がず、足下に注意を払いながら、黙々と一歩、また一歩を登る。

「さあ靖恵さん、中岳との稜線に出ました！
頂上まではあと三十分。
暖かいコーヒーを飲んで、一息入れましょう」
中野はテルモス（保温ポット）の蓋にコーヒーを注ぎ、靖恵に差し出した。
「あーおいしい！
乾いた喉に、ブルーマウンテンは最高ですね！
生き返ったみたい！」
コル（鞍部）になった稜線は、冷たい風の吹上げが激しい。五分も立っていると体が冷えてくる。
コーヒーで暖まった体を冷やさないうちに、すぐに頂上岩壁へと二人は進んだ。
頭上には乳白なガスが西から東へ飛び交い、凍った風は激しく足下から吹き上げてくる。
中野は先頭に立ち、頂上岩壁の弱点をつないで巧みに抜ける。
易しい部分はコンティニュアス（ロープを結んだまま同時に登る）で、靖恵が滑りそうな部分はスタッカット（一人づつ登り、中野が上から靖恵を確保）で登る。
ゴツゴツした頂上岩壁も、落ち着いて登れば難しくはない。最後の凹んだ岩場を登ったところで、中野は止まった。

「さあ靖恵さん、こんどは先に登って下さい！」
靖恵は先頭に立った。
傾斜の落ちた雪の斜面を五㍍登れば、そこは赤岳山頂（南峰）だった。
頂上には誰もいない。
「やあ、登れましたね！」
「ありがとう！」
「調子はいかが？」
「とてもいいみたい！」
手袋を外し、登頂の握手をした。
冷たく、堅く縮んだ靖恵の手の平に、温もりが広がった。中野の体温が、仄かに伝わった。ロープを巧みに使い、靖恵の安全を確保してきた中野の手のひらには、その作業の温みがまだ残っていた。
「今日は天気が良くないですね！
ピーカン（晴天）なら、富士山や、北アルプスまでも良く見えるんですが・・・」
「でも初めて本格的な冬山に登頂できて、とってもうれしい！
中野さん、記念の写真を撮って下さい」
靖恵はヤッケのポケットからカメラを取り出して、中野へ渡した。
「さあいいですか、はいチーズ！」
「今度はわたしが撮ります」
靖恵はシャッターを押した。

山頂の小さな社には、横縞模様に雪が凍りついていた。その周囲には五円玉が散りばんでいる。
「赤岳山頂」と書かれた杭は、石積に支えられ立っている。
小雪は偏西風に吹き飛ばされ、ガスは激しく西から東へと流れている。
次から次ぎへとガスは流され、稜線を見せては隠す。
時折息をつく風は、登山者に束の間の休息をくれる。

「少し先へ行くと、頂上小屋があります。
そこが北峰です。
我々は冬に、この下部岩壁のほとんどのコースを登っていますが、今日は北峰から下り、地蔵尾根を降りましょう」
「はい！」
初めて、本格的な冬の岩山に登って来たが、これまでの中野のリードに、靖恵は安心してまかせられた。

北峰からコルまでは、一気に下りとなる。
薄く積もった堅雪の斜面に、下から粉雪とともに強い風が吹き上げてきた。
ロープを結び、靖恵を先に下らせた。中野は五㍍間隔をあけ、靖恵に続く。もし靖恵が滑ってもピ

ッケルを支点に、ロープで止めるためだった。
「靖恵さん、下りは腰を引かないで。
お腹を突き出すようにして体を伸ばし、着地する時に柔らかく膝を曲げるんです。
・・ほら！こんなふうにして・・・
内股にするとアイゼンを引っ掛け易いので、登りで言ったように、外側に回す要領で足を運ぶといいですよ」
「ほら！こんなふうに歩けばいいんです」
実演をまじえながら、中野は雪の斜面の下り方を教える。
「下りは特にアイゼンの爪を、岩やハイ松に引っ掛けやすいので、足を引きずってはいけません。
大胆に、リズミカルに歩いたほうが、むしろ安全なんです！
もし滑ってもロープで止められるから、安心して降りて下さいね！」

冬山で初めての体験ばかりの靖恵も、山のスケールには慣れていたので、すぐにマスターできた。
ウインド・クラスト（風で表面が凍る）した堅い雪の大きな斜面を、リズミカルに一気に下った。
途中、三人連れのパーテイー二組が登って来て、すれ違った。
広いコルには、屋根まで雪に埋もれた石室がある。二人はその脇を通り過ぎ、左の小さなゴツゴツした尾根へと折れ曲がった。
地蔵尾根である。
しばらくは凸凹した岩稜が続く。
足元は谷の中まで切れ落ち、ロープを付けたまま、慎重に下る。
谷からは激しく風が吹き上げ、周りの雪を飛ばしてくる。
ヤッケのフードを引き締め、呼吸で曇ったゴーグルを拭く。

二十分も下ると岩稜は終り、急で柔らかい雪のスロープとなった。
雪はさっきよりも柔らかい。樹林帯が間近に迫り、風が弱まったためである。
雪のスロープにお尻をつけ、ピッケルを抱えて勢いよく滑った。
シリ（尻）セードと称して、岳人の間に人気ある滑り方だ。
夏の残雪のように雪が堅くなると、靴底でスキーのように滑るグリセードとなる。

空は変わらずガスが渦巻き、小粒な雪がハラハラと落ちてくる。
地蔵尾根も一気に下り、安全な樹林帯に入った。風は遮られ、さっきまでの激しい行動の余韻が、汗となって吹き出してきた。

＊　＊　＊

八ヶ岳から帰った翌日、心地よい疲れの中で、靖恵は中野へと手紙を書いた。

『　初めての冬山の、あの真っ白な岩肌と、雪煙の中を歩いたことが、
強烈な余韻を残しています。
わたしの山への興味と憧憬が、いっそう深くなりました。
改めて山の魅力をかみしめています。
こんなに安心して行けたのも、中野さんのおかげです。
本当にありがとうございました。
いただいたヤッケとオーバーズボンを見ながら、これがまた使えるような雪の山へ行きたいなあ・・と、思っています。
機会がありましたら、ぜひお誘い下さいね。
そしてまた、あのブルーマウンテンが飲めることを、期待しております

奥田　靖恵　』

4　ふるさとの山

ヒマラヤ・トレッキングから帰った千尋は一度実家へ戻り、ヒマラヤのお土産、紙粘土で出来たヒンズー経のお面を渡した。

実家は、宇都宮市から西の郊外に広がる田園地帯、そこの専業農家である。

市の北西十三㌔のところに、古賀志山(582m)がある。高度は低いが岩山で、ポコポコと岩峰が突き立っている。草と落葉樹に覆われた山の南面は、岩肌をむき出していた。その高さは百㍍ほどであるが、たまにはクライマーの姿を見かけることもある。

古賀志山の水を集め、赤川ダムを源頭に、南東方向へと流れ、やがて利根川へと合流するのが姿川である。姿川の水はこの地域の水田を潤す、農家の生計の水であった。

川をはさんだ南側は、もう宇都宮の市街地へと続く。

赤川ダムから七㌔下った姿川の西側一帯が、千尋の実家が所有する水田地帯である。

戦前は大地主であったが、終戦後の農地解放で分割されてしまった。しかし今でも八㌶の水田と、それ以上の畑、さらにそれ以上の山林を所有する専業農家であった。

姿川から引き込んだ農業用水は屋敷の中を横断し、街の釣人が訪れる時もある。国土地理院、五万分の一の地図には、実家の家屋が点となって記載されている。

千尋は二男二女の末子であった。

中学は主席で卒業した。栃木県の名門女子校から、国立・C大学を卒業したのは昨年だった。

親元近くを承諾条件に、県のはずれにある、地方医科大学病院で、精神科の看護婦として勤務していた。

看護婦は三交代制のため、看護婦宿舎に住まわなければならない。そして時々中古車を走らせ、実家の両親へ顔出しすることが、親元を離れて働く条件だった。

千尋は実家への顔出しもそこそこ、すぐに看護婦宿舎へ戻った。

ワンルーム・マンションの作りで、長く居住すると閉塞感におそわれることもある。

そんな時は外へ飛び出し、林の中をジョギングする。広大な敷地に、ゆったりと配置されたこの大学病院は、都会の大病院に比べるまでもなく、自然環境が豊かである。

しかしヒマラヤから受けた千尋の余韻は大きかった。

あの厳しい大自然の中で、素直になれた自分が好ましく思えた。

ヒマラヤの厳しい日常ゆえに、いたわり合わなければ生活できない風土は、西欧的契約社会にはない、おおらかな人間模様をえがいていた。

それらが重なり、鮮明なイメージとなって千尋の脳裏に焼きついて離れなかった。

ヒマラヤから帰った一週間後、千尋の宿舎にカセットテープが届いた。シェルパ・ダンスの録音テープと、中野が参加者へ送ったメッセージが入っていた。

千尋はお礼の葉書を中野へ出した。

『　いいだしにくい想いのように
わたしの胸の中で
なにかはさわぐけれど
はじめての言葉はむつかしい
すごく気取ってみたい気もするし
素朴にさりげなくいきたいとも思う
すこし気取って
すこし素朴に
すばらしい一年となりますように
すてきなカセット・・・ありがとうございました。　』

＊　＊　＊

中野はコンダクター業務から参加者全員の生年月日や住所録を持っていた。

一月の末は、千尋の誕生日である。

中野の心をくすぐる千尋の魅力的な文章が、中野にある決断をさせた。

「よし、千尋さんに、エーデルワイスを送ろう！」

ダクラ南西壁登山の、ベース・キャンプで採集したエーデルワイス。

ヒマラヤの、四千㍍に咲いたエーデルワイスは、茎が短い。銀色の葉と十一に開いた花弁の中に、黄金色した星を五つ散りばめている。それを、小豆色の台紙に張り付け、木製の額縁に入れた。

遭難し、死んでしまった友を忘れないために残しておいた、最後の一本のエーデルワイスに思いを託し、千尋の誕生祝いに送った。

千尋は誕生日に、「ふるさとの山」古賀志山へ一人で出かけた。

冷たい岩にちょっと手をかけ、あとは山頂で、残像となったヒマラヤの、夢の続きを見ていた。足元に広がる冬枯れの田園風景。彼方に、生まれた家の森が見える。

山頂の日だまりの中で、夢とうつつが入り乱れた頭は、時の感覚を失ってボーとしていた。

連日の夜勤とゼミナールの忙しさも手伝い、疲れた体で宿舎に戻ってみると、中野からの誕生プレゼントが届いていた。

そしてヒマラヤの余韻に包まれ、暖かいコーヒーを口元に運びながら便箋に向かった。安物のカセットデッキから、シェルパダンスの軽快なリズムに続き、透き通ったシェルパの歌声が響く。

『　とてもすてきな心あたたまる贈りもの、ありがとうございました。この宿舎に入ってから、久しぶりに豊かな時間を迎えています。

ツラギ氷河のエーデルワイス、想い出多い、大切なものと思います。わたしなどがいただいてしまって、よいのでしょうか？

実家へ行っても落着かず、仕事も多忙な中、とてもすばらしい誕生日になりました。

エーデルワイス！

すてきな花ですね。

帰ってから、ネパールにおける海外青年協力隊の本を三冊購入しました。両親が知ったら勘当ものでしょうね！きっと。

自分の夢を持つようになってから、なぜか両親に反対することばかりして、心配をかけ続けています。

山もこれが最後！と言いながら、何度出かけたことでしょう。

それでも結局「ごめんなさい！」を繰り返しながら、性懲りもなく出かけてしまいます。

悪い子です！

どんなに小さく短い山でも、歩いてみると、自分の中に新しいものが運ばれてきます。

今回のヒマラヤは、海外で、スケールも気候も人々も文化も・・・、あまりにも新鮮な輝きと、驚きでした。

すっかりくじけていた昨年のわたしに、新しい風を運んでくれました。

四年前、やはりくじけていたわたしを救ってくれたのは、山でした。

山さん、ありがとう！

二月三日の午後から休みがとれました。

ヒマラヤの餞別をいただいた、中野の友人宅に泊まります。失礼とは思いますが、横浜に出向きますので、お時間の都合がつきましたら夕食をご一緒願えますでしょうか！

たくさんの、すてきな贈りものへのお礼をさせていただけたらと思います。

無理を言ってもうしわけありませんが、お電話いただけたら幸いです。
誕生日の夜には雪が舞い、冷える日が続いています。横浜はずいぶん暖かいとは思いますが、ご多忙な中、風邪など召されませぬよう、ご自愛下さい。
すてきな誕生日を贈って下さったお礼に！

米畑　千尋　』

＊　＊　＊

「もしもし、中野です。
その後お元気のようですね！
お手紙ありがとうございました」
受話器の中から、中野の明るい声がした。
「中野さんからも、すてきな誕生祝いをありがとうございました」
「三日に、東京方面へ来るんですってね！
私も三日の夕方は時間がとれます。
横浜まで来ていただけるんでしたら、中華料理でも食べましょう。
東京から下り東海道線に乗ると、横浜駅の五、六番線ホームに着きます。
降りたホームの一番後ろ、東京寄りで待っています。
夕方、五時でどうですか？」
「はい、大丈夫です。
三日は早番で、昼前の十一時半に終りますから、五時には行かれます。
わたしは何でも食べられますので、中野さんにおまかせします」

＊　＊　＊

二月三日はすぐにやって来た。
午後五時、千尋と中野は横浜駅のホームで落ち合った。
千尋は黒っぽい柄物のワンピースの上に、ハーフコートを重ねていた。
中野はジーンズとセーターの上に、薄皮のハーフコートを着ていた。
「しばらくです！
お元気そうですね！
ヒマラヤの疲れはとれましたか？」
「もうしっかり勤務してますから、ネパールぼけの暇がありません。

今日はお忙しい中、都合つけていただいてありがとうございました。
いろいろなお礼を・・・！と思ったものですから」
「いやー、横浜まで出向いていただいて、光栄です」
「今夜は、女子校で同級だった中野の友人宅へ泊まります。
気のおけない友達ですから、少しはゆっくりできると思います」
「それじゃちょっと早目ですけど、さっそく食事へ行きましょう！
中華でいいですか」
「ええ、コンダクターさんにおまかせします」
「横浜は中華街が有名ですけど、中華街はここから更に電車で三つほど先になります。
駅前の高層ビルの一番上に、浜天紅というお店があります。
見晴らしがとてもよいので、今日はそこにしましょう」

千尋と中野は改札を出た。
サラリーマンにはまだ早い。
若い男女が行き交う地下街を通り、駅前ロータリーの奥にある、高層ビルに入った。
最上階は展望のよい、高級レストラン浜天紅がある。ウエイターに導かれ、深紅のジュータンを踏みしめた。
三十六階の、ガラスの窓際に向かい合って座った。
足元には、駅前ロータリーを回るライトの軌跡が、幾重にも交錯している。
視線を上げると、港の明りが星のように重なり合って、オレンジの光をきらめかせている。
「ボー・・・・」という、船の霧笛が聞こえるはずなのだが、ガラスで密封された高層ビルの中までは聞こえなかった。
中野はバラエティな、中華のコースメニューを注文した。

「初めてのヒマラヤの感想はいかがでした？」
「もう、全てが感動でした。
三十五ﾐﾘカメラに入りきれない、山々の大きさ、美しさはもちろんです。
その大きく美しい中で、自然の格別な厳しさの中に生き生きと生活しているシェルパたちのおおらかさが、何よりも印象的でした」
「それはよかった」

「だけどそのシェルパたちも、最近は多くの登山隊との関わりの中で堕落した傾向が目についてきたんです」
「登山隊は近代文明を持ち込んで山を登ります。
シェルパたちは労働力を提供し、それをお金に換える職業が成り立っています。
登山隊は不要となった登山用具や文明機器を無償でシェルパに与え、シェルパはそれを売却してさらにお金に換えています。

労働の対価として、お金と機械文明がシェルパ社会に流れ込んだ。
シェルパ社会は他の部族よりも富を蓄積できたけど、その分だけ失ったものも多いんです。
危険だが、短期間で高額なお金が入る登山隊に参加して、自ら命を落としたシェルパの数も比例して増えてきました。
さらに危険をおかした登山より、より安全で、より多くの富を得ようとするシェルパは村を去り、特に日本へ働きに出る者が増えてきました。
それらの向上心は良いのだけど、ただ自分のため、家族のためばかりが目についてしまいます。
そこで学んだことや蓄えた富を、シェルパ社会やネパール社会に役立てようとする公共の意識、社会資本への意識が育ちません。
そこが残念に思うところなんです」

「国民という意識がないんでしょうか？」

「これはネパールという国の成り立ちからして、やむおえないことかもしれません。
ヒマラヤはインド亜大陸のプレートが、ユーラシア大陸のプレートを押し上げて造ったものといわれ、現在も隆起を続けているそうです。
北海道の二倍程度の広さを持つネパール王国は、東西に三本の山脈が走っています。
南のシワリーク山脈は一五〇〇㍍前後、中間のマハバーラト山脈は三〇〇〇㍍前後、一番北のヒマラヤ山脈は六〇〇〇㍍以上の峰を二五〇以上含む、世界の屋根となっています。
ネパールのほとんどは山岳地形です。ガンジスに流れ込むネパールの河川は、東から西に向かって流れます。東は八八四八㍍のエヴェレスト。西はタライ平地で、標高二〇〇㍍の亜熱帯ジャングルとなり、インド平原に連なっています。
東西八八五㌔、南北約二〇〇㌔程度の狭い中で、標高二〇〇㍍のタライから八八四八㍍のエヴェレストまで、その標高差は八六〇〇㍍以上もある山岳国家です」

「ヒマラヤ山脈には夏の間だけ通行可能な峠が十八ありますが、その通過は容易なものではありません。北のチベットと、南のインドを細々と結ぶ交易の道は古くから拓かれていましたが、軍事戦略上には適していません。主にチベットの岩塩をインドへ運び、インドの加工品をチベットに運ぶ、『塩の道』と言われてきました。
また夏場には、西のタライ平地のジャングル通過も容易でありません。冬場のヒマラヤ越えは勿論出来ません。
そこでカトマンズ盆地はインドとチベットの交易で、夏冬の気候差を調整する貴重な中継都市の役割があったのです」

「ネパールは、いつの頃から王国になったんでしょう？」

「ネパールの山岳地帯の痩せた土地は食糧生産もままならず、さしたる鉱物資源もない国土とともに

に、地政学の上からも戦略的価値に乏しいものなのです。

そんな土地柄だから、部族単位の土侯領地が古代から盆地や丘陵に散在し、小さく貧しいながらも独立した生活を営んでいました。

そんな三十余の部族の中から、マナスルの麓に住んでいたゴルカ族が領土拡大を武力で図り、一七六九年にカトマンズ盆地を征服し、ネパール王国を打ち建てたのです。日本では江戸中期の、町人文化が発展していた頃です」

「思ったより古くから、国という形があったのですね！

インドと同じで、第二次大戦の後に独立したのかとおもいましたけど！」

「それより百五十年以上も前から英国は、『東インド会社』を設立して東洋の植民地化を進めていたといいます。東インド会社がカルカッタに進出したのが一六八十年代。そしてベンガル湾の覇権を握ったのが一七五十年代。それまでの交易商社を変貌させ、鉄砲とバイブルで植民地政権に衣替えしたわけです。

東インド会社は更にネパールからチベットへと、塩の道を進軍しようとしたのですが、ネパール王国を打ち建てたゴルカ族に大敗してしまった。

ククリーというブーメラン状の蛮刃で、時の覇権国家英国の鉄砲軍隊を打ち破ったゴルカ軍は、後世には『世界最強の軍隊』に例えられたほどです。

現代の覇権国家アメリカが、ベトナム戦争で敗退したのにも似ています。

近代の機械兵器頼みの戦いは、人が人を殺す戦争の原体験を薄いものにしてしまいます。ベトナムはジャングル、ネパールは山岳が特徴です。機械が及ばぬ人と人との戦いで、ゲリラ戦を勝ち抜く意思の力と、特殊環境における適応力は、蟻が像をも倒す良い例を示しています。

しかし山岳地帯を抜け出すと、ゴルカの力は弱まってしまいます。資源の少ない痩せた山岳地形だからこそ、機械文明はネパールを手中に陥れなかったのでしょう。さらに、ヒマラヤとジャングルに遮られた地政上からネパールを迂回して、西欧機械文明はインドのベンガル湾から海岸に沿って、東へと侵攻して行った。

だからネパールでは王族たち支配者間の争いがあっても、痩せた山岳地帯にしがみついた住民たちにとっては、自然と共にあるがままな生活を強いられてきのです。

土地は支配者のものであり、租税を払ってその土地を借り、作物を作って租税と生活をまかなう。収穫は大きく自然に左右され、それ以上もなく、それ以下もない、天にまかせたこれっきりの生活を今日まで続けています。

農民には土地を離れる自由が残されていますが、支配者も高すぎる租税では農民に逃げられて土地が遊んでしまいます。生かさず、殺さず、逃げられず、農耕の民はいつでも、どこでも、限界の生活が強いられているのですね！」

「でも貧しい人々の生活の中にも、子供たちの澄んだ瞳や温和で人なつこい人柄は、機械文明の中でギスギス生活しているわたしたちにとって、大いに反省すべき何かが見つけられそうですね！」

「山岳国家ネパールの土はモンスーンと共に川に運ばれ、ガンジスの河口に堆積されます。ネパールの食糧生産力は衰退する地形にあり、それに伴う人口の維持も、減少しなければならない必然性があります。人口を維持し、さらに増加を望むなら、ネパールは日本と同じように文化国家の道を選ばなければならないのでしょう。

資源の乏しい日本は、明治開国以来加工貿易に励み、文明の高揚に努めてきました。日本が世界に飛躍するためには、産業加工技術が不可欠だったのです。

だから江戸の消費文化は世界のほんの一部に広まっただけで、日本は欧米文明を吸収するばかりでした。

ネパールには鉱物資源が乏しくとも、観光資源は世界一です。観光立国とした文化整備に励んでみれば、地球人の保養地になり得ます。東京で、ニューヨークで、ロンドンで、文明活動に疲れた人々がリフレッシュできる文化環境を提供できます。

ネパールは多様な部族が高度二百㍍のタライ地方から、五千㍍のクンブ地方にかけ、垂直分布した住み分けをしています。それらが共生する穏やかな文化は、限りある地球の中でこれからの人類が住み分けねばならない人間社会にとって、参考モデルにもなります。

現代ではただ住み分けるだけでなく、相互の交流を通して互いに補い合う役割が不可欠だと思うのが、そこに公共の意識が育ってくれたら・　・　・　と、願わずにはいられません」

「シェルパ族は特異な部族なのでしょうか？」

「シェルパ族は、標高三千㍍から五千㍍の高地に住んでいる、チベット系の民族です。

チベット文明は、農耕、牧畜、キャラバン商業が特徴です。

チベット人は『旅する文明民族』と言われるほど、自分のことは何でもやるそうです。

一人ひとりが農民であり、牧民であり、商人でもある。

そして敬虔なラマ教徒でもある。

彼らは自分のことは何でもやるため、家族内分業やコミニュテイ内分業、地位別分業などを必要としません。

それゆえ、長く家や郷里を離れた生活にも耐えられ、厳しい自然や異国の地に踏み込むことができると言います。

シェルパ社会もチベット文明が色濃く、その特徴は良く似ています。

一夫一妻が多いけど、一妻多夫もままあると言います。

チベットの考えでは人間は骨と肉でできていて、骨は父親から、肉は母親から受け継がれるという。

骨は代々継承され、肉は二親等で消えると言います。

だから結婚は、一つの骨のグループと、他の骨のグループとがまじわって、さらなる骨のグループをつくることだと言うのです。

結婚生活の形態はさまざまで、一夫一妻から、姉妹一夫、兄弟一妻、兄弟一組と姉妹一組、兄弟姉妹一組と他の兄弟姉妹一組、さらに多様な組み合わせもあると言います。

単身離れて旅する生活に見合った習慣、生活の知恵ともみられますよね。

さっきは堕落といったけど、個人とコミュニティを並行させた考え方、つまりヨーロッパ的な考え方からすると、堕落に写るのかもしれません！
彼らは彼らなりに、自分達の変革なのかもしれませんけど　・　・　・　」

「私には、ちょっと難しい話しです。
でも、自分のことは何でもする、とか、地域社会のしがらみに縛られない自由な雰囲気は、なんとなく好感がもてそう！
両親や兄姉から少しずつ離れようとしていた昨今のわたしにとって、そういう民族がいたなんて、とても驚きです」
千尋は高地の厳しい環境の中で、だからこそ際だって澄んでいた少年シェルパの澄んだ瞳を思い出していた。

「カモメのジョナサンの話しを知っていますか？」
「ええ、三年前に読みました」
「最近の私は、ジョナサンよりも、星の王子さまのほうが好きです。
星の王子さまは二十歳の頃から読んでいますが、去年の遭難事故を体験してみると、特にそれは強く感じます。
ジョナサンは自身の目的に向かい、一心不乱に努力する。
そのことが大切であるのに間違いはないし、さきほどの、シェルパの人が単身で厳しい環境に分け入って仕事を続けるのにも、ちょっと似ています。
だけども、去年のダクラ南西壁の遭難事故を体験し、『生きるとは何か』をあらためて考えてみると、もはや自分自身が生き延びるそのことは、私の生きる目的とならなくなりました。
星の王子さまが、バラやキツネやヘビたちと友達になり、かれらのために一滴の水を注いだり、気を遣ったり、忘れないことなど、私が他の人たちに何がしてあげられるか！が、もっと大切であると思うようになってきたんです。
すべてのことをそのまま受け入れられる、リラックスした自分でいられるよう、そのことのために学び続けたいと、今は思っています」

「私が山登りを始めた頃はジョナサンのように、向上心ばかりが先に立っていた。
だけど、ヒマラヤを通して学んだ離婚や、遭難からは、ジョナサンのような努力のその先には、星の王子さまがいた。
肩肘張らず、平常な心で、色々なことに関心を持ち続ける。
そして私が役立つ機会があれば、その時出来ることを、出来る範囲で役に立つ。
どんな困難に出会っても、それを避けず、自分の出来る範囲で受け止める。
困難は逃げようと思う程に、追ってきます。真っ正面から、出来る範囲で自然に受け止める。
これが自然な受容の心だと思うんです」

「フー・・・！

わたしは大学山岳部で、男性について行くのに一生懸命でした。

男性部員と同じ荷物を背負い、同じペースで歩き、岩壁クライミングもこなそうと、それはちょうどカモメのジョナサンのようでした。

私がジョナサンを読んだのは三年前でしたが、自己完成という、果てしない夢に向かって努力したことは、たしかな喜びに感じました。

でもあらためて、その自己完成が『何のために』と問われてみると、何のためなのか分からなくなってきます。

何のためかを考えず、努力するそのことだけで、自分が満足していたように思います。

たしかに、自分のため以外の、なにものでもなかったようです。

そう！万人を愛するといった抽象的な愛ではなく、あなたのために！といったような、自己完成を目指す究極の意識のその先で、自我さえも無視できる愛の賛歌が、ジョナサンには欠けているのかもしれませんね！」

千尋にとっても、新しい心の世界が開いたように感じた一瞬だった。

「わたしももう一度、星の王子さまを読み直してみます。

中学生で読んだとき、ウワバミが象を飲み込んだ絵を見た大人が、ただ帽子と答える。心で見なければ、本当のことは分からないとすることが、ストーリーとして頭で理解できたにすぎません。

読書って・・・・そう、読まされているのかもしれませんね！

心でみるという知識だけでなく、その中に愛する心がともなっていなくては、本当の姿が分からないんですよね！」

「そう！ギブ、アンド、テイクの、ギブもなく、テイクもなく、なにもできないとしても、ただそこにいるだけで、私にとっては光輝いた存在もあるのです。

そのことは、一人ひとりにとって、一つひとつにとって、様々なケースであります。

私は七十四年のダクラ遠征の時、夫婦でヒマラヤに挑む夢をかなえました。

しかし、私が向かったダクラ南西壁と、妻が向かったダクラ南西壁とは違っていた。

同床異夢というけれど、愛し合い、夢に向かって羽ばたいてみたものの、妻は違った方向に飛んでいた。

日本へ帰国してすぐ、妻から離婚してほしいと切り出されました。

私は遠征の中で、どこまで登れるかに集中していました。

しかし、出発直前に腰痛が出て、キャラバン途中でも再発した妻は、登攀に集中できなかったのでしょう。

遠征隊の男性社会にあって、女性は私の妻一人でした。

帰国した妻から、リエゾン・オフィサーを務めたライ中尉のもとへ行きたい。

だから離婚してほしいと、突然に切り出された。

私は情けなかった。
愛し合い、妻の分までカバーする努力をしてきたつもりが、妻は私と同じ方向を見ていなかった。
妻とは出発前に約束しました。
夫婦での参加は、我々だけです。
十八人のメンバーの中には、既婚者も多い。
だから我々も単身の既婚者と同じく、帰ってくるまでＳＥＸは自粛する、と。
バンコックやカトマンズの宿舎で、我々夫婦は一つ部屋が割り当てられました。
でも、その約束は守りました。
私は初めてのヒマラヤ遠征で、頭が洗われた思いがしていました。
ものごとが良く見え、とても理性的に判断することができるようになっていたのです。
他の男性を好きになり、そのことに熱中する女心が愛しく思えました。
出来ることなら、協力してもよいとさえ思った。
かのライ中尉が真摯な人であることは、遠征の間で理解しています。
しかし現実は、ただ好きだから一緒にいれば良い、といったものでもないでしょう。
二人の間には国境があり、生活の継続性が保てるのか？
私はライ中尉へ、英文の手紙を出しました。
それらのことを指摘してなお、それでもとするならば、私なりに協力すると！」

「結局、ライ中尉との間は上手くゆかなかったけど、彼女は私のもとを離れていった。
二人で暮らしたアパートに一人で帰る侘しさは、体験した者でないと分からないでしょうね。
電灯のついていない暗い部屋へ一人で戻る寂しさは、愛情が深いほどにこたえます。
戻っておいでと言ったのだけど、彼女なりの礼節はもう私のもとへはもどれなかったのでしょう。
そんなことがあって、最初のダクラ南西壁遠征では、妻を失ってしまったのです。
そしてその寂しさを思いやる心が、二度目のダクラ挑戦のエネルギーでもあったのです。」

千尋はしばらく言葉を失っていた。
淡々と、もの静かに話す中野であったが、その意味する言葉は千尋の思考を越えていた。
ただひとつ、千尋は心に誓った。
『この人をふたたび傷つけてはいけない！・・・』と。
優しく、もの静かな、そして強い意志に、千尋は圧倒されていた。

「こんな体験があるからこそ、静まりかえっていられるのですね！
愛した人に去られ、さらに遭難と仲間の死、このような自身の体験があるからこそ、今こうして静かにいられるのですね！」
千尋は言葉には出さず、胸の中に飲み込んだ。
浜天紅のコース料理の味も分からず、二人は話しに熱中していた。

「ところで、実家に帰って怒られたと言ってましたよね！
両親に相談しないで、ヒマラヤ・トレッキングへ行ってしまったとか？」

「ええ、わたしはいつもゴメンナサイを繰り返し、結局は自分の好きなことをやらせてもらっています。
元気で帰ったから大丈夫でしたけど、またお見合いの写真を出されました。
でも今度は、写真も見ないで帰ってきちゃいました。」

千尋は、中野の面影が脳裏にあったとは言わなかった。
「うちの両親はお医者さんばかり探してくるんです。
でもわたし、まだその気じゃないから！と、いつも断り続けています。
わたし、お見合いではなくて、『この人！』とおもえる、キラメキのある人・・・
と思っているんです」

「よし、それじゃ決まった！
人生のコンダクターはまかせなさい！
なーんちゃって！」
中野は冗談めいて言った。
「いや、冗談ではなく、私に千尋さんのコンダクターをまかせて下さい」
今度は真顔で言った。

「はい！
すっかりおまかせしようかしら！」
千尋も冗談のように笑いながら、いとも簡単に答えた。

たった半月の旅を一緒に過ごしただけで決めてしまうことが、軽薄な行為であることは十分承知していた。しかし利害や打算でなく、人と人とが分かり合うということが、一瞬の感覚であることも、千尋はなんとなく感じていた。
その感覚を『ガバ』と言い、『ガバは突然やってくる』、と国立・C大学教授の著書を読み、千尋は感銘していたことを思い出した。
半月の旅を通して、千尋はこの『ガバ』の感覚を中野に感じていた。それを確かめるため、千尋としては大胆にも、横浜の地まで出向いてしまったのである。

「ところで、うちの両親を説得するのは、絶望的かもしれません！」

「大きく価値観が違うから、分かってもらえるのは絶望的だとしても、やれるだけやってみなくて

はね！

その結果が駄目ならば、それはそれで仕方がない。

二人して、分かってもらう説得の努力を、誠意をもってすることが大切だと思うんだ。

私の理想は体一つで来てもらうことです。

結婚とは男が女をさらってゆくことに、その本質があると思っています。

しかしだからといって、親を無視し、説得の努力もしないで家を捨ててはけない。

価値観が違いすぎ、異なった私たちの価値については、結局分かってもらえないかもしれない。

でも、努力する行為の中で、私たちの人間性、真面目に生きようとする姿勢は、やがて将来分かってもらえる道につながるからです」

中野の落ち着いた言葉に、千尋は安心して全てをまかせられる思いがしていた。

初めて出合い、一ケ月で決心することへの軽薄さが、中野の落ち着いた論理的思考でカバーされるように感じた。

十才年上の中野や、それ以上の富岡に対し、千尋は木本や竹中のような同じ年代の男性とは違う、大人の落ち着きを感じていた。一緒に過ごしたトレッキングの中、いつも静かで落ち着いた彼らの物腰に、それまでにない別な男性の魅力を感じていた。

それに比べると、同じ世代の男性が、幼く見えてしまう。さらに同年代では、雄と雌の匂いばかりが強調されてしまう。

時には命を賭け激しく山を登りながら、それ以外では物静かで慎み深い中野と富岡の二人に対し、千尋は今まで接したことのない異性を感じていた。それは大学山岳部での先輩男性とも趣は異っていた。知識だけではない体験に裏打ちされた知性と、喜びや悲しみを味わった人間的な深みを感じていた。

富岡は所帯持ちである。中野は一度結婚し、離婚していた。それを隠そうともせず、さりとて強調するわけでもなかった。

ヒマラヤ大自然のアクシデントから、奇跡の生還をしてきた体験が中野を大きく、自然体にしていた。死線を越えたその先に、中野は確かなものをつかんでいた。

そんな中野を知るにつけ、ヒマラヤ・トレッキングの中で、千尋も密かな憧れを抱いていた。

「こんどの休みはいつですか？」

「ちょっと待って下さい。手帳をみてみます・・・

二月は十六日と二十四日です」

「十六日は何曜日ですか？」

「金曜日です」

「よし！それでは十六日、千尋さんの故郷の山、古賀志山へ行きましょう」

「はい！」

「その前に、二月十日から十二日まで、靖恵さんと八ヶ岳へ行く約束があります。

成田から帰りのリムジンで、靖恵さんに頼まれたものです。

冬山へ行ったことがないので、ぜひ連れて行ってほしい！と。
どうか誤解と心配をしないで、待っていてほしいのですが・・・」
「だいじょうぶ！
靖恵さんにも優しくしてあげて下さい」

＊　＊　＊

中野は靖恵とともに八ヶ岳へ出発する直前、長い手紙とともにこれまで書き綴っておいた文章や、手製の著作を千尋のもとへ送った。
そこには、これまで三十余年にわたる、中野の心の叫びが凝縮されていた。

5　二つの道

八ヶ岳から帰った中野に、千尋からの返信が待っていた。

『　おかえりなさい。
八ヶ岳はいかがでしたか？
赤岳の頂きには立たれましたか？
靖恵さんは、冬山を気に入ってくれましたか？

長いお手紙、そして書き綴られた諸々の文、とても嬉しく、とても、とても複雑な気持ちで読みました。

何を、どんなふうに書いたらよいのでしょう。郵便屋さんが休日なのをよいことに、もう三日もいろいろな文面を探しあぐねています。

それにしても、何という重みでしょうか！

何の障害もなく、ぬるま湯の中で生きてきたわたしにとって、あまりにも重く、深く、安易に返事を書くことはできません。文章の一端一端に、優しさと繊細さが感じられました。

長いお手紙はともかく、ダクラ遭難に関する多くの人たちからの手紙、「山と美と」と題した章はあまりにも大切な中身ゆえ、わたしが読んでしまってよいものか、困惑しています。読みながら、何度も表紙を閉じてしまいました。

少しの軽薄さも感じられない貴方が、たった十八日間ご一緒しただけのわたしに贈って下さった重みを、ズシッ！と感じています。こんな大切な貴方の生きざまを、知り合ったばかりのわたしに知ってもらいたいとする勇気は、いったい何なのでしょう？

わたしには別に意中の人がいるかもしれないのに・・・！

ごめんなさい！

わたしはとても、とても嬉しいのです。

どんな人をも信じたいわたしの信条が、きっと間違っていなかったと思わせられる、貴方からの勇気を贈っていただいた気がします。

ダクラ遭難の諸文・・・！

遠征や事後処理に対する中野さんの姿勢が、本当に誠意あるものだと感じます。貴方を責める大森さんのお母様の手紙など拝見しますと、貴方がどんなに心痛めたことでしょう。

「責任をとるということが、どういうことなのか、ずっと考えていた」

と、以前おっしゃいましたよね。

「自殺しようなんて、もう思わない」

ともおっしゃいましたよね。

「山を止めてしまおう！」

とお考えになっていたのではないでしょうか。
登山経験の浅いわたしにとっては、貴方をなぐさめたら良いものか、励ましたら良いものか、貴方がどんな心情でいるのか、ただただ大変だということが分かるだけで、安易に同情してはいけない気がします。
ただただ、あまりご自分を責めないで下さい。時には大きな深呼吸と、心の洗濯をして、これからも貴方らしい山を続けられるよう、願っております。

「山に芽生える」・・・！
中野さんにも、二十歳のころがあったのですね。わたしのそれと比べると、なんて実存感があるんでしょう。青年らしくしっかりと悩んで、自分の考えに取り込んでいる。
宗教の項を興味深く読みました。無や禅について、わたしも勉強してみようかしら！
「ヒマラヤへ　おしどり登山」の新聞記事を見て、驚いています。
たしか高校三年生の時、その頃いっしょに山へ行っていた女の子と、
「よし！わたしたちも！」
と、意志表明をしたのです。それが、この新聞記事の切抜きを目の前にしての誓いだったのです。その彼女は身体の不調もあり、もう山は止めてしまいましたけど、
・・・憧れていたのは中野さんだったのですね！
「山と美と」、
胸を締め付けられる思いで、全章を読みました。
ヒマラヤ登攀へ夫婦で出かけ、そして別れとなってしまったその経緯。何も書かなくていいですよね。わたしには、何も書けませんもの！
貴方の人生の重みに比べたら、わたしのそれは何とたわいなく、味気無いものでしょうか。
とても愛して、とても静かに、そして、とても強く生きてこられたんですね！

少し、わたしのことを書きます。
いつもわたしの周りは温かい人ばかりで、わたしに愛や優しさを教えてくれました。家でも学校でも山でも、信じられないほど良い方ばかりでした。両親には反対されることもしばしばでしたけど、自分のやりたいと思ったことは、ほとんどかなえられました。わたしは、絶望的な悲しさというものを、味わったことがありません。
昨年は、結婚を決めようかと思った方が突然行方不明になり、支離滅裂な頭の中でした。
二年間、手紙の交換や、時にはお会いしたこともありましたが、結婚する相手としては何かが違うような気がしていました。小さな何かですが、わたしはずっと迷っていました。
彼が優しいほどにわたしは迷い、彼を疲れさせてしまったようです。わたしのどこかが、何かを求めてやまなかったのです。
それが何かと言われても自分では上手く言えません。無理に言ってみると、直観的な「きらめき」みたいなものだったのでしょう。
わたしは山へ出かける気力もなく、気晴らしに出かけてはみたものの雑念ばかりです。

自分に求めるものがない山登りは、あじけないものでした。山は離れてしまえば、離れられるのかもしれないと、淋しく思っていた時でした。以前から話しのあったヒマラヤ・トレッキングへ、しぶしぶと出かけたのでした。本当に、しぶしぶとでした。

わたしが彼に求めていた「何か」とは、親元を引き離してでも飛び立つことの出来る、力強さだったのかもしれません。

この程度のわたしの体験では、貴方のそれとは比べようもありません。

今となってそのことは、わたしの長い人生を良い方向に導いてくれたのかもしれません。

昔から思っていました。

人を理解するには、その人と同じ体験をしなければ分からないだろうと。

だから、いろいろな体験をしてみたいと思っていました。

ですが、二度と味わいたくはない・・・

とする体験があることも、貴方の話しや文章から新たに知りました。

貴方の手紙にもあるように、人とひととが全く同じ感覚で、全く同じに理解することはできないのかもしれません。だからこそ分かり合おうとする努力が大切、とする貴方の考え方が、素直にわたしの胸に響きます。

和して同ぜず！

「山に芽生える」の中にもありましたが、全く同じでなくても和してくれる人、ウンとうなずき分かってくれる人が傍らにいたら、それはとても幸せなことだと思います。

わたしは青春に「何か」を求め、知らぬ間に幾人もの人を傷つけてしまったように思えます。それはわたしの、我墟だったかもしれません。しかし今ここに、すっかり元気になっているわたしを認めることができます。

そして貴方の「贈りもの」の中から一番感じたことは、

「この方は、もう決して傷つけまい！」

ということでした。

千尋

『

＊　＊　＊

初めて厳冬期の雪と岩の山を登った靖恵は、雪山の魅力に深く感じ入っていた。今までの観賞する登山、自然に浸り、自然と同化する安らぎの登山から、自分と闘う山の登り方があることを知った。闘うといっても、人は山に勝てるわけがない。山登りを通し、自分と闘うことの意味を感じ始めていた。

ヒマラヤの山々に分け入り、日本の厳冬の岩山へ登ってみると、靖恵はこれまでの生活で自分が何を求めていたのか、これからの歩むべき道が見える気がした。もしその傍らに中野がいたら、きっと安らぎと自信を持って歩めるように思えた。

行動力に勝る靖恵は最初から直感で動き、その後で思考がホローした。

靖恵はふと、中野の誕生祝いにコンサートを一緒に聞いてみたいと思った。

中野の誕生日は三月末である。

靖恵は八ヶ岳から帰るとしばらくして、中野が一番好きだと言っていたグラシェラ・スサーナのコンサート切符を二枚買った。

「もしもし、わたし奥田です。

先日は八ヶ岳、大変ありがとうございました。

雪の山に登れて、とっても感激しました。

機会がありましたら、ぜひまたお願いします」

「そんなに喜んでいただけると、私も大変うれしいですよ」

「ところでスサーナのコンサート切符を手に入れたのですが、ご一緒願えますでしょうか？

中野さんのお誕生日にと思ったのですが、その日の公演はありませんでした。

翌日になってしまいますが、ぜひご一緒して戴きたいのですが」

「それは光栄です。ありがたくご一緒させて戴きます。

ところで場所はどこですか？」

「神奈川県民ホールです。

わたしの勤務先が赤坂なので仕事が終ってすぐに出ますけど、ちょっと時間がかかります。

ですから、お席で待ち合わせたいと思うのですが」

「ええ、いいですよ！

分かりました。

私は地元で近いですから、先に行って席で待つことにしましょう」

＊　＊　＊

二日後、靖恵からの書留郵便が中野に届いた。

アルゼンチンの歌姫、フォルクローレの女王、グラシェラ・スサーナのコンサート切符一枚に手紙が添えられていた。

『　厳冬の八ヶ岳は、本当にありがとうございました。

わたしも高校時代から十年以上、中野さんとは違った意味で山に接してきました。

幼い頃はひ弱で、運動会にも出られなかったほどでしたが、そんなわたしが健康になれたのも、山

のおかげと思っています。
今まで一番長く熱中できたのも、山でした。
山は、クリエイティブな魅力にあふれていると思います。山を通して得たものは、中野さんのようにはっきりした言葉で説明できませんが、言い尽くし難いものがあります。
現在のわたしが、山なくしてはありえないことも確かです。
スサーナのコンサート切符を同封致しました。
仕事の都合でちょっと遅れるかもしれませんが、わたしの席は１３番です。
スサーナの歌は良い曲ばかりで、昔から大好きでした。
特に最近は「愛の詩を今あなたに」が気に入っています。
小椋桂の「揺れるまなざし」も大好きです。
いつも夜、テープを聞きながら寝ますが、たいてい途中で眠ってしまいます。

先日送って戴いた森本哲郎の本、読んでみました。森本氏のコーヒーを美味しく味わう時の気持ちには、うなずくところが随所にありました。
スペインのマラガ、真青な空の下のカフェで、楽しそうに歩く人を眺めながら飲んだ、コーヒーの香り。
アテネのリカヴィトスの丘から、夕暮れに染まったアクロポリスを見ながら飲んだ、コーヒーの雰囲気。
ヴェニスのサンマルコ広場で、鳩と人とを眺めながら何時間も陽だまりのカフェテリアに座って飲んだ、コーヒーの味。
わたしが忘れることのできない、コーヒーと共にあった光景を思い出します。
会社の帰りに一人でコーヒーを飲むとほっとしますが、そんな時もふと、旅先のカフェテリアで飲んだ光景を思い出して、くつろいだ気分になります。
しかし森本哲郎も書いているように、コーヒーも食事と同じで、「心の豊かさを交換できる二人、もしくはそれ以上の人とたのしく飲む時、その味わいを増す」のですね！
これまで、一人で生きることを見つめ続けてきたわたしにとって、特に最近はその雰囲気が分かるようになってきました。

わたしの大好きな沈丁花の香りがしてきました。いつかまた、ネパールへ行けたらいいな！と思っています。
そしてもし、エヴェレストを登ることができたら　・　・　・　？

靖恵　　』

中野には、靖恵の好意が良く分かっていた。靖恵は二十八歳、結婚にあせっているわけではない。淡々と自分の道を歩んできたことも、中野には良く分かった。そんな靖恵が今、中野に特別な好意

を抱いていることも、彼女の表現から察していた。
しかし中野は靖恵との未来を思うと、離れていった先の妻との生活に重なるものを感じた。
夫婦でヒマラヤを目指し、その夢を実現した。そして直後、妻に去られてしまった中野にとって、夫婦でより困難な山を目指すことは、もう繰り返したくなかった。
結婚生活はごくごく平凡な毎日の連続である。そんな平凡さを共に過ごせる女性とが、次ぎなる生活を共にできると思わざるを得なかった。
靖恵は輸出入を扱う貿易代理店に勤めている関係から、海外情報が豊富に手に入った。
リサーチのためと趣味が重なり、多くの国々を歩いてきた。海外を歩き回れる会社だから、英文科を卒業してからの就職先に選んだものであった。
これまでの五年間はいろいろな国へ出かけ、一人旅を楽しんできた。
そして行き着いた先が地球の極地、エヴェレストであった。
仕事とは別に、靖恵の旅の目的は旅そのものにあった。
旅の情緒に浸り切ってしまうこと。
旅の体験や思索をまとめ、それを作品に転化することではなかった。旅に出て、その景色にとけこんで自らを消去させ、同化してしまう。旅の景色とひとつになる。そんな靖恵の旅であった。
だから思い出以外、何も残ってはいない。

一方中野は学究肌である。大学教授になれたらと思っても、戦争直後の貧しさの中で、大学へ行く家庭環境になかった。
学問は一生でも尽きず、大学へ行くことだけが学問の総てでないことも彼は知っていた。工業高校を終えてから、電気技術者として大学レベルの電気工学理論を独学で学んでいた。
ヒマラヤ遠征があれば、まずその組織論について勉強した。
リーダーシップやチームワークの基礎理論を、社会学、心理学、政治学からもアプローチした。
ダクラ南西壁登山において、中野のその緻密な計画は群を抜いている。戦略、戦術、装備、食料、輸送計画など、設計という職業柄もあって緻密である。
そんな彼が遠征に成功できなかった理由には、一つには運がなかったことにある。
さらに、リアリストになりきれないロマンと心情から、集団のカリスマ性を彼自信が嫌ったことにある。彼は日本的、親分／子分の関係が嫌いだった。個人と個人の自立した関係を望んでいた。
中野の気質は大将でなく、参謀が似合っていた。それも優秀な参謀である。しかし優秀が過ぎてそれをも包み込む、器の大きな大将に出会えないでいた。
だから二度目のダクラ遠征では、中野自身が大将（隊長）となって実現させたのである。　そこでは、大将と参謀を一人でこなした。
隊員で唯一そのことに気づいていた大沢隊員は、中野と共に爆風で飛ばされ死亡してしまった。遠征出発前の準備中、中野と大沢は他の登山隊を引き合いに出し、そんな話しをしたことがあった。

靖恵が中野にとけこみ、同化することで靖恵たりうるか・・・？
靖恵がとけこんだ中野は、中野たりうるだろうか・・・？

中野はこの図式に、閉塞性を感じた。明るく未来が開けるよりも、ぎすぎすした自身の醜さを、見つめ合ってしまうのではないか・・・！

リチャード・バックの「カモメのジョナサン」は、夫婦つがいでは完成しない。ジョナサン自身でしか、自己完成に立ち向かうことはできない。

中野の二度目のダクラ遠征は、ジョナサンが自己完成を目指す行為に似ていた。

愛した妻に去られたその悲しみは、激しい行動へのエネルギーとなって、中野の心に蓄積されていった。四年にわたる準備の間、冷たい世情の風に耐えられたのも、悲しみのマイナスをプラスに転じようとした、中野の自己実現への努力があった。

その結果に死線を越え、偶然にも生還してきた中野にとっては、ジョナサン流の自己完成が人生の目的でないことを改めて知った。

その先には、若き日に読んだ「星の王子さま」への共鳴と、新たな哲学への発見があった。

どうやって努力するかという、技術のみではない！

なんのために、極限への努力をしているのか？

その思想が大切であった！

自身のための自己完成とは、一体何のためにあるのか？

もし人に自己完成ができるとすれば、それは一体何者になるのか？

人々がそれを、「神」と呼ぶ者なのか？

ニーチェは「神は死んだ」といったが、

果たして「神」は存在する者なのか？

神は永遠で、人には一生という時限の枠がはめられているのか？

その時限を生命（いのち）としてみれば

生命と魂とは、別々なものなのだろうか？

では、人の魂とはいかなるものなのか？

人の魂はいかに生まれ、いかに消滅してゆくのだろう？

魂は、輪廻転生を繰り返すものなのだろうか？

私はダクラ南西壁登山で、貴重な体験をした。

同じ場所に立ちながら、なぜ大沢は死に、なぜ私が生き残ったのか？

彼と私との間には、果たしていくばくの違いがあったのか？

神の選択か、はたまた偶然であったのか？

神の存在を、今だ私は確かめられない。

神はいるとも、いないとも、いまの私には分かっていない！

魂の輪廻転生も、まだ私には実感がない！

しかし人の世において、私の生命の存在は、私だけのものだろうか！

死んだものたちからの意志を受け継ぎ、次ぎなるものたちへ伝える！

私は、私（自我）のためだけに生きることが、もはや無意味に思える。
私の関わるすべての人びとへ、
今、生きています！と、伝える喜びを知った！
その喜びは、共に分かち合い、うなずき合えることを知った。
「カモメのジョナサン」がめざした自己完成のその先に、
「星の王子さま」が語る、
すべての存在するものたちへの愛と、
大切なものは、目に見えないことを。

＊　＊　＊

中野は八ヶ岳から帰った三日後の夜遅く、東北新幹線で宇都宮駅に降り立った。
駅前で軽い食事をとった後、千尋が運転するカローラで古賀志山へと向かった。
山は千尋のふるさとの山である。ふるさとの山で、二人の愛を確かめ合うためであった。
大谷石や大谷観音で知られる大谷を過ぎると、もうそこは古賀志山である。山は浅く、森の中の細い小道に車を乗り入れた。落ち葉と霜柱を踏みしめ、森の中を少し歩けばすぐに岩場へ行き当たる。黒ずんだ、傾斜のきつい五十㍍ほどの岩場である。
岩場の少し手前の森の中、凍った落ち葉を敷きつめて簡易テントを張った。雪はないが、放射冷却の大きい冬の古賀志は、空気も凍ったように冷たい。澄んだ夜空に、星たちが音もなく瞬いていた。

千尋はそれまで着ていた衣服の上に、ヤッケとオーバーズボンを重ね着し、山岳部で使っていたシュラフ（寝袋）に入った。中野は薄い羽毛の内服を重ね、ザックに足をいれたまま横になった。
中野は日本の冬山でも岩登りが多かったため、ロープやピトン（岩釘）類の登攀用具が重く、シュラフはほとんど使わなかった。

「千尋さん、私との結婚、ＯＫしてくれますね！」
「はい！」
千尋は答えた。
すでにそう答えるべく、千尋は心の準備が出来ていた。
中野は千尋の入ったシュラフのチャックを開け、千尋を抱きしめた。千尋は目を閉じ、中野の背に両腕をまわした。二人は乾いた唇を重ね、長い抱擁を続けた。
テントの下の凍った落ち葉が、ガサガサと音を立てる。

「ウ・・ワーン！」
突然、千尋が泣きだした。

中野は驚いた。そのわけが飲み込めないでいた。
千尋は中野の胸に顔をうずめ、しばらく泣きじゃくった。
落ち着きを取り戻した千尋に、中野は優しく聞いた。
「どうしちゃったの？」
「うれしくって・　・　・
今まで緊張して生きてきた糸が、プツンと切れちゃったみたい。
わたしはこれまでに、男性にも負けまいという意識でがんばってきたつもりでした。
でもたった今、あなたに総てをおまかせすると思い切れた瞬間、ホッと気がゆるんでしまって、自分でも分からずに泣けちゃいました」

中野は千尋の全幅な信頼をかちえたでことで、とても優しい気持ちになっていた。
バツイチの中野にとって、千尋の愛はこの世で一番大切なものに感じていた。
二人きりの狭いテントの中にあっても、青春の獰猛な愛とは違っていた。
それは優しい愛だった。
許し合い、総ての自己をかけ、自らの魂に受け入れる愛であった。
どんなことがあっても、決して逃げないで受け止めようとする、真心の愛だった。
「ありがとう！・・・」
中野は感謝の心を込め、さらに優しく抱きしめた。

「これからが大変です。わたしの両親を説得するのは、絶望的です。
でも信じて下さい！
必ずあなたのところへ行きます！
最悪の場合、家を出る覚悟はついています！」
「ありがとう！絶望的だとしても、出来る限り説得はしようね！
何を言われても私は大丈夫。
しばらくして時が来たら、私も説得に出かけるからね！
言われることは、だいたい察しがつく。
ご両親からすれば、言って当然なケースということも、今の私にはよく分かる。
でも結婚は、ご両親が望むケースだけでもない。
今の時代、とても多様化している
そしてなによりも、キラメキを感じ合った男女が愛し合い、共に生活したいとする欲望は、結婚の自然な形なんだから！
私は一度結婚していたから、結婚生活がどんなものであるかは良く分かっているつもりです。
今キラメキ合っていたとしても、同じ状態が長くは続かない。
結婚はキラメキのゴールではなく、キラメキからのスタートです。
長く、平凡な関係がその中身です。
結婚生活に、いつもキラメキを求めていたら、すぐに疲れてしまう。

空気のように、意識することなく『在(あ)る』ことの大切さを知っていることが大切なんだ。

無くなって初めて知るのでは、人類の知性がかわいそう。

なにごとも、同じ体験をしてみないと同じ感覚にはならない、という理屈は正しい。

だけど全く同じ体験をしなくても、それに似た感覚が得られるのも、人に与えられている知恵と感性なんだから。

だから、一つひとつの経験から、いつも知恵と感性を磨いておくことが大切。

ヒマラヤの空気は、酸素が薄くて苦しかった。

日常の空気は、当たり前で何も感じない。気にもしない。

しかし、当たり前で無意識な存在が、実はとても大切なことだった。

そのことに改めて気づき、そのことに感謝できるようになったことも、ヒマラヤ登山の大きな贈りものだった。

夫婦も空気のような存在で、長く一緒にいるとその大切さに気づかなくなってしまう。

結婚生活は、そんな長い、平凡な関係の持続なんだよね！」

千尋は中野と全く同じ感覚では分からなかったけど、中野が言わんとする意図はよく分かり、うなずくことばかりであった。

「それにしても、どうやって話しを切り出そうかしら？」

「飾らずに、正直に言ったほうが良いと思う。

ダクラ遠征の時大沢君は、家族は詳しく知らないほうが心配が少ないと考え、家族に詳しい説明をしないで出かけてしまった。

それは反面での優しさだったけど、もう反面では現実逃避でもあった。

その結果遭難死してしまい、家族の人たちの悲しみをより大きくしてしまった。それはもう、取り返し出来ないものともなってしまった。

我々がご遺族から恨まれるのは仕方ないけれど、事後にいくら説明したところで、結果はもう誰にも元に戻せない。

この例のように、大切だと思えば思うほど、その時は辛くても正直に言ったほうが、後悔が少なくなるでしょう。

私はいつも、後悔を残さぬ選択のほうが良いと思っている」

「確かにそうですね！

あせらずに努力してみましょう！

実家を継いでいる二番目の兄は比較的話し易く、義姉さんも気にしてくれるので、その辺りから話しを切り出すことにしようかしら・・・！」

「まだご家族の状況が分からないから、初めは千尋さんにまかせるよ！」

「うちの兄姉は仲が良く、身近に住んでいるから交流も多いんです。

わたしは大学に入った時に初めて家を離れ、下宿住まいを経験しました。
家族から離れてみると、親、兄姉とのこれまでのかかわり方で、煩わしく思える部分ばかりが目についてしまいます。
わたしなりに自立を考えると、家族の雰囲気とは少しずつ違ってきたように思うのです」
「自立すると互いに持たれ合わなくなって、それぞれが独自の行動をするからね。
持たれ合いも度を越すと煩わしいけど、それなりに自立したどうしなら、優しさの表現にもなるでしょう。
それは大切にしておいた方が良いと思うな！
私の父親の唯一の教訓が、『自分の事は自分でやれ、他人に迷惑をかけるな』、だった。
だから私の兄姉はそれぞれが好きに生活しており、何か事がないとほとんど集まらない。
それは面倒でなくて良いけれど、逆に味気ないものでもある。
お互いに頼り合っていないから、目に見える絆としてはほとんど感じなく、今ではちょっと寂しさも感じる！
ちょうど良い関係っていうのは、なかなか難しいものだね」

二人の息は冷えきった外気に冷凍され、その水分はテントの内側に付いてキラリと輝く。
森の木々を揺する風もなく、山はしんしんと冷え込んでいた。
静まりかえった夜である。
互いに信頼を確かなものとした今は、獣ではない人となり、落ち着いてゆっくりと情熱を語り合っていた。そんな雰囲気が千尋は好きだった。

「理想の人は？と聞かれた時、わたしは『山のように静まり返った人』、と答えることがあるんです。
そうすると、聞いた方はキョトンとする。
抽象的な表現だから、説明しないと分からないんですが、でも中野さんなら、説明するまでもありません」
千尋は、
「あなたの生き方そのものです」
という言葉を胸にしまった。

翌日、暖かくなってから岩場を一本登った。

日だまりの岩のテラスから、千尋の生まれ育った田園地帯が遠くに見下ろせる。
「わたしの大好きなふるさとに、あなたと二人して家族に迎え入れられたら、どんなに幸せなことでしょう！
屋敷の中を流れる小川で遊んだり、裏山の森を歩いたり、たんぼで田植えをしてみたり・・！

そうなったら、すてきです。
父や母、兄姉たちは本当に優しいんです。
でも、価値観が少しずつ違ってきたため、説得するのはとても難しそう・・」

「よく分かるよ！逆の立場だったらそうなるかもしれないしね。
でも、出来る限り説得してみようよ！
結果ばかりを先に思ってはいけない。
私は何を言われても、きっと辛抱できると思う。
それが、失うばかりだったヒマラヤからの、大切な贈りものなんだ！」

「そう言ってくださってありがとう！
これからあなたに嫌な思いをさせることが、わたしは辛いんです。
でも、そう言って下さるあなたと一緒だから、きっとがんばれそう！
これからも、よろしくおねがいします！」

そう言いながら陽だまりのテラスで、千尋は中野にもたれた。

＊　＊　＊

千尋のふるさとの山、古賀志山から帰った中野は、しばらく設計の仕事に追われた。

建築設計の中、電気設備全般にわたる設計が中野の仕事であった。
華やかな建築意匠に比べ、建築設備は地味で目立ちにくい。しかし建物が出来上がり、使い始めてからの機能は設備が主役になる。
人間の身体に例えるなら、美人・美形に相当するのが「意匠」である。骨格は「構造」、循環器系統は「給排水設備」、呼吸器系統は「空調換気設備」、筋肉・神経・知能系統は「電気設備」、それぞれが該当する。電気設備もまた、筋肉は電力系、神経は通信、知能は情報蓄積と制御に細分化ができる。
現代の高度に発達した建築においては、それぞれの分野で専門が分かれている。
医師や病院も同じように、それぞれ高度に専門分化が進んでいる。
それらを統括する法律が、医師には「医師法」が、建築設計者には「建築士法」がある。
医師法は昭和二十三年、建築士法は昭和二十五年に制定されている。すでに五十年、半世紀を経たそれら法律は、ますます実態との乖離が進んでいる。
一度定めた法律の下では、政治・行政・産業界・学会と、関わる組織の中で既得権益が確立する。
同じ組織の中で、自ら既得権益を手放してまでも、現実社会への貢献を第一義とするような倫理は、

けっして多数を獲得できない。権力闘争が絶えない人間の性（さが）であり、逆に、権力闘争なくしては新たな権益を獲得できない人の世の常である。

法律を定めることには、罪が伴う。

その罰はつくった人々には及ばず、後世へと引き継がれる。

歴史として記録に残される人の文化は、時間軸と共に変化することを示している。

法律が社会の中で、「何のために」有効たりうるかは、変容する文化現象に伴い変化する。法律で定める意味と機能を、世代の変わり目当たりで見直さなければならないのだが、既得権益はいつの世も抵抗勢力として残る。

立法の目的は常に、「何のために！」かが問われている。

既得権益を持った人のためにか、

既得権益を奪い取ろうとする人のためにか、

一人一人個人のためにか、

さらなる公益のためにか！

現実はそれらが複雑に絡み合い、もたれあっている。

中野が専門とする「電気設備」は、筋肉・神経・知能系統を扱うがゆえに、様々なものに気を配った、細かい配慮が不可欠となる。それはまた、中野の性格にも合っていた。

しかし法律の規程では、電気設備であろうとも、その設計者は建築士である。

法律に定めた建築士は、一級、二級、木造建築士とに分かれ、それぞれの業務制限を定めている。中でも一級建築士は、建築設計のオールマイティな権限が付与されている。

電気設備の設計は国土交通省（旧・建設省）管轄であり、「建築基準法」がその主たる法律である。さらに建物の防災面からは、総務省（旧・自治省）管轄の「消防法」が適用される。

使用を開始した電気設備の維持管理は経済産業省（旧・通産省）の管轄となり、電気事業法の下、「電気主任技術者」という国家資格者が運用する。それらは第一種、第二種、第三種電気主任技術者とに分かれている。

だが、現代の超高度に発達した建築設計において、法律に定める通り一級建築士が電気設備そのものを設計できるかといえば、ほとんどの一級建築士は、それを出来ないのが実態である。

電気に関する専門知識を学んだ電気技術者が電気設備を設計し、機械技術者が空調、衛生設備を設計している。昇降機においては、専門メーカーが設計と施工、保守管理を行っている。

勿論例外はあるが、法律の下、すべからく設備設計は法律に縛られた下請け業界である。

しかし、二十一世紀の環境問題において、空気、水、エネルギー、情報等ライフラインと称され、これまで下請けとされてきた分野こそが、その主役となる。

専門分野からだけでなく、リンクするあらゆるものへの配慮の中から、「それではこうします」と特定する、「その意思決定行為」が「設計」となる。

これまでは、図面を書くその事を設計と考えていた。しかし設計図面とは、意思決定により特定されたことのまとめを描写し、関係者へ伝達するメディアである。

「こうします」と特定すること、そのことが設計となる。特定することによってコスト、エネルギ

ーが定まり、機能、特性、形態、ライフサイクル等の枠組みが決まる。
「設計」とは工学的な特定、形象の特定ばかりではない。社会、政治面からの特定、行政面からの特定、経済面からの特定、維持運用面からの特定となる。
それらを工学的、経済的手法で検討を重ね、その事業の目的を実現させるために、設計図面（メディア）として表現する。二十一世紀には、地球環境への配慮も加味しなければならなくなった。
だから設計者は、建築士その人だけのものではなくなる。

中野はこれまで、色々な職業を経験していた。工業高校を卒業し、通信機メーカーに入った。そこで放送機器の設計に従事したのが最初であった。以降は学習塾の先生、高等学校の実習助手、通信工事会社での工事や営業、都市計画家の秘書などである。
それらがいずれも短期だったのは、中野が求めていた感性の「何か！」を、満足できなかったからである。
カモメのジョナサンのように、中野は青春に「何か！」を求めていた。
それが何であるのか、中野自身も分からなかった。
中野が最も熱中できたのは「山登り」であり、山登りを通して生きる目的を見出すことであった。
山登りを考えるにつれ、山登りはあらゆる科学や思想、哲学、宗教へとリンクすることを知った。それらは専門分野からみれば、ほんの初歩的段階であったが、一人の人間として把握し、関連するもの全てを総合して捉え直し、再構築してみたい意欲にかられていた。
完全主義的性格を備えた中野の気質は、それらの延長に「神」を意識していたが、反面では「神」を否定するニヒリズムにも共感した分裂気質があった。両者の拮抗は探求のエネルギーとなり、両者のバランスをとる努力は広く総合へと向かっていった。
それゆえ、「設計」という職業は彼の性格になじんでいた。彼の関心は電気設備ばかりでなく、広く人間と人間社会へ向かっている。

＊　＊　＊

千尋とは毎日のように電話で話し、手紙を交換していた。二人とも、マメなほうである。
「靖恵さんからスサーナのコンサート券が贈られてきたんだけど、行ってもいいかしら」
電話口の中野は、複雑な気持ちで千尋に相談した。
「どうぞ、行ってきて下さい。
靖恵さんのお誘いだから、断っては悪いわ！
すてきな女性からお誘いがあることは、それだけあなたがすてきだという証明ですもの」
千尋は悪びれずに答えた。
それほどまでに今は、中野を信頼している。

中野は靖恵の望みを分かっていたが、すでに千尋と決めていた。
千尋も中野を受け入れた。
しかしそのことを、中野は靖恵に知らせてはいない。
靖恵の気持ちが分かっても、千尋とのことを靖恵に知らせる関わり方ではないと、中野は考えていた。

だが、中野の誕生日に、中野が一番好きだと言ったスサーナのコンサートを一緒に聞きたいとする靖恵の気持ちを思うと、靖恵の心の重さを感じた。
「コンサートは一緒して、その後で靖恵さんに手紙を書こう！」
中野は決めた。

靖恵は中野の誕生日のお祝いに、コンサートだけでなく、心を込めた彼女のお気に入りのコーヒーカップを贈った。
そして短い手紙を添えた。

『　お誕生日おめでとうございます。
京都の清水坂でふと目にとまり、
とても気に入ったこのコーヒーカップを、
コーヒーの好きなあなたに、
使っていただければと思います。　　靖恵　』

＊　＊　＊

ロス・インデイオスをバックに、哀愁と情熱を歌うグラシェラ・スサーナ！
クラシック・ギターの名手、オスバルト・アベーナも加わったそのステージは、華やかで素晴らしいものだった。
第一部は「花祭り」から始まり、「さよならの歌」まで十一曲。
第二部は「サバの女王」から十二曲。
その最後が「粋な別れ」であった。

靖恵は中野と席を並べ、久方振りに満ち足りた気持ちだった。
言葉で愛を語るのは苦手だった。愛の歌に浸りきってしまう、それが靖恵流だった。
山に登り、山に浸りきってしまう。それが靖恵の得意とする山の味わい方だった。
大好きなスサーナの生演奏を初めて聞いた中野は、その素晴らしさに感激した。
しかしいまひとつ、心に重い荷を感じていたが、靖恵には気づかせなかった。

靖恵が好きだと言っていた「愛の詩をいまあなたに」は、そのステージになかった。
「粋な別れ」がフィナーレであったことの偶然な示唆を、靖恵は知る由もなかった。

＊　＊　＊

コンサートの数日後、中野は靖恵に手紙を出した。
手紙だけではなく、中野は靖恵に会いに行った。

靖恵の会社が引けた後、赤坂見附で落ち合った。
そこから、外堀通を虎の門へと歩く。
溜池からアメリカ大使館に折れ、ホテルオークラの庭に面したラウンジで向かい合って二人はコーヒーを注文した。
とりとめもなく、話しははずんだ。
中野は、強いて千尋のことには触れなかった。
靖恵も、そのことを切り出さなかった。

ホテルオークラから虎の門まで歩き、地下鉄で新橋へ出た。
新橋から京浜東北線に乗り換える。
電車は空いていたが、二人は立ったまま手摺につかまり向き合った。
「どうしてですか・・・？」
靖恵は問いかけた。
「・・・・・・・・・・・・・」
中野は答えられなかった。
沈黙が続いた。
「・・・・・・・・・・・・・」
靖恵は中野の首筋に視線をすえ、いつまでも見つめ続けている。
中野は靖恵に、うまく説明できなかった。
もし話し出したとすれば、今以上に靖恵を傷つけてしまいそうだった。
千尋とのことも、絶対ではなかった。
千尋の両親を説得するには、絶望的でもある。
中野もまた、最も困難な道を選んでいた。
しかしそれ以上に靖恵は、たった今の絶望を味わっていた。
靖恵は中野の首筋を見据え、沈黙が続く。
「・・・・・・・・・・・・・」
靖恵は鶴見駅で降りた。
二人は無言のまま、駅のホームと電車に立った。

＊　＊　＊

中野と会ってからの数日間、靖恵は思いあぐねていた。
中野へ手紙を出そうか、出すまいか、靖恵は大いに迷っていた。

「もう会う機会がないかもしれないけど、
今のわたしの確かな心を、中野さんには分かっていてほしい！
わたしが手紙を書くまでもなく、
中野さんならきっと分かっていてくださるでしょう！
でも思い出は、時が薄れさせてしまう。
記憶の中だけでなく、実感として、
わたしが感動を取り戻せた青春の山、エヴェレスト。
その青春の山を教えてくださった、新たなわたしのスタートのためにも、
今わたしの真の心を、言葉に替えて伝えたい！」

そう思い、靖恵は中野へ手紙を書いた。

『
コンサートの日はご馳走になり、楽しい時を過ごさせていただきました。
わたしも大好きなスサーナのコンサートを、中野さんと共に聞けて楽しいひと時でした。
でもわたしの願いは叶いませんでした。
あなたが千尋さんと交際されているお手紙をいただいた夜、わたしは悲しみの中で眠ることができませんでした。
再び、真冬の冷たい風の中に舞い戻ってしまったようです。

この手紙を書こうか止めようか、とても迷いました。でも真実から逃げないで、真実と素直に向き合うことを教えてくださったあなただからこそ、わたしの本当の心を伝えておくべきだと考え、思い切って書くことにしました。もしここで、わたしの本当の気持ちを伝えておかなければ、一生悔を残すことになるだろうと思ったのです。

わたしは初めてエヴェレストを見に行き、あなたに会いました。
以来あなたに心を惹きつけられ、できれば「あなたと共に生きたい」と願うようになりました。
その思いは今でも変わらず、確かな心と信じています。
わたしは四年前、学生時代からの数年に及んだ恋に、愛ある別れをしました。
その後の長く苦しい日々の中で、苦しさや情熱は内に秘め、淡々とさわやかに生きて行くことを堅く、堅く、心に決めました。孤独は辛くとも、それから逃れる安易な道は避け、あえて孤独の中に身

を置くことにしました。

そうすればある時、自分を本当に理解し、そんなわたしを受け止めてくれる方に出会えるような気がしたのです。

喜びや悲しみ、愛情や憎悪など、世の中の現実をありのままに受け入れてしまうと、すべてが額縁の中の風景みたいに感じました。うつろで、平面的に見えてきたのです。

そうしているうちに私の心は醒めてしまい、一つ一つの物事に感動することが少なくなってしまったのです。

そして三年前、わたしが黙っていても分かってくれ、わたしの我が儘を許してくれた父が亡くなりました。その時でさえわたしの心は醒めており、父の死を淡々と見つめて送りました。

それから数か月して穂高に登った時、稜線を見つめながら突然に父を思い出し、とめどなく涙があふれてきました。

言葉交わさなくても包んでいてくれた、父の愛情の大きさが、その時しみじみと分かったからでした。

わたしにもまだこんなに感動できる心が残っていたのかと、自分でもびっくりしました。

このように、日常の物事に対する感動が少なくなってしまったわたしにも、山に分け入った自然の美しさの中では、細やかに感動する心を取り戻すことができました。

そんなわたしが初めてエヴェレストへ向かった旅で、偶然あなたと会うことが出来ました。

エヴェレストの真下、ディンボチェのテントの中で淡々と、遭難の様子や、山登りを通した新しい世界への希望と生き方を語ったあなた。

静かな笑顔の中にも、本当は苦しみや悲しみがたくさん詰まっている人間の真実、あなたの心を感じた時から、わたしの心は惹きつけられてしまったのです。

真実は、心が伴わなければ本当に分からないのですね。そして心の断片は、言葉によって伝えることもできます。言葉や行動でうまく伝えることができない、わたしの心を察して下さるのは難しいことだったと思います。

でもあなたなら、わたしが話さない部分、表現できない部分までも、繊細に感じ取って下さるような気がしていました。そんな優しいあなたが側にいる生活は、どんなに素晴らしいことだろうと、以来ずっと思い描いていました。

あなたの優しさと強さは、あなたが様々な辛さや悲しみに耐えて、今この時を精一杯生きようとする姿が育んだものなのですね！

誕生プレゼントのコーヒーカップは、わたしが数年前に辛かった時、真冬の京都を一人旅して買いました。雪に包まれた京の都で、あのコーヒーカップの深みのこもった藍の色を見つめていると、とても救われる思いがしたのです。

藍は冷たい色ですが、真に強い心とはどんな冷たさにもくじけない、秘めた忍耐の心なのですね！

あの藍色に包まれた清水焼の陶器には、秘めた情熱が焼き込まれているようで、わたしは見つめているだけで心が安らぎました。

エヴェレストの、藍色の空もそうでした。
だからこそあなたが生まれたその日のプレゼントとして、あなたに使っていただきたかたのです。

でも不思議ですね！
先日あなたにお会いし、楽しくお話していると、友達でもなく、恋人でもなく、満ち足りた新鮮な空気のように思えていました。
あなたとコーヒーを飲みながら、旅や山や哲学の話をしていると、わたしの心はとても安らいでいました。
安らぎはただそれだけであるのではなく、その裏側には激しい自分との闘いがあるのですね。
だから、あなたと飲むコーヒーには、特別な味わいがあったのです。
あなたはわたしが知らなかった冬山や、ネパールや、エヴェレストの位置付け、森本哲郎の哲学本など、わたしの新しい世界を開いて下さったのです。
あの真冬の赤岳も、あなたと一緒だったから、あんなに安心して登れたのですね！

五月の連休は、穂高へ一人で出かけてみようと思います。
あなたに教えていただいた自分なりの山登りを通して、わたしの心を見つめ直してみることが、これからのわたしの人生にふさわしいと思っています。
そしてもしも、もしも・・・、
いつの日にか、エヴェレストの頂きに立てることを夢にみながら！

千尋さんとの幸せを、お祈りいたします。

奥田　靖恵

『

6　障害をもって生まれた子

十月に入り、中野と千尋は千尋の実家を訪ねた。
すでに三ケ月前から千尋は兄姉に話し、両親にも切り出していた。結婚の意志が固いことや、中野のプロフィールを話していた。
話せば話すほど、両親の反対、兄姉の反対は大きくなった。

両親は身構え、父親は羽織姿で威厳を示していた。
それでも中野を、奥の広い居間に通した。
大きなテーブルを挟んで父親と中野は向かい合い、母親と千尋はテーブルの横についた。
中野は両手を畳みについて切り出した。
「千尋さんとの結婚を、なにとぞお許し願いたくて参りました」
「おおよそは千尋から聞いたが、娘をやるわけにはゆかない。
だが、話も聞かない！と言われると、世間にも顔が立たない。
話だけは聞こう」
千尋の父は、威厳を込めて答えた。
お茶だけは用意されていた。
しかし中野は、お茶に手をのばさなかった。
お茶を飲むほどに大胆ではなく、彼の神経は繊細だった。
「千尋は小さい時から手塩にかけてきた。
屋敷の川にはまって溺れた時も、川に飛び込んで助けたこともある。
男兄弟は大学を出ていないのに、女の千尋には大学まで出させた。
そんな娘を、はいそうですかと、簡単にやるわけにはゆかない。
それより、財産が目当てなのかね！」
「お父さん、そんなこと言ったら、中野さんに失礼でしょう！
よく知らないうちから！」
千尋は中野をかばい、父親に反撃した。
「いえ、財産などいりません。
身体一つで来てもれえることが私の理想です」
「しかし現実は、そんな甘い考えでは上手くゆかない。
もっと、生活基盤の安定を考えなくてはいけないのではないのかね」
「確かに、話しとしては甘いかもしれません。
私は一度離婚しています。
財産もありません。
学歴も、高校までしかありません。

今は自営で設計事務所をやっています。
ですが、いろいろな体験をしてきたからこそ、千尋さんと一緒にやってゆく自信があります。
ぜひ千尋さんを下さい」
「一度離婚していることは千尋から聞いている。
子供はいなかったのかね？」
「ええ、子供はいませんでした。
子供がいたら、離婚しなかったと思います」

「・・・まったく、おまえという子は・・・・！
・・・おまえという子は・・・・！」
小さく呟き、かたわらの母親は涙顔になっていた。

すでに予想された話しであるから、中野は冷静で落ち着いていた。
かたわらの千尋もすでに心を固めていたので、落ち着いていた。
しかし全員の顔は、固くこわばっていた。
農家の夕食（ゆうげ）は早い。
夕食にはまだ少し早かったが、父親は言った。

「娘をやるわけにはゆかないが、訪問してきた客に食事もふるまわないと言われると、世間様に笑われる。
簡単だが、食事をとっていきなさい」
「お勧めはありがたいのですが、このような話しの中で、食事は喉を通りません。
今日は遠慮させて戴きます。
私たちの意志は固く、千尋さんは家を出る覚悟もしています。
しかしそうならないよう、少しでもご理解して戴きたくて参りました。
話しだけで簡単に分かって戴けるとは思いません。
これからの態度が大切と思っています。
今日は初めてお目にかかり、私というものの印象が分かって戴けたらと思います。
これから幾度も説得に伺いたく思います。
なにとぞ、よろしくお願いいたします」
中野は、はっきりと答えた。

「よりによってどうしてうちの子が、十才年上の再婚相手になど・・・？」
千尋の家族、全員の思いであった。

千尋と中野の決意の固さと、説得の努力が続いた。
中野の父親や、中学校の恩師も千尋の実家を訪れ、説得に加担してくれた。

七十二才になる中野の父親は元気であったが、息子と二人だけで遠方へ出かけたのは、これが生涯最初で最後であった。

明治生まれの中野の父は、大正から昭和にわたる庶民の貧困な生活環境、戦争、敗戦の困難な時期に、息子にかまっている余裕はなかった。

それだけに、いろいろと失敗を重ねながらも、一生懸命生きている息子の幸せを願って動いた。

＊　＊　＊

三カ月後、とうとう千尋の両親は仕方なく折れた。

本当に、仕方なくであった。

「このまま反対を続ければ、千尋は家を出て行くだろう。

うちの長男と次男も、大学は出していない。

中野くんも人間は真面目で誠実そうだ。

まったく親の期待通りにゆかず情けないが、本人たちに任せるしかないか・・・」

千尋の父はしぶしぶと、本当にしぶしぶと同意せざるを得なかった。

母も同じ気持ちであった。

＊　＊　＊

中野は千尋の両親が反対する気持が良く分かっていた。

だからよけいに親孝行しなければと思い、結婚の後、幾度も旅に連れ出した。

千尋の両親と中野の父親とともに、三浦半島、八丈島、四国巡り、上高地から乗鞍岳、黒四ダムから立山、北海道は礼文島・利尻島・稚内と、ゆったりした三泊から五泊の旅であった。

中野の母は中野が二十五才の時に亡くなっていた。

戦争と戦後を苦労した母であり、その苦労に報いられない寂しさが残っていた。

その代わりとして、中野の父親の面倒をみている兄嫁を、上高地へ連れていったりもした。

中野と千尋は新婚旅行をネパールへ出かけた。

その翌年の夏、スイス・アルプスへ出かけた。

子育て前の登攀として、マッターホルンとアイガーを登った。

千尋は県立看護短期大学で教員になった。

看護婦の実践は短期間であったが、大学では看護教員養成課程で学んでいたから、看護婦養成の

教員としては適任でもあった。

中野は自営ながらも設計が忙しく、主に公共建築物の電気設備設計を続けていた。

結婚から二年後に、長男が生まれた。

千尋の両親や兄姉ともすっかり打ち解け、幸せな日々であった。

八年後には次男が生まれ、十年目に三男が生まれた。

二番目の子供は女の子だったが、臨月を前に、死産となってしまった。

それからは、お腹にいる時から大学病院で検診を受けるようになっていた。

次男は無事生まれた。

三男がお腹にいる時であった。

妊娠八か月のスクリーニングでの断層写真には、ドーナツ状に輪切りされた三男の頭部が、何枚も並べられていた。脳の中央部、半分程度が白くなり、正常に形成されていないことが判明した。

脳室拡大、一般で言う、「水痘症」であった。

「最悪は植物状態、どの程度になるかは、生まれてみなければ分かりません」

大学病院の医師は断層写真を見せながら、千尋に言った。

「あなたは看護婦さんだから分かりますよね！

大丈夫ですよね！」

産科の看護婦は、当然といった顔付で千尋へ言った。

「どうしよう・・・

わたしだって一人の母なのに・・・」

千尋は衝撃を受けていた。

真っ暗な気持ちに打ちしおれ、歩くことがやっとだった。

やっとのおもいでタクシーに乗り、家へ帰った。

「夫になんて言おうかしら・・・

八か月の今では、堕すことも出来ない・・・」

それでも夕方には、次男を保育園へ迎えに行かなければならず、一人沈んでいるわけにはゆかなかった。

その夜千尋は、医師から言われた通りを中野へ話した。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

中野も衝撃を受けていた。

街で見かける障害を持った子供と父親の姿に、イメージを重ねていた。

しばらくして、

「でも、今更どうにもならないのだから、そっくり受け取るしかないよ。

例え植物状態で産まれたとしても、出来ることを最大限やってあげよう。

勿論やりたくても、できないことだってたくさんある。
できることを、できるかぎり、精一杯やってあげよう。
現実から逃げようとしないで、現実をそっくり受け止めて、できることをする。
それでいいじゃないか。
二人の子供なんだから、一緒に責任を負って、できることをやろう！」

中野はヒマラヤ体験の挫折から学んだ、あるがままをそっくり受け入れる受容の精神（こころ）をもって、直に腹が決まった。
「ありがとう！
わたしもあなたと一緒に、できることを、できるかぎりやってみます」
千尋は夫の静かな、強い心に触れ、深く心が落ち着いた。

三男「萌（もゆ）」は元気に生まれた。体重が標準よりちょっと少ないだけである。
「うわー、かわいい！」
七才、小学二年生になった長男は、看護婦さんが連れてきた生まれたての弟を抱いた。
「オジゾウさんみたいだね！」
「とっても穏やかな顔をしている！」
中野は長男に続き、息子を抱いた。
外形に異常はなく、柔和な顔立ちであった。
ベンチに座ると、二才になった次男が弟のほっぺに触った。

＊　＊　＊

三男「萌（もゆ）」は医者の見立てからは大きく異なり、とても元気に育った。
しかし断層写真が示した通り、発育の遅滞はいかんともしがたかった。それでも、普通児の半分程度のスピードで発育した。

千尋は四月一日から講師昇格が決まっていた県立看護短大を、三月三十一日で退職した。
丸十年が経っていた。
以来、看護学校の非常勤講師、療護施設の非常勤看護婦をしながら、萌の発育の支援を続けた。
一才になった萌は、一般保育園に入った。
保育園で同じ年ごろの子供たちとの交流は、親の愛情とは異なった刺激を与える。

親の関わりとは違った面で、子供どうしの発達をうながす。言葉が通じなくとも、感覚で反応し合う子供たちの世界で、萌は魂の形成を始めていた。

千尋は専門書や雑誌からも、さまざまなリハビリ情報を学び、手探りで実践していた。

そんな中で萌を中心とした、人の輪の広がりができてきた。

人はヒトを呼ぶ。

障害児を専門とする小児科医師、言語療法士、気功師など、多彩な指導を受けた。

音楽療法、ボイタ法等、リハビリも様々に挑戦した。

萌はすこぶる活発で、活動的だった。声も大きく、自己主張もよくした。

その精気ある生活態度から、中野は思っていた。

「きっと萌は生命力があるんだ！」と。

深夜帰宅した蒲団の中に、穏やかな息子たちの寝顔を見ると、中野はホッと安堵した。

萌は外遊びが大好きで、二才年上の兄・有（ゆう）と一緒によく遊んだ。

兄の有も面倒見がよい。

保育園から自宅まで、いつも弟を気づかっていた。

家族でも、公園、遊園地、キャンプへと、萌を中心として行動できる屋外へ、毎週のように出かけていた。

萌が三才になった四月、千尋は発奮して大学院に入った。

それまでの看護から目を転じ、福祉を専攻した。

私立T大学・社会学研究科、社会福祉専攻は、福祉の道ではその名を知られていた。

千尋は看護の特性を生かし、障害者を家族の中に受け入れる受容について調査、研究を始めた。

昼間は大学院や面接調査を行い、夕方保育園から萌と有を引き取って家に戻った。

小学五年生になった長男・泉（いずみ）は学童保育で学校の後を過ごし、友達と連れだって、夕方家へ帰って来た。

中野は仕事に追われ、家にいることが少なく、夜はほとんど母子家庭となった。

千尋は夫が早く帰ってきて、子供たちの相手をしてほしかった。しかし眠る間も少なく、頑張る中野をみると、自分が大学院へ行かしてもらっている手前、何も言えない。

中野も早く帰りたいとは思っても、独立自営の設計稼業は極めてハードな下請業界だった。

忙しくても仕事を断れば、次の仕事がもらえない。

それでも少しずつ断ってもいたが、バブル期の建設業界は極めて多忙だった。

山登りで鍛えた体力にまかせ、中野は徹夜仕事を頻繁にこなした。

それは家族の生計を保つ手段でもあった。

三カ月にわたる徹夜残業続きの末、連続十日間、一日一時間の睡眠をとっただけで設計を仕上げたのが、最もハードな時だった。

中野はそれをヒマラヤに例え、エヴェレストを登るように、それで身体が駄目になっても仕方ないとさえ思っていた。

人類が初めて登った八千㍍の山は、ネパール・ヒマラヤのアンナプルナである。
一九五十年、フランス隊の隊長、モーリス・エルゾーグとルイ・ラシュナルによって登られた。
登頂の代償として、エルゾーグとラシュナルは、手足の指を凍傷で切断せざるを得なかった。
エルゾーグの代償は特に大きく、再びアルプス登攀ができないほどであった。
エルゾーグはアンナプルナ遠征を語ったその著書の終りに、遠征の価値を次のように述べている。

『アンナプルナ、われわれがビタ一文もらわなくても行ったであろうそのアンナプルナこそ、われわれがそれによって今後も生きる宝なのである。この実現によって一ページがめくられ・・・新しい生活が始まる。人間の生活には他のアンナプルナがある！』　（＊1）
そしてフランスで、スポーツ大臣にまでなったのがモーリス・エルゾーグであった。

「山ではちょっと油断すると簡単に死んでしまうが、設計の仕事の中では、どんなに無理をしたところで、そう簡単に死ぬわけがない」
中野はヒマラヤ登攀を離れ、睡眠を削り続けて設計する仕事の中に、『人生における、もう一つ別なアンナプルナ』を思い描いていた。
山に登らぬ街の生活の中にも、人生には八千㍍登攀に匹敵する生き方がある・・！

（＊1）「処女峰アンナプルナ」近藤等・訳（白水社）

＊　＊　＊

萌が三才になったときであった。
それまで保育園では一階の室を使っていたので、階段を登らなくてよかった。しかし三才からは二階となり、階段を登らねばならなかった。手摺につかまり、ゆっくり登れば一人でも登れる。
しかし園長は千尋に言った。
「萌くんは今度スミレ組になり、二階の室になります。
園としてよく検討したのですが、万が一の時に責任が負えませんので、萌くんを受け入れることができなくなりました。
どうかお父様にもお話しになって、ご了解願いたいのです」
唐突な話しにあぜんとしながら、千尋は家に帰って園長の話しを中野へ伝えた。
「よし保育園に行って、もう一度園長と話し合ってみよう。
いつ会えるか、保育園に都合を聞いといてね」

中野は言った。

二日後、千尋と中野は保育園に園長をたずねた。
園長のほかにも六名の保母が同席し、萌の担任はうつむいて座っていた。
「主任保母を中心に、いろいろ検討してみましたが、園としては責任をもってお預かりすることができないという結論に至りました。
誠に申し上げにくいのですが、萌くんをスミレ組へ受け入れることができなくなりました」

「今まで担任の先生を中心に萌を見て戴き、そのことには大変感謝しています
しかし今回の措置については、はい、そうですか、と引き下がるわけにはゆきません。
萌は脳に障害をもってうまれ、普通児のペースでは発育できません。
しかし萌は元気に、一生懸命生きています。
千尋は短大の教員をやめ、萌の訓練やリハビリに通ってきました。
でも、それだけでは親子の関係をまぬがれません。
これまで保育園の中で、友達との関わりが、親子ではけっして得られない発達を促してきたことも事実です。
それはまた、ほかの園児にとっても貴重な体験ではないかと思うのです。
園の管理面からすれば、階段の安全性確保が難しいことはよく分かります。
子供のことだから、だれかが無意識で萌を押してしまい、階段をころげ落ちるかもしれません。
危険は承知の上ですが、もしもその時は、運命と思って裁判に訴えたりはしません。
もしもの時のリスクより、保育園の友達どうしの関わりから得る発育のほうが、萌にとっては前向きな生き方になります。
どうかもう一度、考えなおして下さい」

中野は保母たちを前に、真剣に訴えた。
「そう言われましても、やはり万一があると園としても困ります。
ご両親が了解されているからだけでは、公立の園としては済みませんから」
「階段だけが問題ならば一年上のスミレ組にのぼらず、現在のタンポポ組での留年でも結構です。
親として、同じような年齢の友達との関わりが、親にはできない発達を促してきたことからのお願いなのです」
「でも普通のご家庭は、お母様が仕事に出ないケースが多いと思いますが、保育園に預けてまでお仕事をなさりたいのでしょうか？」
「それについては、萌とは関わりなく私に持論があります。
私は女性が家にこもり、社会との関わりに無関心になるのは反対です。
女性や男性の区別なく、人は社会と関わって生きています。
男性ばかりでなく、女性も社会とリンクした職業を持ってしかるべきと思っています。
だから千尋は長男、次男をこの保育園にお願いし、短大の教員として十年間仕事をしてきました

。

今回短大をやめたことだって、本人にしてみれば、とても悔しかったことでしょう。

大学で同級だった親友は、同じ短大で一年前に講師へ昇格しており、順調に大学研究の階段をのぼっています。

それに比べ、千尋は講師昇格が決まっていたのを捨ててまで、萌の療育を選びました。

看護学校などの臨時講師をしながら、本流から外れた、アウトサイダーの道を歩まなければならなくなったのです。

自分の欲望を捨てることも、我が子を思えば、本人としてたいしたことではないかもしれません。

しかし他人がそのことに気づいてあげれば、本人の心はどんなに和むことでしょう。

夫婦は他人の始まりです。

まず私が、そのことを理解しなければならないと思っています。

そして萌だって、一日中お母さんと過すばかりでなく、いろいろな友達との交流から刺激を受けて反応することで、萌の発育にとっても良い刺激になることが、これまでの保育園生活からも実証されているからです」

「しかしこの措置は保育園だけでなく、福祉行政の担当とも相談して決めたことなのですから、ぜひ理解していただきたいのです。

行政にとっては予算があり、萌くんの安全に配慮して、保母の増員ができないのです。

一クラス定員二名の保母枠で、萌くんばかりに保母を付けることも出来ません。

ほかにも十四名の子供がいますし、その子たちを一人の保母では見られません」

「保母さんが、萌に張り付かなくてもよいではないですか。

萌は階段の登り降りや、食事の時、トイレの時は手がかかりますが、そのほかは特に手がかかるわけではありません。

絵を描いたり、折り紙を折ったり、普通児と同じにはできませんが、それなりに萌は楽しんでいます。

上手にできなくても、萌は萌なりに楽しんでいるのです。

萌が出来ないことを、ほかの園児が手伝ってくれることも、手伝ったその子にとっては、友達のために役立つことを学ぶんじゃないでしょうか。

そのような関わりの中で、これまでも萌は、親子にない発達をしているのです。

一階のタンポポに留年でいいですから、ぜひ保育園の仲間と一緒において下さい」

いくら説得しても、千尋と中野はその場の結論が覆らないことを知った。

「ここでいくらお願いしても、ただ言いっ放し、聞きっ放しのようですから、市の福祉局へ直接話しをしてみます」

千尋は『市長への手紙』の制度を活用し、この事を訴えた。
さらに千尋と中野は保育園父母会々長を伴って、福祉局の担当課長に面会できる約束がとれた。
しかし揃って市役所に出向くと、担当課長は急用が出来たといって、係長が応対に出た。
中野は保育園で話した内容を繰り返し、文書で要望事項を提出した。
行政に携わる者が、言葉だけでは何も解決してくれないことを、中野は良く知っていた。
福祉課の係長は愛想よく話しを聞いている。中野は少し不安になってきた。役人の特性として、話しは聞くが実行しないケースが多い。
そこで中野は付け加えた。
「私はきちんと市民税を払っています。
加えて、小さくて一人だけの会社ですが、法人市民税も払っています。
文書の回答はいりませんから、所轄福祉事務所へ措置の変更をすみやかに実施するよう、ぜひともお願いします」
それから間もなく、この要望は実施された。
萌は留年のまま一階のタンポポ組に残ることができた。

＊　＊　＊

萌は五才になった。今度は最年長のカブト組に入った。
階段を登った二階の、一番西側の室であった。
「モユくん、オジイチャンと来たの？」
朝の保育園へ中野が送って行った時のことである。
萌の友達の女児が聞いた。
「トウサンだよ！」
「おむかえはカアサン」
萌は答えた。
リハビリ訓練により、萌の身体と知能は普通児の三才半程度の段階であった。
手足の指先と、膝関節の動きがぎこちなかった。絵を描いたり、折り紙をすると、細かく指先を動かせない。細かな部分は保母や面倒見のよい女児が手伝い、真っ直ぐな部分は自分でやった。左足を引き摺り気味だが、かけっこも出来た。
おたのしみ会での、クラス発表劇にも参加していた。
仲間にくっついて、それなりに遊戯をこなし、発声もしている。
「もゆ、おおきくなったら、なにになるの？」

「もゆ、でんしゃの　うんてんしゅさんになる。
とうさん　のせてあげるね！」
「うん、ありがとう。
とうさん、かあさん、にいちゃんたちも、みんなのせてね！」
「うん、もゆ　みんなのせてあげる！」
おもちゃの電車や車が大好きな萌は、プラスチック・レールの機関車トーマスがお気に入りだった。有にいちゃんからのお下がり、ミニチュアカーを床に置いて押え、「ウーーー！」と声をだし、しばらく唸り続けるのが得意だった。

八月の一番暑い日だった。
その日、萌は朝から気持ちが悪いといってぐずっていた。
蒲団で吐き、トイレで下痢の便をしていた。
「昨日食べたカレーがあたったのかしら？
でも他の人は下痢してないし？」
千尋は、食あたり程度に軽く考えていた。
「水分がだいぶ出てしまったから、脱水症に気をつけなくっちゃ！
それにしても、ちょっとぐったりしているので、今日は病院へ連れてってみよう！」
千尋は一階の居間に、タオルケットを敷いて萌を横たえた。
「萌、お水のむ！」
「うん、アイス・コーヒーのむ！」
萌は薄口で甘い、アイス・コーヒーが好物だった。
千尋はアイス・コーヒーを作り、萌に飲ませた。
萌は一口飲んだだけで、ふたたびタオルケットに横になった。
千尋は病院へ行く着替えのため、二階へ上がって行った。

萌の横には兄の有（ゆう）がいて、テレビの幼児番組を見ている。
縁側では、二才になるコリー犬のスカイが、萌を気にしながら室内の様子を伺っていた。
しばらくしてスカイは、
「クオーン・・、クオーン・・」
と悲しそうな低い声をあげた。
「お母さん！」
「萌が息してないよ！」
有は大声を立てた。
萌は眠ったように安らかな顔をしたまま、ぐったりとして横たわっている。
千尋は階段をかけおりてきた。
「有、おばちゃんちへ行って、救急車をたのんできて！」

子供三人が、第二の母として育ってきた、隣のおばちゃんである。
有は理解力が優れた子で、母の一言ですぐに叔母ちゃんちへ走って行った。
千尋は萌に心臓マッサージやマウス・ツー・マウスの人工呼吸を続けていた。
頭の中は真っ白だった。

中野は朝早く家を出て、一日中埼玉県内の学校施設を見学していた。
これから設計するS市の中学校体育館のために、同じ県内の既存施設を見て回っていた。
その日は特別に暑く、中野が持っていたハンカチでは、全く役にたたない。
全身汗びっしょりになり、三校を回った。

夕方東京駅までもどり、家に電話を掛けた。
「いま東京駅、これから帰ります」
中野に連絡が取れず、探し疲れていた千尋が電話口に出た。
「留守番電話聞いた？」
「いや、聞いてない！」

「萌が死んじゃった」

「えっ！」

中野は全く予期せぬ言葉の衝撃で、目の前が真っ暗になった。
「何時ころ」
「八時半ころ」
「救急車で聖マリへ行ったけど、駄目だった。
司法解剖も終り、葬儀屋さんが段取りしてくれて、萌は棺にいます。
おばあちゃんや、おねえちゃんも来てくれています」
萌の死の苦闘から九時間が過ぎた千尋は、その結果を受け止めた、静かで沈んだ声だった。

「すぐ帰る！」

中野は空を飛んで帰りたかった。
電車のスピードに苛々しながら、思いもよらぬ出来事に顔の色はなく、電車の座席に俯いて、仮想と現実が入りまじっていた。
経過を知らず、結果の重さと無念な心の受け止めに、中野の頭は混乱した。
足は鉛のように重く、呼吸は浅く、心臓は早鐘を打っていた。

八千メートルの、エヴェレスト頂きの遥かかなたに向っているような、
張り裂ける、心の叫びを胸に、
家路の坂道を登っていった。

7　神々への扉

靖恵は八千八百㍍、ヒラリー・ステップの出口で、もう十五分ももがいている。
酸素を吸いながら登っているとはいえ、垂直な岩場の乗っ越しに、もう一つ力が足りなかった。
下で順番を待っていたアメリカ人ガイドのリチャード・ムーアが登ってきて、ショルダー（肩）で靖恵を押し上げてくれた。
やっとヒラリー・ステップを越えると、エヴェレスト山頂は目の前にあった。
あと、五十㍍。
恐竜の背びれのような雪庇の南側に張られたロープに、ユマール（登高器）をからませる。一歩歩いては十呼吸し、また次の一歩を踏み出しては十呼吸した。
さらにもう一歩！
そしてもう一歩！
果てしなく、同じ動作を繰り返す。
靖恵は時間の感覚を失っていた。
もうなにも障害はない。
一歩　・　・　・
そしてもう一歩。

早鐘を打つ心臓と荒い呼吸、毎分二㍑で酸素を吸っているとはいえ、この程度の酸素補給量では、八千㍍直下を無酸素で登るのと、同じ苦しさであった。
毎分四㍑に酸素供給を上げると、もう少し楽になる。しかしエヴェレスト南東稜では、毎分四㍑の酸素を吸ってしまうと、酸素ボンベの供給が困難だった。
それゆえ、サウス・コルの最終キャンプを出発する時、一人二本の酸素ボンベを背負い、もう一本はシェルパによって南峰(8750m) にデポジットされる計画だ。
酸素不足は脳の活動を低下させ、思考や身体の動き、時の流れも、スローになってゆく。

あとちょっと！
あと一歩！
遥か彼方にあった夢の頂が、
今、そこにある！

靖恵は周囲に列をなす登頂者には目もくれず、頂の一点に精神を集中していた。
一歩、さらにもう一歩・・・、
風に凍った硬い雪をふみしめて登った。

一九六十年、第三登として中国隊が頂上にセットした、古ぼけた測量用のアルミポールがあった。
登ろうにも、もはやどこにも高いところはなかった。
先に登ったシェルパが立てた、チョルテン（祈祷の旗）が強風に打ち震えている。
靖恵は全ての山々を眼下に見下ろした。
ここは地球第三の極地、
エヴェレスト山頂、
八千八百四十八㍍。

ただひたすら登ることに集中し、
何も考えずに到達した夢の頂で、
靖恵の脳裏はぼんやりしていた。
酸素不足は思考も遅らせ、
行動も遅らせた。
午後二時だった。

「ああ、やっと終ったわ・・
エヴェレストに初めて出合ってから・・十八年
とても長かったようで・・
あっという間の気もする・・
夢・・・！
夢・・・！
現実（うつつ）・・・！
ここは・・・？
ここは本当に、エヴェレストの頂上・・・？
・・・・・・・
それにしても・・
疲れた・・
ここに座って眠れたら、どんなに幸せでしょう！
・・・・・・・
・・・・・・・
でも帰らなくてわ！・
わたしを待っている人がいる。
さあ、もう一度立ち上がって、
頂きのかなたへ歩み出さなければ！・・・
」

＊　＊　＊

初めてエヴェレストに出合ってから、十七年が過ぎていた。
エヴェレストの麓、ディンボチェのテントで聞いた山登りとその文化。
この十七年、山を通した新たな自分への探求と、再発見を積み重ねてみた。
靖恵はヒマラヤンニストではなかった。
アルピニストでもなかった。
クライマーでもなかった。
しいて言うならば、ワンダラーだった。
人生の『夢の彼方』をめざし、
一歩一歩、日々努力を積み上げてきた。
永遠の夢の彼方をめざした、
人生のワンダラーだった。
永遠の夢、
神々の峰、
惑星、地球の最高峰。
ついにたどり着いた、
エヴェレストの頂(サミット)。
神々への扉をたたき、
次なる人類第四の極地、
人の心への扉を開いた！

カモメのジョナサンが、神の世界で新たな自分を再発見したように、靖恵にとってもこのエヴェレストが、新たな自分に生まれ変わる折り返し点であった。
まさか自分がエヴェレストの頂に登れると、靖恵は思いもしなかった。
行けるところまで登ろうと思い、まったく気負はなかった。
しかし、あまり苦もなく登れたアコンカグア(6960m) の様子から、
「ひょっとして、わたしにもエヴェレストが登れるかも知れない」
と、密かに期するところがあった。
それがいざ、ようやくサウス・コルの第四キャンプ(7980m) まで登り着いてみると、あとひと踏ん張りで頂上へ行ける気分になっていた。
「夢や憧れは思うだけでなく、
行動で掴み取るものなんだわ！」
そんな思いに集中していた小柄で華奢な靖恵に、大男ばかりの仲間のクライマーたちには
「靖恵は神がかっていた」
と写った。

＊　＊　＊

世界最強ガイドが組織する国際公募隊に六万ドルを支払い、靖恵は一人参加していた。
八ヶ岳から始まった靖恵のビッグ登山には、いつもガイドがいた。
最初は気の向くまま、ツアー登山に参加し、モンブランやキリマンジャロ(5895m アフリカ）を登った。
アコンカグア(6959m 南米)、マッキンリー(6194m 北米）に登頂してみると、もはや高さの関門はエヴェレストだけとなった。
エリブルース(5642m ヨーロッパ）までは日本人ガイドと登った。
しかしそれらのガイドは、冬のエヴェレストやアコンカグアの岩壁に消えてしまった。
山はプロ（ガイド）もアマ（顧客）も区別をしない。登山者の小さなミスが命取りになる。人間は不完全で、小さなミスを避け得ない。厳しい登山を続ける限り、やがてどこかの山で召されるのが、登山家の宿命でもある。

一九八十年代後半になると、スイスのアイゼリン・スポーツなどはヒマヤラ登山隊員をコマーシャル募集して編成し始めた。
それも一国内にとどまらず、広く世界を対象とした国際商業公募隊となっていった。

靖恵は、勤務する会社の国際ネットワークから、得意の英語でいろいろな情報を引き出し、アクセスすることができた。
ヴィンスン・マシーフ(4897m 南極）からは、アメリカのガイド会社が募集したツアーへ参加した。カルステンツ・ピラミッド(4884m オセアニア）や、このエヴェレスト(8848m アジア）も、同じアメリカのガイド会社が募集したツアーであった。

靖恵はツアー登山に抵抗はなかった。登山記録への意識もなかった。
ただ自分が、好きだから登り続けてきた。自分の夢を持ち、その夢に向かって、一歩一歩を歩いていた。
山岳界の動向や歴史に名を残そうとする欲望も全くなかった。
わずらわしい組織山岳会にも入らず、自分で働いたお金を使って、一人意のままに登ってきた。
著名なクライマーがガイドするツアーに参加し、確率の高い登頂をかちえていた。

ヨーロッパ・アルプスに発生した『近代登山』、その初期においては『ガイド登山』が主流であった。それは今もヨーロッパに、登山文化として継承されている。
マッターホルン初登頂者として知られるウインパーは、地元の山案内人カレルらにガイドされて登り、初登頂者として名を刻んだ。
日本人としてヨーロッパ・アルプスに名を残した槙有恒も、アイガー東山稜（ミッテルレギ山稜

）の初登攀には、地元ガイドを伴っていた。
ヨーロッパ・アルプスのガイド組合は発達している。
それを参考に、日本でアルパインガイド組織に着手したのは、一九七十年代であった。
その時代にヒマラヤ遠征していたのが、中野のダクラ南西壁である。

元来、エヴェレストに登ろうとするヒマラヤンニストは、ガイド付登山など行わなかった。
それもそのはず、八千㍍を超えるエヴェレスト登山は、顧客を支援、ガイドするほどゆとりを持った世界ではない。
八千㍍から上は『死の世界』と呼んで、自分の行動には自分の責任と判断で行動するのが登山界の鉄則になっていた。他人をガイドするどころか、自分のことで精一杯なのが、八千㍍から上の世界である。
それは重ねて、『死の世界』と呼んでいた。

事実八千㍍から上は『死の世界』である。
低い気圧は酸素分圧を減少させる。八千㍍で人が吸収できる酸素量は、平地（海抜ゼロ㍍）の約三分の一でしかない。
それでもほんの一握りの人間が一日奮闘して、サウス・コルからエヴェレストの頂上を往復することが出来た。
多くのヒマラヤンニストは酸素ボンベを使用して、八千㍍以下の高度に相当した酸素補給をおこないながら登った。
だから酸素ボンベが『空になる』ことは、即、生命に関わる『死の世界』へと移行するのである。
動脈流を通し、酸素が細胞にゆき渡らないと、すぐさま筋肉や脳は機能を麻痺し、やがて壊死となる。
それゆえ、ほんの一部の人を除いて、多くのクライマーは酸素ボンベから流れ出した純酸素と大気を混合（レギュレータ機能）した空気を吸うのである。
高所と酸素の関係は、航空機の開発と研究が先にあった。
日本の低圧実験室は自衛隊や国立医科系大学にあるが、それらの施設を、高所登山の研究や応用に活用したのは一九七十年代からであった。
その頃中野も、国立・S大学の低圧実験室に入り、低圧環境の擬似体験をしていた。
八千㍍に相当した酸素分圧の中では、あっという間に思考が低下し、時間の前後が定かでなくなった。目を見開いても、目の前が次第に暗闇になってゆく。「鳥目」である。

靖恵たちが使用したロシア製酸素ボンベは、毎分二㍑供給しながら七時間使用できた。
最終キャンプのサウス・コルから頂上までは、約十二時間から十三時間かかる。さらに下りに約六時間かかると、酸素ボンベの合計は三本必要となる。
これを毎分四㍑にあげてみると、登攀スピードは増すが二倍とはならず、消費スピードは二倍となって不足となる。

靖恵たちは酸素ボンベの扱いに慣れぬため、酸素供給を計算して調整出来なかった。そこで常に毎分二㍑供給するように、レギュレータは調整されていた。

一九五三年、ヒラリーとテンジンによってエヴェレストが初登頂されて以来、一九八十年代初期に百登以上を数えた。

サウス・コルから登る『南東稜ルート』は別名『ヤクルート』とも呼ばれ、最もポピュラーなルートであったが、それでもまだ、『選ばれた者』にしか登頂の機会はなかった。

一九八五年、登山経験がほとんどなく、五十五才になるアメリカ・テキサス州の富豪、デイック・バスによって登られたことにより、ヒマラヤ登山は大衆化への道を一挙にたどった。

デイック・バスは卓抜した若手ガイド、デイヴィッド・ブリーシャーズの案内により、エヴェレストの頂に立った。

さらにそのことが、『セヴン・サミッツ』最初の達成者ともなった。

このことが世界に流され、登山の大衆化に拍車がかかったのである。

日本ではかって、深田久弥が『日本百名山』を提唱した。

その『日本百名山』への登頂ブームも、デイック・バスの影響を受けたといえよう。

若者の間ではかって、『より高く、より困難』な山登りを提唱した『マンメリー・イズム』が広まっていた。これを日本の登山界は『アルピニズム』と訳した。

若者は日本の冬山岩壁登攀から、ヨーロッパ・アルプスの岩壁登攀へと向かい、さらにヒマラヤの岩壁登攀へ向かったのである。

中野がめざしたダクラ南西壁登攀も、やはりこの流れの後半に位置づけられる。

時を経て、さらに登山は大衆化を迎えた。

若年から高齢者へと、人の層もシフトしてきた。

登山の大衆化と、八千㍍以上の「死の世界」との競合は、現代登山のジレンマである。

靖恵にしても、八千㍍以上での「死の世界」の認識が、いま一つ不足していた。

高度障害は時間遅れでやってくる！

登ることができても、それまでの高度で受けた障害のダメージが、下降において発生する。エヴェレストの高度ではこの時間差は少ないが、障害のダメージから救えるのは酸素供給のみである。ボンベから酸素を供給するか、ただひたすら下山して高度を下げ、酸素濃度を増すいずれかである。

＊　＊　＊

「あなた、すごいわよ！

ほら！
靖恵さんがエヴェレストに成功したんですって！」
千尋が新聞を見せて驚いている。
「ええ・・！
本当！」
中野もビックリして、驚きの声を上げた。
「そういえばお昼のテレビニュースで、日本人女性がエヴェレスト・・・と言ってたけど、
ああまた誰かが登ったんだと思って、ほとんど関心なく聞き流していたんだ。
それが靖恵さんだったなんて・・！
いやー
それは凄い！」
「帰って来たら、サインをもらわなくっちゃ！」
ミーハーが嫌いな千尋も、興奮して言った。

靖恵から届いた年賀状には、エヴェレストに触れていなかった。まさか靖恵がエヴェレストに登るとは、中野も全く予期していなかった。
それだけに中野や千尋にも、エヴェレストは特別な山であった。
エヴェレストは、世界第二の高峰Ｋ２(八千六百十一㍍)や、第三の高峰カンチェンジュンガ(八千五百八十六㍍)とも違う。
人類のシンボル、地球第三の極たる『エヴェレスト』なのである。

エヴェレスト、
地球第三の極地、
遥かなる夢の、
神々への扉。

＊　＊　＊

午後二時半、靖恵は下降を開始した。
ガイドと繋がったロープはなく、自分の力で降りなければならない。まだ登って来るメンバーと交差しながら、ヒラリー・ステップの上部に立った。
固定ロープに下降器をセットし、ようやくヒラリー・ステップの岩溝を降りた。
一部岩が露出した、恐竜の背のような稜線を、固定ロープにユマールをからませ、ゆっくりと、ゆっくりと、慎重に下った。
下りの呼吸は幾分楽になった。しかし酸素ボンベは、もうほとんど空に近い。

すでに、午後三時半をまわっている。
「はやく南峰まで戻り、酸素ボンベを交換しなくては！」
南峰まで降りると、ガイドのリチャードが追いついて靖恵の酸素ボンベの交換を手伝ってくれた。
しかしボンベは軽く、圧力計は半分以下の残量しか示さない。
上ばかりを見て、登りで気づかなかった足下からは、灰色がかった雲が沸き上がってきた。
すでに南峰(8750m) から下は薄い灰色の雲に覆われ、粉雪が舞っている。
朝七時半に通過したバルコニー(8400m) は、もう見えない。
靖恵とリチャードは前後して、視界のきかない乳白な世界に踏み込んでいった。
ふくらみを持つ凍った尾根、左はチベット、右はネパールへと深く切れ落ちている。
雪の白さと、雲の白さとの区別がつきにくい。
チベット側に張り出した雪庇を踏み抜かないように、わずかに残る足跡を頼りに一歩一歩下る。

午後五時、バルコニーに着いた。
粉雪とともに吹上げてくる風は強く、辺りは薄暗くなり始めてきた。
ますます雪面と雲との見分けがつかなくなってきた。

バルコニーから右に折れ、緩い傾斜となったガリー（雪溝）を下っていった。
しばらくすると、ぐずぐずの岩が積み重なった上に、薄く雪がのった場所に出る。イエローバンドと呼ばれ、遠くからは黄色く見え、ぐずぐずの岩が水平に横断しているところである。
降りしきる新雪は、先行者の跡を消してしまう。
固定ロープはなく、急な岩の斜面にスリップしないよう、細心の注意を払って下った。

激しい上昇気流が厚い積乱雲となり、足元からかけ登って来た。降雪は益々激しくなり、吹上げてくる風は凍った雪粒をようしゃなくたたきつけてくる。
世界の屋根、エヴェレストの風は強い。風速は時速百㌔をゆうに超える。

岩に雪がのった急な斜面から、サウス・コルへと続く緩くなった雪の斜面に来た。
サウス・コルまで高度であと百五十㍍、ここで靖恵の酸素が切れた。
午後六時頃であった。
すでに辺りは暗くなり、それでも靖恵はがんばって、一歩、また一歩を踏み出した。
靖恵は、酸素が切れたことに気づかなかった。
これまでの登山体験で味わったことのない、激しいブリザード（雪つぶて)、激しいホワイト・アウト（濃霧で視界がきかない）の中を下降してきた。
限界まで体力を消耗した登頂。
すべてが、これまで靖恵の経験の外にあった。

地上八千㍍のさらに上、しかも初体験の高度において酸素供給が切れたということは、靖恵にと

っては重大な事態を招く。
しかも今、嵐の真っ直中にいる。

高所順応においては、初体験と二度目以上の体験との差は歴然とする。
しかも二度目以上だから確実かというと、それがまた異なる。
高所障害は身体の疲労度が大きく影響してくる。特に睡眠が、疲労度に関わっている。そして八千メートル上部とは、もはや人には順応できない、『死の世界』なのである。

緩くなった雪の斜面に、靖恵は座り込んでしまった。
酸素不足は意識を朦朧とさせ、現実と幻覚が入りまじってきた。すでに時間の感覚はない。エネルギーを使い果たしてしまった心身は、無気力となっている。目を開け、瞳孔を開いても、靖恵の網膜には何も写らなかった。
酸素欠乏による鳥目状態となり、瞳孔は開いてもその視野は暗闇の世界となっていた。
もはや自力では動けない。動きを止めると、たちまちに全てが凍りついてしまう。
ガイドのリチャードが肩を貸し、ぐったりとした靖恵を引きずって、第四キャンプの方向へよろよろと下っていった。

午後七時、辺りはもう真っ暗となった。
間近のはずの第四キャンプは、一向に見えてこない。吹き上げる嵐は益々激しさを増し、ライトをつけた足元がやっと見えるほどであった。
その頃、前後していたガイドや顧客、シェルパらは集団となって、皆よろよろとキャンプめざして歩いていた。
靖恵はガイドのリチャードに引かれていた。
目差す方向から吹き上げるブリザードの嵐に立ち向かえず、サウス・コルの広い雪面を東へと迂回してしまった。歩くうちにキャンプに行き当たることに期待を繋ぎ、ココとおぼしき方角に向かい、集団はさまよった。
すでに全員の酸素は切れている。ブリザードの嵐をよける場所もなく、広い雪の台地にテントを求めて、よろよろと二時間もさまよってしまった。
シェルパならテントの方角を知っているだろうと先頭に立ててみたが、シェルパ自身も方角を見失っていた。
ガイドのリチャードは疲れて果てていた。それでも職業としてのガイドの立場から、顧客の精神よりも責任の分だけが上回り、一番しっかりしていた。
リチャードには、東に寄りすぎてその先はチベット側のカンシュン・フェイスになることが分かっていた。ならば、テントは西の方角となる。が、ウエスタン・クウムから吹き上げる嵐に、真っ向から進んで行かねばならなかった。
しかし猛烈に吹きすさぶブリザードに向かい、一歩も前へ進むことはできない。

午後十時、ブリザードは荒れ狂っている。
烈風から身を守る場所はいっこうになかった。
集団はパニックとなり、それぞれが散りだした。
「このままさまよっていたなら、まもなく誰かが座り込み、二度と立ち上がれなくなる」
「嵐が弱まるまでここで身体を寄せあって、待つこと以外は危険の拡大になる」
ガイドのリチャードは人々を諭した。
雪の上に座り込み、姿勢を低く身体を寄せ合った。互いに身体を叩き合う。手足をわずかでも動かす。
体感温度はマイナス七十度以下である。動きのないものは、全てが烈風に凍りついてしまう。瞼は凍りつく。酸素欠乏と、吹き付けるブリザードの痛みに耐え切れなくなり、
「死にたくない！　死にたくない！」
と叫びだす者もいた。
「手足を動かそう！」
と元気づける者もいた。
しかし、ほとんどは無言のうちに神に祈っていた。

靖恵はぐったりとガイドのリチャードにもたれていた。もはや考える気力もなく、手足を動かす力もなかった。寒さを感じる段階はとうに過ぎ、もはや何も感じなかった。意識はすでに遠のき、ただ静寂に浸っている。心臓の鼓動のみ、静かに打ち続けている。
その静けさは、神々への扉を開けた頂上から続いていたが、ここに至っては特に安らかで平穏な気分だった。

それから二時間、午前零時。
突然頭上に穴があき、星の瞬きが見えた。
激しく流れる雲が割れ、隙間に星があった。
嵐はやっと息を始め、息の間の風が少し弱まった。
「おーいみんな！　星がみえたぞー！」
一番元気だったガイドのリチャードは叫んだ。
それは生命の輝きを続けることが可能となる、希望の『星』だった。
「このまま朝を迎えては、全員が死んでしまう」
「もう一刻も猶予がない」
「歩ける者だけでもテントに向かい、歩けない者への救援を求めよう」
「いま歩ける者も、歩けない者を引き連れるだけの力がない」
「第四キャンプは近そうだから」
「歩けない者は、キャンプの人たちの救援にまかせよう！」
ガイドのリチャードは、歩ける者を集めた。
リチャードを先頭に、第四キャンプへよろよろと向かった。

足を引きずり、歩き始めて二十分。
第四キャンプへたどり着いた。

靖恵はブリザードの中に残されていた。
心臓の鼓動も弱まり、呼吸も浅くなった。動かないので、薄く雪に埋もれていた。自力で歩ける者が去った後、ふと我に返った。
『家へ帰らなければ！』
と思い、立ち上がろうとした。
しかしそれは魂だけで、身体がピクリと動いただけだった。
それが靖恵の、この世で最後の意志だった。

8　二人の母

現代のヒマラヤ登山は資金が用意でき、装備を持ち込めば、衛星通信回線を利用した直接通信が可能である。

それまで登山隊外部への連絡はメイル・ランナーを雇い、人が文書を運んでいた。

公式発表は全て、ネパール政府を通さなければならない登山規則があった。

一九七十二年一月、マヘンドラ国王が死去し、東京大学に留学経験を持つビレンドラ皇太子が国王に即位した。国内の政情は不安定で、カンバ族の反乱やビラトナガル武装勢力の鎮圧などが続いた。

不安定な地域に入る登山隊や大規模な登山隊には、軍隊から出向されたリエゾン・オフィサー（連絡将校）が同行した。一方、政情安定な地域で小規模な登山隊には、警察から出向されたリエゾン・オフィサーが同行していた。

登山隊が使用する無線機は微弱電波のものだけで、出力は百ミリワット程度のトランシーバーと呼ばれたものである。無線機をネパール国内へ持ちこむ時には輸入許可が必要となり、その通話距離は一キロメートル未満と申請書類に記載していた。また雪崩などで紛失した場合は、ネパール政府に対して紛失の申請を行ない、紛失証明書の発給を受けなければならなかった。

無線機の性能は悪く、山を迂回したり、降雪がひどくなると聞こえなくなる。雷雲の中ではコンデンサが破壊されて、使用不能となってしまうこともあった。

ネパール国内の治安維持にも関連し、許可なく無線機を使用するとスパイ罪が適用された。無線機の使用には必ず、登山隊付きリエゾン・オフィサーの許可が必要だった。

一九九十年代、

世界は情報化社会へと変わり、ネパール国内の治安も安定してきた。

靖恵が参加したアメリカの国際公募隊も、ベース・キャンプにコンピューターやファクシミリを持ち込んでいた。

インマルサット衛星通信を利用した国際電話・ファックス網により、逐一ニューヨーク本社へ登攀状況が連絡されている。

ニューヨーク本社ではその情報をコンピューターに再入力し、インターネットで世界に向け発信している。

衛星電話を利用した直接会話も可能である。

ベース・キャンプのファクシミリはいつでもプリント・アウトされた。

ベース・キャンプに降りれば、自宅と直接通信が出来た。

登攀中は小型無線機を何人かが持っており、小型無線機間やベース・キャンプとの交信を行う。さらにベース・キャンプの無線機を仲介し、ホームパッチ方式による、衛星電話と小型無線機との直

接交信も可能である。

靖恵のエヴェレスト登頂成功の第一報は、靖恵の自宅のファクシミリに入った。

靖恵の母は七十七才になる。三年前に軽い心不全で倒れた。その後回復が進み、今では自宅の庭を散歩できるまでに快復していた。

「本当に登れたの？

靖恵が・・・！

よくがんばったね！

地道に努力してきた甲斐があったね、靖恵！

神様、仏様、どうか靖恵を無事に帰らせて下さい！」

靖恵の母は亡き夫の仏前で手を合わせ、娘が無事に帰れることを祈った。

母にとっては、エヴェレスト登頂の意味など知る由もない。

登頂の成功より、娘の夢が実現したことへの喜びがあり、娘の努力が報いられたことへの安堵があった。

しかしそのかげで、母は密かな覚悟をしていた。

「これで娘は、山に捉えられてしまった・・・！」

さらにもう一つの確信がよぎった。

「大きな山の成功者は、いつの日か山に召されてしまうかも・・・！」

登山の歴史や経緯は知らないが、人生の経験則からする直感であった。

夜になり、事態は暗転した。

『靖恵さん、エヴェレスト登頂後、下山中行方不明！』

靖恵の母は台所にいてそのニュースを聞いた。

その場で、倒れ込んでしまった。

喜びも束の間、その行方に小さな期待を込めても、事態の結末は容易に想像できた。

『エヴェレストで行方不明』とは、

『死』を意味する。

死者は靖恵一人でなかった。隊長であり、ガイドでもある、ジョージ・ハンセンも死亡してしまった。

報道は『国際商業公募隊』における遭難として、『商業登山』が大きくクローズアップされていた。

登山家の間では、八千㍍から上部は自己責任とされていた。

そこに顧客をガイドし、顧客から報酬を得る『商業登山』に対し新たな責任問題が発生している。

さらに顧客の、登山倫理も問題となっている。

ヒマラヤの高峰登山は、ラインホルト・メスナーに代表される単独無酸素登頂のクリーンなイメージが尊重されていた。そこに高額な金を支払い、八千㍍から上部で酸素補給を続けながら、ガイド

にルートの整備をしてもらって登る『商業登山』に対し、顧客のヒマラヤンニストとしての倫理が新たに問われていた。

重ねて、そのようにすれば、経験や実力が少なくとも登頂可能な『商業登山』に対し、緊急事態における顧客の対応能力と遭難が問題でもあった。

すでにエヴェレストの頂は幾多あまねく男女の足元に踏まれ、多様な登山が展開されている。

その一つ、それも近年飛躍的に増大した『商業登山』への関心が高まっている中での、エヴェレスト登頂と遭難であった。

靖恵の母は胸を痛めていたが、もはや社会やマスコミに囚われる年令ではなかった。娘そのものの安否と、娘への思いだけである。床に伏せながらも、すでに覚悟はしていた。しかし覚悟とは裏腹な母の本能、子宮に宿し、産み出した母の感覚は、理性で押えきれるものではなかった。

「靖恵・・・・・・!」

「・　・　・　・　」

どうすることも出来ない、はりさける心、

自らの身を切られる痛み以上の思いが、母の胸に疼き続ける。

＊　＊　＊

一周忌に、中野は純白の生花を靖恵の母に送った。

翌日、中野はブルーマウンテン・コヒーとスサーナのＣＤを持ち、靖恵の母を訪ねた。

それ以前にはどうしても、訪問すべきでないと思っていたからである。

靖恵の母は衰えた足で、中野を奥の居間に迎え入れてくれた。

「わざわざ足を運んでいただいて、ありがとうございます」

靖恵の母はゆっくりした口調で言った。

「すぐにでも来たかったのですが大変遅くなり、失礼いたしました。

一周忌が過ぎたら、ぜひお母様にお目にかかりたいと思っており、今日になりました。

私は、靖恵さんが始めてエヴェレストを見に行ったトレッキングで、案内をしていました。」

「まあ！そうでしたか！

それはそれは、靖恵が大変お世話になりました」

「トレッキングの帰り、まだ冬山へ行ったことがないので、ぜひ連れて行ってほしい、と靖恵さんから頼まれ、その年の二月に、八ヶ岳の赤岳へ案内しました。

私の独り合点かもしれませんが、靖恵さんがエヴェレストに向かったスタートが、もしこの辺にあるとするなら、私にも無関係でない思いがしておりました。

本当はもっと早く来たい気持ちで一杯でしたが、立場をわきまえれば、『一年待とう』と思っていたのです。

靖恵さんが、生命(いのち)の一滴までも燃やし尽くしてエヴェレストにいるかと思うと、街でぬくぬく生活している今の我々は、もっと真剣に“生きる”ということを考えなければと反省させられます」

「靖恵もこんなことになってしまい、毎日悔やむばかりです。

私も三年前から身体が不自由になり、思うように動けません。

毎日写真に向かって、靖恵に語りかけているんですよ。

靖恵、寒くないかえ！

靖恵、おなかすいてないかえ・・・って！」

「そのお気持ち、よく分かる気がします！

私も一昨年の夏、三男を亡くしました。

五才七ケ月の、最もかわいい時でした。

今でも毎日思いだし、忘れる事など、一日たりともありませんから・・・」

「そうでしたか、それはそれは、お気の毒なことでした。

で、どうしてお亡くなりになったのですか？」

「我が家の三男は障害を持った子供でした。

診断より、とっても元気に育っていました。

前の晩、近所の子やうちのお兄ちゃん達と元気に花火をしていました。

翌朝、気持ちが悪いと言って、ぐずぐずしていたのですが、病院へ連れて行こうと妻が着替えている間に、突然呼吸が止まってしまいました。

それっきり、呼吸は戻りませんでした」

「それはそれは、お痛ましいことでしたね！

靖恵はエヴェレストへでかける時、

『お母さん行って来ます。登れるかどうか分からないけど、無理はしないから心配しないでね』

と言っていたんですよ。

わたしは門を出る前に、お守りで靖恵の身体をくまなく撫でながら、天のお父さんに靖恵の無事をくれぐれも頼んだのです・・・！

でも、その願いは天に通じませんでした・・・！」

「私もヒマラヤで、遭難した体験があります。

仲間三名が死んでしまいました。

私も雪崩の爆風に吹き飛ばされましたが、偶然に助かりました。

その時、ある隊員のお母さんから、全員にお守りを戴いたことがありました。

またシェルパの信仰では、必ず登山開始の前に安全祈願をします。

信仰厚いシェルパ達は、毎日お祈りしています。

それでも遭難は絶えないし、シェルパ自身も多勢亡くなっています。

靖恵さんたちもベース・キャンプで、必ずお祈りをしていたはずです。

それから考えると、私はお守りを信じないのですが、これは人それぞれですよね！

めいめいが、思い思い、好きなようにしたら良いと思うのです。
信じられる人の心は、救われます。
信じられない人でも、その心は自由で良いと思うのです。
ただそのことで、お母様自身を責めないことが一番大切だと思うのですが・・」
「そう言って下さると、ありがたいことです。
少しは、気が楽になります」
「私は子供の頃、よく母に連れられて実家のお墓参りに行きました。
真言宗でしたが、自然に経文を覚えました。
母は信心深い人でしたが、子供におしつけはしませんでした。
私は二十歳の頃、宗教に関心を持ちましたが、今の宗教は形骸化していると思います。
魂がいかに救われるかについて、宗教家自身の体験が、圧倒的に不足していると思うのです。
物が溢れる中で、精神が衰退しています。
例えば靖恵さんのような体験を、今の宗教家がしているでしょうか？
知識としての説教が、形式となっているだけのように私には見受けられるのです。
私の子供が死んだ時、急だったものですから、近所の曹洞宗のお坊さんに頼んでしまいました。
でも、子を亡くした悲しい親の魂に、語りかけてくれる説教はなにもありません。
坊さんへのお酌の仕方とか、仕出し屋さんへの講評や、戒名の付け方の話しなどです。
それならば私自身の方が、もっと『死』について具体的な話しをすることができます。
これは一重に、宗教家の体験不足があると思うのです。
体験よりも知識を優先させ、宗教が形骸化してしまう。
さらにそれを維持継続させるため、業界を作って政治力を持つ。
頭で覚えた知識だけでは、魂を説得する重い言葉になりません。
体験に裏打ちされた言葉（知識）は、相手の魂と共鳴することができるでしょう。
さらに経験ばかりでなく、経験を整理した法則のような体系を示せることも大切と思うのです。」

「わたしは靖恵が登頂に成功したという知らせを聞いた時、これからがもっと大変なことになると直感しました。
無事帰って来たとしても、今度は世間がほっておかなくなります。
次の遠征、その次の企画と、靖恵は益々深みにはまりこんでゆくことでしょう。
やがてその内、どこかで必ずゆき詰まると思っていました」
「たしかにそうですね、それが『スター（星）』というものの、晴れやかな反面につきまとう、見えざる悲しみですよね。
そのバランスをとることは難しい！
日本人最初のエヴェレスト登頂者、植村直己氏にしてもそうだったと思います。
一般の社会生活になじめなかったという植村氏は、南極や北極への冒険を繰り返しました。
それによって、氏は社会の中で期待され、冒険の成功は社会へと貢献できました。
それらの期待を持続させることに、自分の存在価値を見出だして努力を重ねる。

しかし、努力の過程においても危険は常に存在し、ついに冬のマッキンリーで遭難してしまった。
この例のように、『成功』は必ずしもその人の人生の安泰を、保証するものではありませんよね！
成功したがゆえに、次は違った次元で遭難してしまったケースは山ほどあります。
真面目に山へ取り組むほど、遭難のチャンスはより確実に増えてきます。
ほんの一握りの人だけが、それらのケースに会わないか、遭難しながらも生還して来る。
これはもう、『運命』としか言いようがありません。
これを『運命』や『神の選択』などと言ってしまえば簡単なのですが、私自身はまだ『神』の存在を確信できません。『神様はいる』とも『いない』とも、さらにまた『神は死んだ』ことも、今だ確かなことは分かりません。
でもふと！　息子の一周忌を迎えた日、
『人はみな、宇宙に存在する未完成な神様』ではないかと、思ったことがあります。
宇宙や人類、人間社会から思い描き、そこに『神様』の存在を仮に認めてみると、世の中の仕組みがとてもうまく説明できます。
『靖恵さんがエヴェレストの頂上で、神様の住む世界への扉を開いた』としてみると、この神話もうまくまとまります。
障害を持って生まれ、そして短命で死んだ私の息子を『星の王子さま』として、『神様のお使い』だったとすると、この神話もうまくまとめることができます。
ただ私が、今だ神様の存在に懐疑的なため、これからも幾多の修行をさせられることでしょう。
まだまだ素直に、神や仏の存在が認められなくて、今もまだ探しまわっているんです」

中野の話しは少し抽象的になりがちで難しかったが、靖恵の母はなんとなく分かり合える気がしていた。

「靖恵さんは、最終キャンプに入ってから、コンディションが良かったと思うのです。
失礼にはなりますが、本人もまさかエヴェレストに登頂できるとは思ってもいなかったのではないでしょうか？
でも、なんとかがんばって最終キャンプのサウス・コルまで上がってみると、とても調子が良かった。頂上は、もうそこに感じた。
そして登頂してしまった。
ですがなにぶん、三十人を超えるアタッカーがその一日に集中したため、順番待ちとなってしまった。
待っている間にも酸素を消費するわけですから、帰りの分まで余分に消費してしまった。
天候が極めて悪くなったことにも大きな原因はあるでしょうが、エヴェレストのサウス・コルは偏西風の通り道であって、過去には幾隊もテントを裂かれたり、飛ばされています。
ヒマラヤの八千㍍では、めずらしいことではありません。
私は人災の要素が多かったと思っているのです。
頂上直下にヒラリー・ステップという岩の溝がありますが、その付近での順番待ちが、いたずら

に体力と酸素を消耗してしまった。
これはガイドでリーダーだった、ジョージ・ハンセンの判断ミスではないかと私は思うのです。
なぜ、適切な退却ができなかったのか？
予定した時刻に、なぜ退却できなかったのか？
エヴェレストの頂上を目の前にして、引き返した人も多勢います。
引き返さず、登った人も多勢います。
ここが一番難しいところです。
その判断はその人個人にまかされるべきだし、他人がとやかく言う権利もありません。
そしてその結果は、その人自身が責任を負うしかありません。
これがヒマラヤ登山の鉄則です。
だから、『靖恵さんの死も、靖恵さん自身の責任です』と言ってしまえば簡単です。
しかし商業登山の場合、顧客が自主判断しなければならないかとすると、どうもそうではないようです。
契約書はみたことありませんが、事前の契約により、ガイドまたはリーダーの判断が優先することを確認し合っているとも言います。
その点が商業登山、特にヒマラヤ八千㍍峰登山の、微妙かつ他者の批判を受けるところだと思うのです。
ましてやリーダーが別な一人の顧客にこだわり、頂上付近から動かずに死亡してしまった。
そのことが、靖恵さんの遭難と死にもリンクしてきます。
山登り、特にヒマラヤの高峰では現場にいない者からの批判は適切でない場合が多分にあります。
だからその現場に居合わせない私の指摘も、頭で考えた域を出ていません。
しかしお母様としては、いかなる結果になったとしても、それらの全てを受け入れなければなりません。
最悪の結果に、とても辛いことだったと思うのです」

「中野さんも息子さんで経験されたように、親子の関係は理屈だけではありませんものね。
親は子のためなら、どうなっても良いとする、親の本能がありますものね。
でも、エヴェレストの上では、母親はどうすることもできません！
ただただ、祈ることしかできませんでした！
祈っても、それが通じるやら、通じないのやら！
自由にならない身体で家にいたのでは、靖恵になにもしてやれません。
ただただ、じっと祈るばかりでした」

「若輩の私から、もうそれ以上のことは言えませんが、その耐えるということ、さらに耐え続けるということの重荷は、やはり味わった者のみが知る、経験の範疇なのでしょうね。
我が子の死は、自分が死ぬより辛いことですから　・　・　・　・　！」

「靖恵が大好きだったコーヒーは、今でも毎日欠かさずこの仏壇にそなえています」

「コーヒーで思い出します。

初めてエヴェレストを見に行ったツアーの帰り、『冬山へ行ったことがないので、連れてってほしい』と靖恵さんから頼まれました。

靖恵さんにとって初めての冬山となる八ヶ岳へ、私が案内しました。

その時私はブルーマウンテンのコーヒーを持って行きましたが、それを山小屋で入れて飲み、風雪の稜線でポットから飲んだ時、靖恵さんは『最高の味』だと言っていました。

そんなことから、『家に帰ってからもコーヒー狂いになりました』というお手紙をいただいたことがあります。

靖恵さんのコーヒー好きが、そんなことから始まったのなら、私も嬉しく思います。

ですから今日のお土産に、ブルーマウンテンのコーヒーを持って来たのです。

渋谷のコーヒー店で挽いてもらいました。」

靖恵の母千代は、七十八才になった。しかし未だ新聞に目を通し、中野へも自然な応対を続けた。途中から、近所に住む叔父も加わり、思い出の話しがはずんだ。

中野はとめどなく、二時間以上も話し込んでしまった。

＊　＊　＊

千尋の母マツは七十三才になり、歩く時に腰が曲がってきた。十七年前、千尋と中野の結婚に、親の願いを何とか押え、娘の希望を受け入れ渋々承諾した。

今になって思い返すと、『あれでよかった！』と、安堵するのであった。

中野が父親を伴って『千尋さんを下さい』と来た頃、中野の父の年齢が、今の自分の年に近かったことを、改めて思い浮かべた。

「中野さんのお父さんは、あの時息子のために一生懸命だったんだ・・」

「遥か遠くの宇都宮まで、息子を思って来て下さったんだね・・」

今の自分の行動力からすると、遠方へ出向くのは大変苦痛になっている。いいところ、県内の温泉までが限度だった。

それから思うと、中野の父が我が子のために老いた身体を遠方まで運んできた努力が、今さらながらに実感できた。

この年頃になると、様々な思いがよみがえってくる。

緑豊かな田園で一生を過ごして来たことに、改めて様々なことが思い起こされる。

農家に生まれ、この家を継ぐはめとなり、この家で年老いてきた。

日本人のだれもがそうであったけど、青春の時を第二次世界大戦の中に過ごし、思いもよらぬ様々な苦難に出会ってきた。
兄を戦争で亡くし、この農家を継いだ。
戦後の農地解放は、所有していた農地のかなりな部分を失ってしまった。
それでもまだ、専業農家として自立できる広さが残っている。
夫を軸に、正月は十二人の孫に囲まれ、平穏な日々をすごす晩年であった。
しかし突然、家を継いだ長男が四十才の若くして他界してしまった。
その三年後、今度は夫がガンで先に逝ってしまった。
息子に先立たれた夫は、めっきり気力が衰えていたのだった。

黄金色の、たわわに実る稲穂を見回しながら、マツは感慨にふけっていた。
「わたしの人生は、幸せだったのだろうか？
不仕合わせだったのだろうか？
自らに問いかけていた。
ふたたび一面に広がる黄金色の稲穂に目をやると、ふと悟った。
こんなこと考えるのは、もうやめよう！
今こうして生きていること、そのことに感謝していれば、自分の人生が幸福であったのか、不幸であったのか、それはもうどっちでも良いことなんだ。
幸福の量から不幸の量を差し引いて、残りがどっちかを比べてみたところで、今更過去がどうなるわけではない。
そんな無意味な計算より、この豊かな緑の田園で、安らかな日々を過ごせていることに、大いなる感謝をしなければ！」
そう思い、マツはなるべく外に出て、花の水さしや草取りをした。

「中野さん、この間のテレビで上高地をやっていたよ！
あの時はよかったねー！
梓川の水は冷たかった！
指をひたすと、ピリピリしたっけ！
河童橋から見上げた穂高の山もきれいだった。
大正池の回りの森も静かで、わたしはだーい好き。
ホテルの温泉もきれいで、そのまま温泉の湯をのんだっけ！
中野さんたちとの旅行はいつもゆっくりしていて、本当によかったね！」
正月やお盆に千尋の実家へ帰ると、マツはよく旅行の思い出話しをする。

『親孝行、したい時に親はなし』
という諺がある。

しかし中野は、
『出来る時に、出来る事を、一所懸命やる』ことを信条としていた。
千尋との結婚で反対が大きかった分、なるべく千尋の両親と中野の父を引き出し、一緒に旅行の思い出をつくろうとした。
中野の父や千尋の両親をともなって、幾度か旅行に出かけていた。
その頃の思い出話しを、今になってマツはよく口にする。

「お母さん、行ける時に出かけておいて良かったね」
中野もマツの思い出話しに、相槌をうつ。
「今度はねえ、立山をやっていたよ！
近所の人達も立山へ行ってきたけど、パック旅行は忙しくて、ゆっくり見られなかったと言っていた。
わたしたちはゆっくりした旅行で、本当によかったわね！
何んて言ったっけ、あの温泉旅館は・・・？」
「ミクリガ池温泉ですよ」
「そうそう、旅館の下の地獄谷でも温泉が吹き出し、身体が温まる温泉だった。
そこに三泊もしたんだから、のんびりで、とても良かったよね！」
「そういえば、お母さんが旅館宛てに宅配便で梨を送った。
あれには旅館の人達が面食らってましたよ！
それでも室堂のターミナルまで、旅館の人が受け取りに行ってくれた。
旅館もいい迷惑だったけど、宅配屋さんは大赤字だったでしょうね！
なにせ、宅配便の荷物を受け付けた人は、まさか送り先が立山の山中にある旅館だとは知らなかったろうし、よくもまあケーブルカーや高原バスに積んで、送ってくれたもんでした！」
「旅館のアルバイトの娘さんが栃木の人で、あの梨を一個分けてあげたっけ！」
「いやー、知らないってことは強い！」
こんな会話が幾度も繰り返され、その度にみんなで笑いころげるのだった。

北海道から礼文島・利尻島への五泊六日の旅。
中野たちが設計した高知の旅館から、小豆島・岡山を回った旅。
年老いた今では、もうそれらを同じようには回れない。一緒に旅した夫や中野の父も、今ではもうこの世にいない。
寂しさは募るが、思い出はより鮮明になって、幾度も脳裏に浮ぶ。その思い出を、今は娘・千尋の家族とともに振り返ることにマツは喜びを味わっていた。

9　幸福はいつでも、どこにでも有る

千尋は三男・萌を亡くした後、虚脱感にさいなまれた。
看護を学び、福祉を学んでみたものの、息子の死に対しては役立たなかった。
自分の手元で死んでしまったことに、切ない虚無感が残った。
仕事に出かけて不在だった夫に対し、
「わたしがそばに付いていながら、萌を死なせてしまったことは、わたしが萌を殺したことに等しい」
「夫に何て詫びたらよいだろうか・・・」
千尋は苦しんだ。
「ごめん！　わたしが付いていながら、萌を死なせてしまって・・・
わたしが萌を殺したも同然だわ！
本当にごめんなさい！
ごめんでは済まないのだけど・・・」

「仕方ないよ！
仕方ないと言って諦められるものではないけど、もはや誰にも取り返せないんだから。
結果がはっきりした以上、辛抱するしかないよ！
家の中でお母さんと一緒だったことが、萌にとっては一番幸せだったと思うよ！
ありがとう！」

「・・・ごめんなさい・・・！」

「そのことでは、もう自分を追い詰めないほうがいい。
萌も悲しむし、何一つ良い結果にはならない。
自分のことだけを考えれば、親の悲しみを一生引きずるより、萌を追って死んでしまった方がずいぶんと楽になる！
ヒマラヤで遭難し、生きることの意味を知ってみると、もはや自分だけが生き延びることには何の価値もない。だから萌を失った悲しみの中で、今死んでしまうのも良いと思う。
でも、残される二人の子供達を思うと、今はまだ彼らの親としての役割もあり、ここで死んでしまうわけにはゆかない。
自分を追い詰めることによって、その時だけは楽になるかもしれない。
だけど家族は一人だけじゃない。
それぞれがお互いに支え合っているんだから、残った家族のためにも、もうそれ以上自分を追い詰めてはいけないよ」
中野はそう言って、千尋を優しく抱きしめた。

千尋は中野の胸に顔を埋め、しばらく嗚咽を続けた。
『いつか！』
と予期していたものの、まさかそれが
『今』
であったことに、二人とも限り無い衝撃を受けていた。
千尋は自分を責め、それを中野に伝えることで無意識の中に、心の衝撃を和らげようとしていた。

一方中野は、誰も責めることが出来なかった。
『仕方ないよ！』
とあきらめの言葉を発したものの、この悲しみを自ら胸の内に封印するのが大変だった。
一緒に死んでしまったら、どんなに楽になったかもしれない。
『最愛の息子を失い、私の胸は張り裂けそうなんだ！』
出会う人ごとに伝えたかった。
行き交う街の中で、大きな声で叫びたかった。
しかしそうしたところで、もはや息子は返ってこないのも良く分かっていた。
『これもまた辛抱なんだ！』
中野はじっとこらえた。

千尋の母マツが、息子や夫の死を全部腹の中にしまい込んだように。
靖恵の母千代が、娘の死に耐えているように。

持続する悲しみの心は、千尋をボランテイアの行動に導き、中野を思索の世界に復帰させた。

＊　＊　＊

少子化による高齢社会を迎えた現代日本では、医療系、福祉系の人材が今後広く求められている。
学校法人・S大学は医学部中心の大学であったが、医療系をまとめた短期大学の新設を、横浜市郊外に進めていた。看護学科・定員百名（3年）、理学療法学科・定員三十名（3年）、作業療法学科・定員三十名（3年）である。
その開設準備室の責任者は、千尋が結婚後に勤務していた県立看護短期大学の上司であった。
県立看護短大を定年退官したのちに、この開設準備室をまかされていた。
そして千尋に、助教授として参加するよう求めてきた。
これからの看護や福祉には、より高度な知識や技術とともに、癒しや包括的（ホリステイック）視点が求められている。

これらの流れにとって、千尋の体験と知識はおおいに役立つことができる。
千尋は、障害をもった児を自ら受け止め、そして家族や地域社会に受け入れる（受容）努力を続けて来た。
看護から視点を移し、T大学大学院で社会福祉を専攻、修士課程を終えていた。
修士論文のテーマは、
『障害のある児を療育する家族の発達と社会的支援』が課題であった。
さらに、障害を持って生まれた我が子の受容と、その死に直面した心の痛みは行動のエネルギーとなり、他者への思いやりの精神へと成長していった。

千尋は息子・萌が亡くなってから半年後、学校法人・S大学医療短期大学の開設準備室に入った。
さらに障害児家族支援のボラテイア活動も開始した。夢中になって活動することで、息子を失った心の隙間を埋めようとしていた。
千尋はたった一人で、『レスパイトケアサービス萌』を立ち上げた。
失った息子にちなんでの命名である。

レスパイト(respite) とは、休止、休息期間、猶予などの意味を持っている。
その意味から、レスパイトケアサービスとして、障害者や障害児をもつ家族を一時的（一定期間）に介護から開放させ、ほっと一息ついて疲れを癒すような、地域社会の支援である。
障害児とその家族にとっての行政は、一時入所制度、緊急一時保護制度などがあるが、どのように利用できるのか、広く知られていない。
これらのサービスでさえ、病院や児童相談所、社会福祉協議会、市役所窓口など情報の提供と把握が利用者にとって十分なされていない。
利用者はその手続きの繁雑さと内容に、不便な思いをしていた。
これら利用者側に立った視点と取り組みの不足が、千尋の大学院研究から浮き上がった結果であった。
「利用する側に立ったシステムと、利用する側からの評価を受けながら、いつもシステムを修正しなければならない」
と千尋は思っていた。

すべての人々は、普通で平等な暮らしをする権利があるとする、欧米にはノーマライゼイションという考えにもとづいた制度もある。
それに比べ、レスパイトケアサービスはモラトリアム（猶予）的印象がする。
千尋は、
『レスパイトの持つ、束の間の休憩こそがボランテイアに相応しい』
と考えていた。
「ノーマライゼイションは、社会制度としての取り組みとなる。
レスパイトは好意のボランテイアが、出来る範囲で取り組めば良い。

制度化されても、必ず隙間が発生する。
おおげさなことではなく、ほんのちょっとした支援が地域社会の潤滑油になる。
それも、重度の障害を持った家庭では、なおさら緊急度が高い。
そこに、看護の専門職能が役に立つ。
サービスへの評価は、する側からでなく、受ける側からされなければならない」

こう考えた千尋は、たった一人で、そのサービスを始めた。
重度の障害児をもった家庭に入り、一日をその児と過ごした。
その児の母は非常勤講師の仕事に出られるようになった。
その児の母は国立T大学大学院を出ていた。そこで学んだことを埋もれさせることなく、少しでも社会へ還元させることが出来る。
ちょっとした支援で、それが可能となったのであった。
重度の障害をもったその児は、母親とは違った人との触れ合いで、母親とは違ったコミュニケイションとなる。その交流から、両親とは違った療育の発達がみられた。
その児は両親以外でも人を信頼できることを学び、親への甘えとは異なった、『小さな小さな自立』を獲得した。
看護の知識と技術は、チューブでの食事や排泄、吸引や、緊急への対応もすばやい。母親では怖くてできなかった屋外への散歩も、千尋は車椅子を改良しておこなった。
なによりも、その児に笑顔がでてきたことは、児の家族や千尋の大きな喜びであった。
重度心身障害児をもつ家族に、少しばかりの心のゆとりが芽生えた。

「障害をもった児にふれながら、癒されていたのはわたしだった！」
千尋には息子・萌との死別で病んだ魂が、少しずつ癒される思いであった。
『萌』とは、『芽生え』を意味する命名でもあった。

＊　＊　＊

一年後、S大学医療短期大学は開校した。
千尋は基礎看護学の助教授として就任した。
それまではたった一人でもと思い、「出来る時・出来る事を・出来る範囲」で実践してきたレスパイトケアサービスであった。
一人だけの実践でも、その成果と意義は看護学会でも注目され始めている。広島で開催された日本看護研究学会で、一人のレスパイトケアサービスの実践成果を発表した。
「千尋さん、わたしはこのような発表に期待していたんですよ！

看護の学会も研究のための研究が主流となり、生きた学問が失われてきました。
あなたのような、学問と実践をリンクさせた研究は、これから二十一世紀の看護になくてはならない視点です。
どうか引き続き研究と実践を継続されますよう、わたしはぜひにもお願いしたいのです」
学会が終了し、帰路についた飛行機の中で、大島学会長は千尋に言った。

千尋には我が子の療育のために短大を退職し、研究の主流から離れた寂しさがあった。
レスパイトの発表は看護研究学会にとってはアウトサイダーであり、内心どんな評価を受けるか心配もしていた。反面、自分がやってきたことへの自信もあった。

夫の中野はよく言っていた。
「君の取り組み方は、これからの大学研究の在るべき方向だよ。
今はアウトサイダーかもしれないが、これからはインサイダーとなって自主的に活動しなければならない。
学問のための学問には哲学や思想が欠ける。
哲学や思想のない学問は、ただ知識として存在するだけなんだから。
知識の量を比べるなら、もはやコンピューターの記憶能力のほうが正確で、人間を上回りつつあるよ。
科学的知識や原理、法則の探求は大切だが、ただ、それだけでは人間にとっては自然と同じような存在として在るだけになってしまう。
そのことが人間の生命や生活と、どう関わるかの方向づけが哲学であり、思想でしょう！
生命体である人間にとって、魂は切り離せない。
肉体に魂をそなえた一単位（ユニット）として、ヒトは個人をなしている。
だから肉体と魂を兼ね備えた個人を基礎として、それから人類はどうあるべきかを考え直す必要があるんだ。
知識のページを積み重ね、その知識を切り売りするのが研究や教育ではないはずだ。
研究者、教育者自らも求め、実践し、体験した中から、原理、原則、法則などに帰納させ、その結果をさらなる明日に演繹、応用する！
求め続けることが哲学であり、その答えを整理整頓したものが思想や原理、原則、法則などの科学を形成する。
ただただ知識を積み重ね、知識を切り売りするだけならば、人間の魂にとって知識は何の役にも立たないでしょう！
求め続けること、そして常に『何のために？』と問いかけ続けること。
この自問自答がなければ、人間の精神は浄化されない。
人間には良い心と悪い心がいつも同居している。
精神の浄化作用は、哲学によって成されるんだ！
その哲学が今は知識だけとなって、浄化作用を経た知恵になっていない。

知恵は哲学的経験の浄化作用からアウトプットされてくる。
今人類に求められているのは、知識と同じく知恵の活用であって、それには人類の持続に向けた高い精神(こころ)が必要なんだ！」

S大学医療短期大学に常勤となった千尋は、
「今度は自分がコーデイネートして、ボランティアに参加できる人々に協力してもらおう。」
「まずは看護婦さんたちに話してみよう」
グループの名称を『レスパイトケアサービス萌(もゆ)』とした。
息子への思いと、感謝の心を込めたネーミングであった。
千尋は県立看護短大時代の教え子や、身近で親しい看護婦仲間や保母経験者に話してみた。すぐに六人が賛同し、活動は継続され、毎月五、六件の依頼があった。

口込みで紹介され、活動は少しずつ広がった。
一年後、毎朝新聞横浜版に『レスパイトケアサービス萌(もゆ)』の活動が紹介された。
その記事のサブタイトルに『スタッフ募集』が加わったため、多くの問い合わせがあった。
そしてほどなく、看護婦二十二名、保母・養護教諭十二名、その他介護経験者十三名と、合計四十七名のスタッフに急成長した。

毎月一度の定例会に千尋はレスパイトへの熱い思いを語り、スタッフの実施例報告や様々な意見交換が始まる。
それまで聞いているだけだったスタッフの一人は会話に引き込まれ、涙をこらえきれずに、自らの体験と参加の動機を語りはじめた。
「わたしは重症心身障害児の娘を出産しました。
出産した病院では、産科病棟受け持ちの看護婦さんがとても良い方でした。
重症だったので転院しましたが、その後まもなく娘は亡くなってしまいました。
その看護婦さんは転院後も、時々手紙や電話をくださいました。
たった一人でも、わたしと娘との記憶を分かちあっていただける他人ができたことで、わたしの心はどんなにか慰められたことでしょうか！
この経験から、たった一人でも良いから家族のほかに信頼でき、不安や疑問を聞いてくれ、相談できる方がいたらどんなにか心強いことでしょう！
その方がより専門職に近ければ、なおさらのことです。
他人だからこそできる、支援ではないでしょうか！
こんな思いから、わたしもぜひスタッフに参加してみようと思ったのです」

わが子をケアしてくれた看護婦さん、わが子のオムツを替えてくれた看護婦さん、わが子をあやし遊んでくれた看護婦さん。その子の人生の、時の流れを分かち合ってくれた体験は、家族にとっても大切な思い出として、亡くなった後まで残されている。

「人は皆それぞれに、様々な体験や思いがある！
このような体験を共有し、ちょっとした努力で互いに支え合えたなら・・・！
できる人が、できる時に、できる事を、できる範囲で、実践する」
これが千尋のボランテイア活動の原点となった。
だから無理はしないで、継続させたいと思っている。
あしたのために！

＊　＊　＊

「ねえ、どうしてぼくの名前を『有』ってつけたの？」
小学五年生になった次男の有が中野に聞いた。
『『有』っていう言葉の意味はね、『在る』っていうことなんだ。
例えば水や空気はいつもあるでしょ！
父さん、母さん、兄ちゃん、スカイ（犬）やハッピー（猫）たちは、いつも有くんと一緒にいるでしょ。
そのほかにもたーくさんの、人や動物や自然たちといっしょに有くんはくらしている。
そういった、
いつもいつも身の回りに在る、いろんなことに感謝します、っていう意味が『有』なんだよ
『在』では変な名前でしょう！
だから『在』と同じ意味で『有』ってつけたんだよ！」
「ふーん、分かったようで、良く分かんないや！」
「人間はね、いつもいつも身の回りに在ると、そのありがたさを忘れてしまうんだ。
父さんは昔、ヒマラヤを登っていたでしょ。
ヒマラヤの高いところでは空気（酸素）が薄くって、息するのも苦しかった。
今家の中にいて、有くんは空気なんて気にしたことないでしょ！」
「うん、目に見えないし、味も匂いもないからね！」
「いつもいつも空気が一杯あるからだよ。
だけど空気が薄いところへ行ってみると、いつも気にしてなかった空気のありがたさが、身にしみて良く分かるようになる。
いつも身の回りにいっぱいあると、在ることに気づかなくなってしまう。
だけどそれがなくなってみたり、少なくなってみると、いつも当たり前でいっぱい在ったことに気づくようになるんだ。
そしてね、そのいつも『在る』ことが、実はとても大切だったことに気づくんだよ！
有くんはいつも萌と一緒にあそんでいたよね！

でも萌が死んでしまった今、萌と一緒に一杯あそんだことや、けんかしたことが、とても大切だったことが分かるでしょ！」

「うん」

「父さんや母さん、とくに母さんは萌の障害のリハビリに大変だったよね。

勤めていた短大もやめた。

障害者施設で看護婦さんのアルバイトをしたり、看護学校で講師をしながら、言葉の先生や体操の先生、障害児医療の先生にも通った。

有くんもよく一緒に行ったよね」

「うん」

「普通の児は当たり前に歩けて、当たり前に話せるでしょ。

でも萌は、一生懸命に話すことや歩くことを訓練した。

一生懸命訓練することによって、普通の児の半分くらいになることができた。

かけっこだって、できるようになった。

そうやって、実は萌が一番がんばっていたんだよね！

普通の児には当たり前で気づかないことでも、萌は一生懸命努力して獲得した。

当たり前で気づかないことが、人間にとって、とても大切だったことに気がつくでしょう」

「うん！」

「父さんはヒマラヤへ行って、いろんなことを経験したんだ。

そんな中から、当たり前で気づかない、『在(あ)ることに、感謝しよう』、『在(あ)ることに、気を配ろう』と思ってつけたのが、君の名前の『有(ゆう)』なんだ」

「ふーん、けっこうむずかしいんだね！

でも、なんとなく分かったよ！」

「うん、有くんは小さいときから言葉の理解力があったから、今の君なりに分かってくれればいいよ！

大きくなるにつれ、だんだんその内容が広く、深くなってゆくからね！」

「うん、ありがとう！

それじゃ、泉兄ちゃんは？」

『泉(いずみ)』兄ちゃんはね、『有(ゆう)』よりもイメージ的な面が強いんだ。

ほら『星の王子さま』の中に、『砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ・・』っていうのがあったでしょう」

「うん去年の秋、お母さんたちと『星の王子さま』の劇（ミュージカル）を見てきたから知ってるよ」

「今の有くんにはちょっとむずかしいけど、人間にはいろんな欲望があるんだ。

有くんだって、おこずかいをたくさんもらいたいとか、外でいっぱい遊びたいとか、ああしたい、こうしたいってことがたくさんあるでしょ！

『・・・したい』っていうのが欲望なんだ。

だけど多くの人は、自分のためにばかり・・したい、・・したい、って思うでしょう！
他人が喜ぶようなことをして、それが自分の喜びになる人は少ない。
まっ先に自分のことだけ考えて、他人のことまで考えられない。
そうした人間の心は砂漠のように、休むところもなく、どっちへ行ってよいか分からなくなってしまう。
ただひたすらに『・・・したい』っていう心を満たそうとする。
人間の心って、砂漠の中を歩き続けているようなものなんだ！
もし砂漠の中に水が湧きでる『泉』があったなら、歩き続けている人々は必ずそこで休むでしょう！
水の回りには草がはえ、木が育って、動物たちも生きることができる。
そのように、『泉』は疲れを癒す休息と、命を育てる幸せなところなんだ。
砂漠の地下にも水は流れていて、それがどこかで湧き出してくる。
そこが『泉』なんだ。
自分のやりたいことばかりを思う人間の心を『悪い心』とすれば、人を信じ愛し合う心は『良い心』になる。
いっぱいある人間の良い心と悪い心は、砂漠をさまようように果てしない。
とかく『良い心』は見えにくい。
砂漠の地下を流れる水のよう、人々の心の奥にしまわれてしまう。だけど『泉』のように、いつか、どこかへ湧き出して生命を灯す。
いつかどこかに芽が出て育つことを、父さんは信じたいと思った。
父さんと母さんはエヴェレストの旅で出会ったでしょ。
そしていっしょに仲良く暮らす幸福を、二人だけで終りにしないで、君たちに伝えたかったんだ。
それまで父さんは、子供なんていらないと思っていた。
子供はわがままだから、好きになれなかった。
だけど優しい母さんと一緒に暮らす喜びは、子供たちに伝えるのが一番だと思うようになったんだよ。
そして生まれた最初の子に、『泉』とつけた。
もし女の子だったら『いずみ』にしようと思っていたんだ。
でも男だったから、漢字の『泉』にしたというわけさ！」
「ふーん、ぼくには難しいけど、いろいろ考えていたんだね！
父さんたちは・・・！」
『『萌』は、『芽生える』という意味がある。
『泉』が『在る（有）』ところで、『命が芽生え、育つ』という意味だったんだ。
これが、兄弟三人の名前の意味だよ！」
「ふうーん、大きくなったら、もっと考えてみるね！」
「萌は五才で天国へ帰っちゃったけど、お母さんが言うように、神様のお使いとして、『星の王子さま』だったかもしれないね！

障害を持って生まれてきたけど、その障害は家族のみんなに色々なことを教えてくれた。
『いつも満ち足りて、当たり前で、何も気にしなかったことが、実は一番幸せで、大切だったってことをね！』
そして父さんのヒマラヤ体験から、
『幸福はいつでも、どこにでも有(あ)る。ただ気づかない！』
ってこともね！
そのことに人々が気づいてくれたら、地球の人たちはもっと優しくなれるよね！」

「父さんはこのことを、君たちの名前に込めて伝えたかったんだ！」

それから数年後。
「兄ちゃん達も大きくなったから、今度は萌くん、父さんとあそぼうね！」
そうつぶやいた登山者は、薄くなった白髪の額に汗をにじませ、一人ツラギ氷河を登って行った。

初稿　（一九九八年十月十二日）
終稿　（二〇〇二年　二月十日）

完

あとがき

『人は「人生」という、一冊の本を書き残す』
そんな意味の言葉が言われますが、誰もが出版するといったことではありません。
人はそれぞれが「人生」の主役を演じており、あたかもそのドラマは一冊の本に成り得ることを示しています。

世には生真面目で不器用な人間と、真面目ながらも器用に適応できるタイプがいます。
この物語は一人の生真面目な男を軸として、同じく生真面目な二人の女性の生き様を描いたものであります。
その男は不器用ながらも生真面目を一身に負い、様々な衝突を繰り返し生きています。
生真面目な一方の女性は、地球の頂点エヴェレストの頂きに立ちながらも、神々の山に召されてしまいます。
生真面目なもう一方の女性は、障害をもって産まれた我が児を、五年余の短命な中に失ってしまいました。その病んだ心は、同じように障害をもって産まれた他の家族支援活動へと発展し、活動の中に自らの心の癒しを学んでいます。
この物語を通し、人々の様々な「人生ドラマ」に寄与できれば幸いであります。

＊　＊　＊

男性と女性、二つある人の性による違い。
経験を経た人、経験したことのない人。
死線を越えた人、死線までたどり着かなかった人。
人の感性（心）は様々であり、どうにも分かり合えない一線が残ります。

悩み、思いあぐね、死を考える生真面目な男。
生真面目ゆえの、「罪と罰」であります。
かつて生真面目な登山家の多くが、山に召されました。
あまりにも多く、名前を挙げきれません。
かつて生真面目な文豪の幾多は、自ら死を選びました。
太宰、芥川、三島、川端・・・・・
それぞれが皆、それぞれの理由を持って。

しかし、死者はもう何も語れないカタストロフィ（断絶）。

死したる者の語らぬ言葉を知り、語ることが出来るのも生きることの証(あかし)。
「生と死」なる永遠のテーマには、また永遠に答えが続く。
自ら選択するも良し、運命に任せるのもまた良し。
そして、産み育てた我が子の死は、自らの死よりもっと辛い。

＊　＊　＊

南極、北極につぎ、八千八百四十八㍍のエヴェレスト山頂は「第三の極地」といわれました。
エヴェレストはイギリス隊により、一九五三年初登頂。以来半世紀を過ぎても、今だ話題にこと欠きません。関連する著作もたくさんあり、それだけ多様な切り口があるということになります。
それでもなお、この文を書かずにいられなかったテーマとは、多様化の時代に生きる、生真面目な心の在りようでした。

南極、北極、エヴェレスト、これら三つの地球の極は、形として捉えやすい。しかるに、それらの極地へ探険隊や登山隊を派遣して、国家の威信をかけた初踏破、初登頂を競ったのが、半世紀以前であります。
それら人類の未知を知る喜びと、未知に足跡を残した記録とは、パイオニアワークとして社会に大きく評価されています。しかしながら地球は有限であり、いつまでも形而下的な探求が続くわけにはゆきません。
半世紀前にエヴェレストが初登頂されて以来、人類は宇宙へと乗り出し、一方では海底探査へと向かいました。いずれも、形而下での探求です。

しかし私は、地球という惑星における第四の極地は『人の心（魂）』ではないか、と常々考えていました。古来の形而上学からの探求ではなく、新たな「心」への探求であります。
人が人の心（魂）を対象とすること、それは思想や哲学、文学、宗教ほか、あらゆる文化行為として成されています。心〔魂〕は、人類に与えられた形而上的小宇宙ではないかと思うのです。意識は時限を越え、空間を飛び越え、一個の主体〔小宇宙〕となります。
また人が人を語るとき、人類の部分を語ることは可能でも、人類の全てを語るには論理的矛盾が発生します。部分が全体を語ることのパラドックスに陥るからです。
しかる理由から、人それぞれに第四の極地とした『心の宇宙』があり、その探求は人間の数ほど存在できるということになります。人それぞれの心の探求であります。

エヴェレストが初登頂されて半世紀、地球上には人類にとっての冒険や探険がなくなったといいます。しかし、その頃に生まれた私たちにとって、果たして未知なる部分がすっかりなくなってしまったのでしょうか？

著名なジャーナリストH氏はかって、エヴェレストが初登頂されたことにより『山は死んだ』と表現し、登山から離れていった。そしてH氏は未開地域へ分け入る探険の分野に参入し、ベトナム戦争報道等で活躍された。

私が山登りを始めた当初がこのような状況であり、若き日の頃H氏への反論を試みましたが、しょせん蟻に象でありました。

しかし私が山登りから得た最大のテーマは、エヴェレストが初登頂された以降にこそ開花できるものでした。多様化こそ、文化の根本的テーマであります。

『山登りはあらゆる文化的要素を含んだ行為として、文化的発展ができる！』

そして『私なりの探求』を続けてきましたが、砂漠の井戸のよう、汲み上げることの難しさを常々感じています。

青春は「カモメのジョナサン」のように、向上心にあふれています。それは青春、若さの特権であり、文化を発展させるエネルギーでもあります。しかし青春のエネルギーは、やがて飽和し、それを成熟と言います。

この飽和曲線は人によって異なります。早熟な人は「Jカーブ」、普通の人は「Sカーブ」をたどり、成熟へと到達します。

文明もまた人の成長と同じく、成熟へと向かいます。現代文明は、「環境」という飽和点で、熟成を模索しています。地球という惑星において、現代人の活動範囲に限界点が見えてきたからです。青春のごとき無限な向上発展が、現代人の衰退・滅亡を意識する段階に入ってきました。

形而下での発展、つまり目に見える、形として現れるような発展は、宇宙や深海、地底の奥底へと向かいます。しかしもう一つ忘れてならないもの、それが「人の心の中」への探求であります。

私は、人の心は「小宇宙」ではないかと思っているのです。

ですから地球第三の極、エヴェレスト山頂の彼方にあるもの、それが人類第四の極となるべく、『人の心（魂）』ではないかと思うのです。

人の心を魂と表現すると、形の見えない形而上学的神秘体験や超自然現象、神の世界へと想像されるかもしれません。またジョナサンのように神の世界に入り込み、完全なるものへの、無限で自由な愛を思い浮かべられるかもしれません。

一九七十年代のアメリカで爆発的人気を得た「カモメのジョナサン」。当時、自由を求めたヒッピー族が流行した。私もまた山登りの中に自由を見出し、「自身のために」ヒマラヤの岩壁を攀じ登っていました。しかし信仰的な神の世界には、いつも疑問を抱いていました。

ヒマラヤの大自然は、「神」を置いた世界観にとっては利用しやすい。ヒマラヤの中に在り、人の存在のはかなさは容易に感じられます。そこに「神」を設定してみると、物語にはとてもうまく当てはまります。しかしデカルト流の合理的精神、ニーチェの虚無的精神からは、単純に「神」の世界へと入れません。

絶対的・普遍的なるもの（それを神とする場合もある）と、相対的・変化するもの（代表的なも

のは人の心）との境界で、人の喜怒哀楽は日々揺れています。この揺れ動く人の心の動的な領域が、「人間の生命」ではないかと思ったりもします。

文明を持ち、文化を享受する人間社会にあって、そのエネルギーは「人の心の矛盾」ではないでしょうか！矛盾が大きいほどに、エネルギーが増大する。エントロピーの法則からすると、エネルギーは減少こそするが、増大はしない。しかしこれは熱エネルギーについての法則であり、心《魂》の法則には当てはまらないのかもしれません。

「人の心の矛盾《魂》」は、人の行為のエネルギー（エンジン）ではないかと、ふと思ったりします。「エントロピーは増大する」という宇宙の法則は物質界に当てはまりますが、魂の世界には当てはまらないのかも知れません。

すると魂とは、物質ではないのでしょうか？私にもよく分かりません。

理想を目指して実践し、いろいろな失敗を重ねてみると、目指した理想の裏側が見えてきます。そのことは、あらゆるものの存在を、より多面的に知ることでもありました。

青春の特権、夢、希望、自由、理想、衝動、等々、人類の持続的発展にとっては大切なものであります。この持続的発展のことを、私は「文明」と仮に定義しています。

さらにヒトは社会を成し、群れを成しています。その社会や群れの中で、ヒトは喜怒哀楽をも享受してきました。このことを私は「文化」と仮に定義しています。

「ヒトは文明により持続的発展を行い、文化によって喜怒哀楽を享受する」

このヒトの文明と文化からなる二重規定の中で、成長から成熟へと、ヒトは変化してゆきます。それはまた、文明的なものから、文化的なものへの変化でもありましょう。つまり、「心の在りよう」へと変わるのです。

成熟社会は物質エネルギーから見るとエントロピーが増大し、活力が低下した状態となります。一方、人の心（魂）から見ると、エントロピーが減少する場合があるのかもしれません。このエントロピーの減少とは精神が高まった状態になり、巷いう神の領域へと接近する様子を示します。

精神の高まりの究極は、「他者への愛」であると私は思っています。

自我を超越する体験を、「カモメのジョナサン」とするならば、他者への愛は、「星の王子さま」に例えられます。

「星の王子さま」の著者、アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは難解な「手帳」を残しています。そのほかにも南方郵便、夜間飛行、人間の土地、戦う操縦士なども残しています。　彼は難解な思索の中から、子供の童話のような「星の王子さま」を書いています。テグジュペリは第二次世界大戦中、フランスの飛行中隊長としてコルシカ沖へ偵察飛行に出たまま戻らなかったといわれる、操縦士でした。

飛行機の上から見下ろす下界は、ちょうど山頂から見下ろす下界にも似ています。それゆえ、アルピニストの中にも、多くテグジュペリのファンがいます。

人によってはこの物語を、「逃避の文学」と評します。しかし半世紀たった今も読みつがれ、ミュ

ージカルにもなっています。一方では精神診断学の症例にも転用され、「妄想型精神分裂病（慢性）」と診断したジョーク本（星の王子さまと野菜人格）も出版されています。

私が初めて読んだのは二十歳の頃でした。その頃の山岳図書はヨーロッパ・アルプスの登攀記がはやっていました。フランスのアルピニスト、ガストン・レビュファは美しい文体で、山岳文学を語っていました。レビュファの著作から、この「星の王子さま」を読んだのです。

そういえば、山登りも「現実逃避」の一面があります。

だからよけいに共感したのかもしれません。

しかし私が山登りに熱中できたのは、死への恐怖心からでした。

そして山登りから最も学んだ教訓は、「逃げては真の問題解決にならない」とするものでした。

つまり、「死」が怖いからといって逃げていたのでは、解決にならない。

最も「死」の危険と背中合わせにある困難な登山の中にこそ、真に解決できる道があったのです。

これは行為の麻薬ともなります。誰にでもお勧めできる方法ではありませんが、真理へのアプローチの一つです。

さらに、だからこそ他者への愛がもっと大切であることを思い知らされるのです。

このことはただ、「隣人を愛せよ」というキリストの言葉（倫理）だけで、納得できるものではありません。ぎりぎりの体験の後に、初めて納得できることでありました。

しかる後初めて、「星の王子さま」の真理が理解できるのではないでしょうか！

ミレニアム（千年紀）、西暦二千年を迎えた今、世界は小さくて複雑に絡み合った混乱の中にあります。

それはデカルトやニーチェに発する近代合理主義がもたらした、心の砂漠化と、地球環境容量における臨界点への到達からではないでしょうか！

右肩上がりの近代合理主義から、発展と調和を模索する新たな環境思想への転換は、すでに始まっております。現在それらが切り替わる時であり、どうしても混迷は避けられません。

価値の転換は、実生活における既得権の転換をともない、時間がかかります。混迷の中で、様々な思考、作為が展開されることこそ、人類にとって今、大切なことではないでしょうか。

無批判に『神』を設定することなく、『神』についても、様々な主張が展開し合って良いと思うのです。

リアリストのことを現実主義者といっています。しかしこの『現実』という言葉の捉え方には、マジョリテイからなる体制としての、時代背景があります。現代は、合理的考えが時代背景を成すがゆえ、それらの人々をリアリストと呼んでいる。

一方、歴史という長い時間帯におけるその時、その時の事実もまた、その時の現実でありました。真のリアリストとは、この両者を捉え、受け止めることができる人のことをいうのではないでしょうか。

真のリアリストであるならば、様々な事象を素直に受け入れることができます。素直に受け入れられること、それを改めて『受容の精神』と名づけてみました。

地球環境容量のもとでの発展と調和は、このリアルな精神をもってバランスを計らなければならないと、私は考えています。

文明の装置は、普通の人でもエヴェレスト山頂へ到達できるようになっています。しかしその彼方に何を見つけたか？それが二十一世紀の文化を創ると思うのです。

日常生活に満ち溢れ、人々は無意識の中に忘れてしまった様々なこと、もの、人、その中にこそ、人の真に幸せな『心』があったことを、きっと思い返すのではないでしょうか！

この無為な行為を経なければ分からない、人の心の愚かさとたわいなさに、おおいなるエールを送りたいと思う。

西暦　二〇〇二年二月　　田中文夫

［付記］

本文にあります「ダクラ」という山は、ネパール・ヒマラヤにあるＰｅａｋ２９（Ｐ２９）の別名であります。ネパール政府の正式名称は「Ｐｅａｋ２９」であり、カッコして（Ｄａｋｕｒａ）となっています。

マナスル、Ｐ２９、ヒマルチュリを称して、「マナスル三山」とも呼び、いずれの山の初登頂も日本隊がおこないました。

登山家・古川純一氏の調査によれば、「ダクラ」とは「山の丸みをおびた頂上」を意味するそうです。さらに現地では「ガンブンゲン（Ｇａｎｂｕｎｇｅｎｇ）」とも呼ぶそうです。

現地名で呼ぶ例として「エヴェレスト」は、ネパール側で「サガルマータ（大空の女神）」といい、チベット側では「チョモランマ（世界の母なる女神）」とも呼ぶ。

このように、ヒマラヤの山頂名は場所によって異なる場合が多くあります。

インド測量局が初めてヒマラヤの山々を計測した時に付した名称、「Ｐｅａｋ２９」がそのまま現在に残されているめずらしい山、さらに偶然にも地球で２９番目に高い山、これが「ダクラ」です。

ちなみに「エヴェレスト」は「Ｐｅａｋ１５」であり、計測当時にインド測量局長官だった、「サー・ジョージ・エヴェレスト」に敬意を表して、「マウント・エヴェレスト」と命名したと言われています。